Fairy Tail～魔を極めし者～

雷神の鉄槌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｉｒｙ　Ｔａｉｌ～魔を極めし者～

【Ｎコード】
Ｎ０６５２Ｙ

【作者名】
雷神の鉄槌

【あらすじ】
俺は死んでしまった。
死んだら死んだで神と名乗る美女に会うわ、転生させますとか言われるはで、混乱もした。
けど、セカンドライフを送ることができるんならまあいいか。
特典として力を貰い、俺はＦａｉｒｙ　Ｔａｉｌの世界へ転生する。
原作にいないはずの俺がいることで何が起こるかわかんない。
けど、それは俺のせいでもあるからな……どんなイレギュラーが起こったとしても俺がどうにかしてみせるぜ！

プロローグ

皆は輪廻転生って言葉を知っているよな？
これは宗教用語で、その意味は人は死んでも、また新しい命に生まれ変わると言うものだ。

初めて聞く人は、そんなことは「あり得ない！」「んなバカなことがあるかよ！」と否定するだろうな。
俺もそう思っていた。そう、過去形なのだ。

何故、過去形なのかというと……自分がその輪廻転生を体験している最中だからさ。

俺、神崎刀也は２５歳だった。恋人はいないが、充実した人生を送っていた最中だった。働きながら趣味であるアニメ鑑賞、ゲームプレイ、漫画・小説を読む……そういった毎日を送っていた。
暇さえあればジョギングとかな。
俺の就職先はアニメの映像を作ったりする会社だ。俺も新人だが、実力を認めもらっていたんだ。
そんなある日のことだ。俺が会社に出勤するために駅のホームで電車を待っていた。
その時だ。ある出来事が起こったのは……。

その出来事とは……電車がホームに近づいている時に誰かに背中を押されたんだ。いきなりのことに反応できなかった俺はそのまま重力に逆らうことができず、ホームに落ちた。その時、見たのは……
俺と同じ会社の職場で働く、同僚だった。

俺は実力を買われていたが、そいつは平凡だったため、見向きもされず、失敗ばっかりな奴だった。そんな奴は俺を妬ましく、恨んでいたようだ。表情を見ると、狂気が走っていた。

そして……俺の横からは電車が……ああ、俺、死んだわ。

グチャ！

自分が轢かれたことはわかった。意識が遠のく中、

「神崎！死ぬな！！神崎ィィィィ！！」

俺を認め、買ってくれていた上司が俺の名を呼んでいたが、俺は意識を失った。

これが、俺が死んだ時の経緯だ。次に今、俺がどうしているかと言うと……目の前に美女がいるんだよな。

これが俗に言うテンプレなのだろうか？生きている時に転生者ものの小説を読んだ時にこんな描写があったな。

そして、俺は美女に問う。

「問おう。あなたは神か」

「はい、私はあなた達が言う神の一人です。名を明かすことはできませんが」

まあ、そこは神様のご都合ってやつか。

「ええ。そうです」

「心を勝手に読むなよ」

「すみません。こういうものなので」

……まあ、そういうことにしておこう。

「それで？俺は何でここにいるんだ？
その前にここはどこよ」

「ここは生と死の狭間です。
あなたは本来、あの若さで死ぬはずではないのです」

……どういうことだ？２５歳で死ぬはずではないって……

「あなたは本来、１００歳以上生き、数々の名作とも呼ばれるアニメを作る人物だったはずなのですよ。
ですが、何が起こったのかこちらの世界……天界にあるあなたの書類の寿命がいきなり０になったんです」

「はぁ！？なんでだし」

「調べた結果、死を司る神が手違いであなたを殺してしまったためです」

……マジかよおおぉぉぉぉ！

「はい、マジです」

「俺は……どうすればいいんだよ」

俺はｏｒｚと沈んでいると、神が俺にいう。

「あなたにはこちらの神による手違いで死んでしまったため、別の世界ではありますが転生するという道があります」

ピクン！

「それは……本当か？」

俺は耳を疑った。転生だって？あの死んだらよくある異世界転生トリップってやつか！

「はい。その転生です。特典として魔力をチート級、武道の才能、物造りの才能を……あといくつかの能力を授けます。何か希望はありますか？」

……能力か……。

「何でもいいのか？」

「はい。私が授けることのできる範囲で」

「……よし、なら魔眼……眼関係の能力、ネギま！・テイルズ系シリーズ・ＲＡＶＥの魔法系全般で！」

……どうだ！

「魔眼……ああ、なるほど、伝勇伝やＮＡＲＵＴＯとかのですね。魔法関係もいいですよ。前に別の世界に転生させた人物はＦａｔｅのギルガメッシュやシロウの能力とか言っていましたが……」

「それじゃあ、つまんないじゃないか。貰った能力をしっかり使えないと意味ないし」

「なるほど……わかりました。では、特典はあなたが転生したら使えるようにしますね」

「ありがとう」

俺はお辞儀をし、敬意をはらう。

「いえいえ。では、セカンドライフを楽しんでください。行く世界は？Ｆａｉｒｙ Ｔａｉｌ〝です」

転生する世界の名前を聞き、最後に意識が薄れていった。

そして、意識が再び回復すると、

「ばぶぅ（勘弁してくれ）」

まさか、赤ん坊からやり直すとは……。それに、意識が薄れる前に聞こえた世界の名前……Ｆａｉｒｙ　Ｔａｉｌだと……まさかと思うが、この赤ん坊の状態ってことは竜に育てられたりしないよな？

って、これを言っているとフラグが立つな。さて、どうしよう……

そう、俺が思っていると、

ギャアアオォォォォォ！！！！

空から何かの雄たけび……叫び声が聞こえてきた。

俺の……まだ、生まれて間もない赤子の眼が少し、開いて見えたのは……

ミラボレアスを思い出させるような容姿の竜だった。

【人間の子どもだと？なぜこのような森林の奥地に……？……捨てられたのだな。人間とは哀れな生き物だ…。だが、生まれたばかりの子どもには罪はない】

そういい、竜は俺を翼で包む。

【あの日まで……我がお前を育てよう。これも何かの縁】

俺はその竜の暖かさを感じながら、急に眠気が襲い、眠りについた。

プロローグ（後書き）

初めて書かせてもらっています雷神の鉄槌です。
これから書いていきますのでよろしくお願いします。

プロローグ2（前書き）

11月3日に名前変更しました。

プロローグ2

俺が転生し、竜……破邪竜のヴリトラに拾われ、育てられてから早十一年。
今と前世の記憶もはっきりしているし、魔眼……直死の魔眼の制御も出来てる。
魔力で直視の魔眼の死の線を消しているので、変な気持ちになることもない。

さて、十一年間俺が何をしていたのかというとヴリトラとの模擬戦を繰り返しながら自分の使える魔法を確かめ、それと共にヴリトラに滅竜魔法を教えてもらった。

そして、原作で竜達が消えたという７７７年7月7日の朝。俺はいつもより早く目を覚まし、空を見上げていた。

「……ヴリトラ」

空を見上げれば、ヴリトラが俺を見下ろしていた。

【……】

バサ……バサ……

ヴリトラは何も言わず、その場から離れ、飛んで行った。俺にはヴリトラが何を言おうとしていたのかわかった。

?達者で暮らせラグナ〃

そう、俺にはヴリトラが言おうとしていたと思った。

ああ、わかったよヴリトラ。俺は……元気で暮らしていくよ。

だがら 〝、ぎにじないでぐれ 〝……

俺は……この世界に来て初めて涙を流した。

涙を拭いた後、俺は荷造りを始める。重いものは換装魔法の応用で空間にしまう。

そして、服も新しいのに変える。ヴリトラの羽で作った伸縮自在の服だ。歳をとるたびに大きさも変えていくというすぐれものだ。

よし、これでＯＫだな。

「行こう！フェアリーテイルへ！！」

俺は地図を出して、マグノリアと今、俺がいる地点に印をつけ、歩き始めた。

ナツ達と会うのが楽しみだな♪

第1話　破邪竜のラグナ（前書き）

今回から～ＳＩＤＥ：〇〇～とつけていきます。

第1話　破邪竜のラグナ

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺がヴリトラと過ごした森から旅立って早1年。フェアリーテイルのある街……マグノリアにかなり近づいている。
えっ？何で魔法を使っていかないんだかって？それは修行も兼ねているからさ。

この世界に転生する際に貰った特典の一つである『物造りの才能』で作った腕時計型重力装置で自分の周りだけ重力を１０倍に設定して歩いているんだ。それに加えて、手足には『呪霊錠』をつけてある。
簡単にいえば、魔力で毎日身体は補助され、それと同時に『呪霊錠』を底上げしているようなもんだ。

これを1年続けているが、未だに重力装置も『呪霊錠』もＯＦＦにしてないし、『開（アンテ）』も唱えていないので自分がどれほど魔力が上がったかもわかんないし、身体がどのくらい軽く感じるかも分かんないんだよな……。まあ、いつかわかることだからいいや。

さて、地図を見る限り、そろそろマグノリアが見えるはず……。

俺は辺りを見回し……見つけた。

「おお！あれがマグノリアか！ここから見ても結構活気のある街だな！！」

俺は走り出そうとした……その時だった。

カン！カン！カン！

「な、なんだ？」

街の方から鐘の音が鳴り響いてきた。

街を凝視してみると……街に魔物がなだれ込んできていた。

おいおい！何で魔物があんなになだれ込んできているんだよ！？折角来たのにこんなことに巻き込まれなきゃなんねえんだ！？

けど……折角、ここまで来て、加えてあんなに魔物が街に入ってきているんだし……見逃せないな！

俺は左手首に付けてある腕時計型の重力装置をＯＦＦにし、外し、

「『開（アンテ）』！」

カチャン！

ゴオォォォォォォォ！

久しぶりに『開（アンテ）』してみたが……ここまで魔力が上がるものなんだな……ふっ、行くか！

シュン！

俺は木々を足場にしながらマグノリアへ向かった。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：第三者～

ドカアァァァァン！

街になだれ込んだ魔物達をマグノリアにある魔導師ギルド、『フェアリーテイル』の魔導師達は魔物達と戦っていた。

「火竜の鉄拳！」

「アイスメイク・槍騎兵！」

桜色の髪と鱗模様のマフラーが特徴の少年と何故か上半身裸の少年は背中合わせに魔物達と戦っていた。

「ぜぇぜぇ……」

「はぁはぁ……どうした？クソ炎、もう息が上がってんじゃねえか」

「うっせえぞクソ氷。てめえも人のこと言えねえだろうが」

そう、互いに言いあいながら戦う2人に、喝を入れる人物が近づく。

「ナツ！グレイ！喧嘩をしている暇ではないぞ！」

「そうだぞ！街の人たちを魔物から守らないといけねえんだぞ！」

小さい体なのに鎧をその身に纏いながら剣で戦う紅髪の少女と白髪にも銀髪にも見える背中から悪魔の翼を生やし、手には黒い球体を宿している少女が2人の少年……ナツとグレイにそういう。

「んなこといったってよぉ！こんなにいるんじゃ、キリがねえぞ！」

「エルザ！ミラ！不本意だがこいつに同意だ！ただでさえ、今日はギルドメンバーの大半が出払っているんだぜ！！お前たちだってかなり疲労してんじゃねえか！」

ナツとグレイは2人の少女……エルザとミラにそういう。確かにグレイの言うとおり、エルザとミラも息が上がっている。

「マスターも戦っていらっしゃるが、叩けば叩くほど魔物達が増える一方なのも事実だ。だが……」

「そのマスターも先ほどな、ぎっくり腰で戦闘不可能になってしまったんだよ！」

『な、なんだとぉーーー！？』

ミラの言ったことに悲鳴を上げるナツとグレイ。フェアリーテイルのマスターにして、聖十大魔道の称号を持っているマスター……マカロフ・ドレアーが戦闘不可能になってしまったことにショックを受けている。

「ちょ、ちょっと待てよ!?ってことはなんだ?今戦っているのは、俺・クソ炎・エルザ・ミラの４人なのか!?」

「……そういうことになるな。エルフマンもリサーナもまだ、戦えるレベルじゃないしな」

ミラは２人の……自分の弟と妹の名を出す。２人もフェアリーテイルにいるが、まだ、戦えるレベルに達していないので、戦力がいないのだ。

「くそ!おっさんが……ギルダーツがいれば!!」

「居ないもののことを言うな!ギルダーツは１０年クエストに出ているのを忘れるな!」

ギルダーツ……フェアリーテイル最強候補のＳ級魔導師だ。どうやら、彼もいないようだ。

「くそっ！どうすればいいんだよ！」

「俺が全員、ぶっ飛ばしてやるぜえ！！」

意気込んで炎を拳に纏って魔物達を殴るが、

「ガアアアアアアアアア！！！」

ドカアァァァァァン！

「げふうぅ！？」

ナツはそのまま、魔物に吹き飛ばされた。

『ナツ！』

グレイ・エルザ・ミラの３人は吹き飛ばされたナツを見に行く。

ナツは目を回して、気絶していた。

「おいおい！マジかよ！？」

「ここにきて、戦力が減るとは……」

「このクソ炎！！」

グレイはナツの頬を叩く。

「起きろ！起きろってんだ！」

パチン！パチン！パチン！

何度叩いても起きないナツ。

ドシャ！

「無理だろおい……」

グレイの目の前には……街になだれ込んできたすべての魔物達がいた。

エルザは剣を構え、ミラは拳を握る。

「（マスターの腰が治るまで、時間を稼げれば……）」

「（他のメンバーがクエストから帰ってこれるまで時間を稼げば……）」

2人はこの状況をどう持ちこたえるかを考えている。3VS多種多勢の魔物達。エルザとミラの額に汗が流れ出す。

2人がいざ、動こうとした……その時だ！

「おいおい……多勢に無勢って言葉を知らんのか？って言っても魔物がわかるわけないか」

2人の前に……ラグナが現れた。

～SIDE：第三者　OUT～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

おいおい、何でマカロフさんとか、ギルダーツがいないんだよ……他のメンバーもいないし、ナツ達だけで戦っていたのか？まあ、いいか。無事みたいだし。

「お、お前は誰だ！」

エルザが俺に剣を向ける。おいおい、助けに来たのにそれはないだろう。

「俺はギルドに入ろうとここまできたら、魔物と戦っているお前たちが見えてここに来たんだよ」

「なに？そうだったのか。それは申し訳ないことをしたな」

剣を納めるエルザ。

「お前たちは下がってな」

俺は荷物を降ろす。

「な、何を言っていやがる！てめえにはあの魔物の大軍が見えねえのか？！」

「見えているさ。が、この程度の数なら問題ない」

俺はそういいながら、魔力を高める。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

俺の魔力に反応し、大気が揺れる。

「な、なんという魔力だ！マスターと同じ……いや、それ以上か！」

「マジかよ、こいつ……私たちと同じぐらいの年齢に見えるのに……」

「すげえ……ウルよりも……じいさんよりも……」

俺の後ろにいる3人は俺の魔力に驚いているようだ。まあ、ここまで魔力が多ければ、驚くよな。特典に＋して『呪霊錠』で底上げしたしな。

「さて……お仕事の時間だ。魔物達よ……覚悟しろ」

そして、一方的な戦いが始まったのであった。

俺は破邪竜の魔力を拳と足に宿し、魔物達を蹴る。

「破邪竜旋風！！」

黒い魔力の風が魔物達を一瞬で倒す。

「続けて、破邪竜の鉄拳！」

黒い炎を纏った拳で殴る。

俺の戦いを見ていた3人は驚いていた。

「破邪竜……だと！？」

「こいつ、まさか！」

「ナツと同じ、滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）か！」

まあ、普通にわかるよな。竜って技名につけているから。

「合わされ！左腕、雷！右腕、光！二つの属性を合わせて……破邪竜の雷光！！」

バシュウゥゥゥゥゥン！！！

雷と光の属性の黒い塊を魔物達目掛けて投げると、爆発を起こす。

この一撃で魔物の大半を殲滅した。

「な、なんて威力なんだ……」

「す、すげえな……ナツの滅竜魔法とは桁違いだぜ」

「もしかして、破邪竜っていろんな属性と一緒に使えるのかよ！？」

ミラ……正解だ。俺がヴリトラから教わったのは普通の滅竜魔法だった。破邪竜は相手の魔法を喰うことができる。属性なんか関係ない。魔力の籠ったものであれば何でもいいが、魔力のないものは一つしか食
えない。それは……？闇〃。そう、夜は俺のテリトリー。俺は夜を支配するもの。昼間は他の魔導師の魔法を食らうことで魔力を回復できたりする。夜は闇を食らうって感じだ。

んでもって、俺はヴリトラと別れて1年間で他の属性を滅竜魔法に加えられることを思いつき、実践してみたら見事成功したってわけさ！

さて、話は後にして……残りの魔物達を一掃するかな！

「破邪竜の……咆哮！！！」

口から黒い灼熱のブレスが魔物達を殲滅した。

後には黒い炎が少し残っていた。

『……っ！』

3人は口を大きく開けて驚愕した瞳で俺を見ていた。

「俺の名は……ラグナ。ラグナ・ギースだ。破邪竜のラグナ……フェアリーテイルに入りに来た。これからよろしく！」

俺は3人に挨拶をした。これが、魔導師ギルドに所属するグレイ・エルザ・ミラの3人とのファーストコンタクトであった。

第1話　破邪竜のラグナ（後書き）

２話目完成！
次回はそうですね……フェアリーテイルに入ってバトルところまでかな？
次回も楽しみにしててください！

第2話　フェアリーテイル

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「いや～すまんかったのぉ～。よそ者だったお主に魔物を退治させてもうて」

「いや、気にしないでくれ。元々、フェアリーテイルに入るのが目的でここに来たんだ。それに、俺の実力はそこの３人が証明してくれるだろ？なあ？」

俺は今、マスターマカロフと話をしている。マカロフさんにはお礼を言われ、若干困っている。まあ、ここに入りに来たんだし、別にいいかと思い、俺の実力を肌で感じていた３人に目を向ける。

「ああ、わたしは悔しいが、こいつには勝てないって肌で感じたぜ」

「私もだ。私たちと同い年ぐらいなのに既にマスターと同じぐらいの魔力を有しているとは……」

「俺もこいつには絶対に勝てねえってことはわかったぜ」

3人の話しを聞いたマカロフさんは頷いた。

「そうか。にしても、まさかナツに続いて2人目の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）がうちのギルドに来るとは……何やら縁を感じるのぉ。それより聞きたいのじゃが、お主はどこでそれほどの力を手にしたんじゃ？お主ぐらいの年齢には合わない強さだというのは3人の話で分かった」

……ああ、俺が年齢に合わない強さだから疑問を思ったのか。ん～どうするべきか。正直にヴリトラと毎日のようにガチンコバトルしてたとか言っても問題ないよな？

いやいや！しかし、こんな話をしても信じるわけないよな……だって竜だぜ？竜とガチンコバトルしてたなんて話を信じる……か。フェアリーテイルの人だし……。

よし！言おう！

「実は俺は1年前まで破邪竜のヴリトラと一緒に暮らしていたんだ」

「1年前……ナツと同じじゃな。777年7月7日にナツの元から火竜イグニールが消えたと聞いたが……これは本当のようじゃの」

ナツという前例があるので、やはり信じてくれた。よかったぜ。

「話をつづけるぜ。俺は赤ん坊の頃にヴリトラに拾われて、５歳頃からヴリトラに滅竜魔法を習って、６歳頃から実践をしていたんだ」

「……つまり、お主は今は大体１２歳じゃから……５，６年も竜と戦闘訓練をしとったんか！？」

物凄く驚くマカロフさん。この話を聞いていたグレイ・エルザ・ミラ、気絶したナツを看病しているリサーナにエルフマンも話が聞こえたのか驚いて口を開けている。

「……ま、まあ、よいかの。さて、お主はうちのギルドに入りたいと言っておったの」

「ああ。そのために態々、この大陸の反対側から来た」

１年間の修行も兼ねてな。

「遠路遥々よく来たの。魔導師ギルドフェアリーテイルはお主を歓迎するぞい！！っと言っても、今は大半のメンバーがいないがの」

確かに、まさか俺が来る日にこんなにギルドが静かとは……原作じゃあ、毎日が騒がしいギルドだったから、若干寂しく感じていたんだよな。時間が立てば、帰ってくるかな？

「今日は一旦、ここに泊まるがよい。明日には皆が帰ってくるはずじゃし、その後にお主のことを皆に紹介しよう」

「よろしく頼む。マカロフさん」

俺はマカロフさんにお辞儀をし、顔を上げると笑ったマカロフさんがいた。

「ワシのことはマスターやじいさん、じじいでもよいぞ。お主はこれからワシの……ワシらの家族じゃ」

……家族、か。いい響きだな。

「よろしく頼むぜ！マスター！」

改めてお辞儀をし、今日はフェアリーテイルの仮面室に連れられ、そこで休むことにした俺であった。

～次の日～

俺が起きたのはお昼前だった。まさか、こんな時間まで寝てしまうとは。誰も起こそうとしなかったのか？

俺は仮眠室から出て、受付のあるギルドメンバーの集う部屋に出ると、

パン！パパン！！

「！？」

いきなり、目の前でクラッカーの音が響く。

『ラグナ！フェアリーテイルにようこそ！！俺たち（私たち）はお前（あなた）を歓迎するぜ（するわ）！これから一緒に頑張ろうぜ（りましょ）！！！』

「うわー！」

空中には魔法で書かれた文字に、フェアリーテイルにようこそ！ラグナ！と書かれていた。

テーブルには宴の準備で、飯や飲み物が大量に置かれていた。

驚く俺の前にマスターが現れた。

「ラグナよ。こっちに来るんじゃ」

「？」

俺はマスターに連れられ、カウンターに座る。

「お主にフェアリーテイルの魔導師の証であるこの……紋章を身体のどこかに押させてもらうぞい。どこに押してほしい？色は何か希望はあるか？」

「ん～そうだな……押す場所は左腕、色は黒で」

俺は指でここっと左腕を指し、色も言う。

「あいわかった。……では押すぞい」

ペタン

紋章をつけてもらい、俺の左腕にフェアリーテイルの魔導師の証が刻まれた。

「よ～し！お前たち！今日は新しい仲間……家族を祝う宴じゃ！存分に騒ぐがいい！！！」

『おおおおおおおおおおおお！！！！！！』

マスターの言葉と共に、一気に騒ぎだすギルド。

そんな中、

「おい、爺」

マスターの孫、ラクサスが俺とマスターに近づく。

「どうしたんじゃラクサス」

「どうした？じゃ、ねえよ。俺はこいつの実力を知らねえ。納得できねえんだよ。だから……」

バチィィン！

ラクサスの身体に雷を纏う。

「俺と……戦えええええええ！！！」

ラクサスの拳が俺に振り下ろされた。

第2話　フェアリーテイル（後書き）

終わり方は変ですが、次回はＶＳラクサスです。お楽しみに！

第3話　ラグナVSラクサス

～SIDE：マカロフ～

「ラ、ラクサス！止さんか！」

ラクサスめ！いきなりラグナに殴りかかりおって、折角の宴が台無しになるじゃろうが！

ワシはラクサスを止めようとするが、ラクサスの拳はラグナを捉えた……かのように見えたんじゃが、

「何だ？この温い拳は？」

あの一瞬で、ラクサスの拳を止めたのか！？やはり、年齢に合わない強さを持っているようじゃの。

「拳って言うのはな……こういうことを言うんだよ！」

ブゥオン！

「がああっ！」

おお、ラクサスが逆に殴られてギルドの外に吹き飛んだぞい。随分、腕力もあるのぉ～。

「じ、爺さん！止めなくていいのかよ！」

「ん？グレイか。これこれ、何で服を脱いでおるんじゃ」

「はっ？ってああ！いつの間に！？」

ワシに言われて、自分が服を脱いでいることに気づいたグレイは、落ちていた自分の服を着おった。全く、その脱ぎ癖を早く治さんか。

「よし！爺さん！ラグナとラクサスの戦いを止めなくていいのかよ！」

「ふむ。止めてもいいのじゃがの、ラクサスには自分よりも強いものと戦ってほしいと思っていたところじゃ。あ奴は少し、調子に乗る癖があるからのぉ」

ラグナが来てくれたのはいい刺激になりそうじゃわい。

ビシャァァァ～～～ン！

おお！ラクサスめ、本気でレイジングボルトを放ったのぉ。これはこれからギルドがどう、成長していくのが楽しみじゃわい。

～ＳＩＤＥ：マカロフ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

ったく！いきなり殴りかかるとは……こいつ、頭が脳筋なのか？思わず、殴り返してギルドの外まで吹き飛ばしてしまったじゃないか！

「て、てめえ（怒）」

あーらら。ラクサスの奴、お怒りのご様子。でもよぉ～、どう見ても正当防衛だろ？俺はいきなり殴られたんだから。

「んで？何でいきなり俺を殴ってきたわけ？」

「決まってんだろ。俺がいない間に魔物の大軍を一人で殲滅しただって？俺は信じねえぞ！てめえみたいなガキが、大軍を相手に無傷だと？ざけんな！
俺はなあ、このギルドで一番なんだよ！最強は……俺だけでいい！！」

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。

そんなラクサスを俺は、

ガシッ！

「んな！？」

突っ込んできたラクサスを片手で止め、そのまま、

ドシャァァァン！

「ぐあ！」

地面に叩きつける。続いて、ラクサスの足首を掴み、

「礫岩迫落撃！」

ジャイアントスイングのようにラクサスを振り回して投げる。

「がああ！なめんな！」

ラクサスは空中で体勢を立て直し、上空に手を向ける。

「食らいやがれ！鳴り響くは招雷の轟き・・・天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」

空中から極太の雷が俺目掛けて降ってきた。

「アーハッハッハッハ！これで終わりだガキ！」

俺の目の前に雷が迫る。

けどな、

「（ニヤリ）いただきます！」

俺は口を開き、雷を喰らう。

ガブガブガブッ！

「アーハッハッハ……なん……だと」

自分の一番強い雷の魔法を喰われたことに驚くラクサス。

「ど、どうなっていやがる！？」

慌てているラクサスを見ながら俺は説明する。お、ギルドメンバーの大半が俺とラクサスの戦いを見ているな。説明が省けていいか。

「教えておいてやる。俺は破邪竜の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）だ。滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）が何を食べるかは……知っているよな？」

俺はそういうと、エルザが話す。

「あ、ああ。滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）は自分と同じ属性の魔法を喰うことができ、自分の放った属性の炎は喰うことができない……そう、ナツから聞いているが……」

「そう。通常の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）はその通りだ。だが、俺は……いや、破邪竜は違う。破邪竜は魔力の篭っている魔法なら何でも喰らえる」

『な、なんだってえええぇぇぇぇぇ！？』

俺の説明に大きく驚き、声を上げるギルドメンバー（マスターを含む）。まあ、驚くよな。何たって俺には放出系・射撃系・幻覚系などと言った魔法のほとんどが無意味なんだからな。

「まあ、魔力のないもので喰えるのは、？闇〃……つまり、暗い場所、夜とかは俺の戦闘のテリトリーってわけさ……俺は闇を支配するものだ」

俺は説明をしながら手に先ほど、ラクサスの魔法からいただいた雷の魔力を破邪竜の魔力と混ぜる。

「そして、破邪竜の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）には、もう一つ特典がある。それは……喰らった属性の魔力と破邪竜の魔力を混ぜることで、数倍以上の威力で相手に返す」

ゾクッ！

「（ちょっと待てよ。さっきのレイジングボルトにはかなりの魔力を込めて放ったんだぞ！？もし、それが帰ってきたら……）よ、止せ！」

「お前から売って喧嘩だろ？俺、売られたケンカは倍にして返すのが主義なんだよ」

ゴオォォォォォ！

俺の両腕にあり得ないほどの黒い雷を纏う。

「終わりだ！ブッ飛べ！破邪竜の……」

「や、やめっ！」

「翼撃！」

両腕を黒雷化させ、２枚の翼のように変化させてラクサスを吹き飛

ばす。

「うぐうぅぅあああああ！！！がっはあぁぁぁ！」

黒雷で吹き飛ばされたラクサスは吹き飛ばされ、地面に横たわっている。横たわるラクサスの体からは黒い雷がバチバチと音を立てている。

「そこまでじゃな。勝者ラグナ！」

マスターが静かに勝利者宣言をすると同時に、

「すげえ！あのラクサスに勝ちやがった！」

「嘘だろー、あのラクサスが新人に負けるのかよ！？」

「すげーなラグナ、俺と勝負しろー！」

「やめとけナツ、あのラクサスが挑んで負けたんだ。お前が勝てる訳ないだろ」

「んだと！やってみなきゃわかんねーだろーが！」

周りが段々うるさくなってきたな。まあ、これが普段のフェアリーテイルだってことだしな。

そう思っていると、

「はぁはぁ……」

息を荒くしながら立ちあがるラクサス。

「はぁはぁ……次、戦うときはぜってぇ勝つからな！！覚えておけよ！」

「ックク！いいぜ？俺はいつでも挑戦を受け付けているからな」

立ちあがるのが大変そうなラクサスに手を差し伸べ、ラクサスはふんっ！といいながらも手を握る。

立ちあがったラクサスはギルドの中へと入っていった。

俺は他のメンバーに背中を押されながら、ギルドの中に入って、宴を楽しんだのであった。

余談であるが、宴の最中、俺は間違ってジュースの樽と酒樽を間違えて飲んでしまい、大暴れをしたというのを次の日に皆聞かされて驚きはしたが、記憶がないことから本当だと思い、ギルドを壊した修理費として前から持っていたお金をマスターに渡した時のマスターの驚いた表情を忘れないことをここにいっておこう。

第3話　ラグナＶＳラクサス（後書き）

次回は……少し時間が飛んで3年後。

オリ主設定（前書き）

１２歳児のラグナの設定を書き忘れていました（汗）

オリ主設定

名前…ラグナ・ギース

性別…男

年齢…１２歳（原作６年前）

容姿…金髪で髪型はロキ（レオＶｅｒ）と同じで、瞳の色はアクアブルー。身長は１５０ｃｍ、体重は４０ｋｇ

所属…妖精の尻尾

紋章の位置…左から部分に黒い紋章

好きなもの…ヴリトラ・自然・コーヒー（子どもなのに……）

嫌いなもの…傲慢な奴・人の努力をバカにするやつ・仲間を傷つける奴・命を軽く見る奴

特徴…Ｆａｉｒｙ　ｔａｉｌの世界に転生し、転生したらしたで両

親に捨てられ、森の中で目を覚ます。
その後、破邪竜ヴリトラに拾われ、育てられる。５歳頃～ヴリトラが消えるまでの間にヴリトラとの修行と言う名の死闘を繰り返すうちに仕える魔法が徐々に増えていき、魔力の底上げをし、滅竜魔法を覚える。
自分に対する危機察知能力はもはや、超直感並み。
ちなみに、自分に向けられる好意には鈍感ではなく、気づいていたりしても自分からは何も言わず、相手が言ってくるのを待つというドSな部分を持つ。

能力…まずは、転生時に貰った特典について

？魔力チート級……チートではあるが転生後、修行によってさらに磨きがかかる。完全に使いこなすことができる

？武道の才能…アニメやゲーム、漫画に出てくる体術関係の技を使うことができる。が、修行しなければ意味はない。才能だけでは意味がないのだ。

？物造りの才能…？と同じでアニメやゲーム、漫画に出てくる武器を作ることができる。しかし、材料がなければならないし、Ｆａｉｒｙ　ｔａｉｌの世界で手に入らないものがある。そこは、この才能でその必要な材料を何故か作ることができたことにはラグナ自身も不思議に思っている。

?:魔眼…大量的な眼関係を言えば、ＮＡＲＵＴＯからは写輪眼・白眼など。ただし、写輪眼に関しては万華鏡写輪眼を使うことはできない。自分にとって大切な人を殺さなければならないからだ。しかし、写輪眼の力自体は使える。伝勇伝からは複写眼や殲滅眼である。後は……直死の魔眼などである。直死の魔眼はラグナ自身で制御し、普段の眼と他の魔眼、直死の魔眼と言った風に切り替えることができる。

?:ネギま！・テイルズ系シリーズ・ＲＡＶＥの魔法系全般…その名の通りである。修行したので使えます。

ここからは転生後、手にした能力……と言うよりも魔法。

1・破邪竜の滅竜魔法

その他…原作知識は7年後まではある。それ以降は知らない。

第4話　ギルドに入って早3年

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「グルォーーーズ！！」

今、俺は何十、何百という魔物の軍勢が目の前に広がっている。何故、俺がそんな魔物の軍勢の目の前にいるのかというと……俺はギルドに入った1年後、Ｓ級魔導師になった。
んで、今はそのＳ級魔導師のみが受けることのできるＳ級クエストをしている真っ最中だ。
依頼の内容は『ここ最近、街の近くで巨大な魔物とその配下の魔物達が大暴れしているせいで、商人たちが街に来ることも出ていくこともできません！どうか、魔物達を退治してください！』だった。

普通であれば、これはＳ級クエストではないはずなのだが、親玉がワイバーンで、しかもそのワイバーンが評議会に賞金をかけられていた魔物だった。何で１００年以上生きている危険なワイバーンらしい。
そのクエストが評議会からＦａｉｒｙ　ｔａｉｌ……俺に回されてきた。評議会からのクエストなのでさすがに断ることができず、今に至る……というわけさ。

「おいおい……報告にあった魔物の数……増えていないか？」

どうやら、俺がここに向かっている間にどんどん数を増やしていった魔物達は、ゆっくりとこちらに向けて近づいてきている。幸い街は非常警戒態勢のため、城壁のように防御魔法壁を展開している。これで、俺が本気を出しても街には被害がないな。

俺は眼……魔眼の一つ、直死の魔眼を展開する。両手には換装で呼び出した剣……テン・コマンドメンツ。

「狩らせて貰うぞ、貴様らの命を！」

そう言い、俺が駆けだす。それと共に魔物達も俺目掛けて駆けだす。

「音速の剣・シルファリオン！！」

ザシュシュシュ！！

高速で攻撃し、正確に？線〃を切っていく。それだけで、斬られた魔物達は死に絶える。

「そらそらそらそら！どうしたどうした！！軍勢の癖に突っ込むことしか脳がねえのか！！」

俺は剣の形状を変える。

「爆・速・連携！爆竜の翼！！」

シルファリオンからエクスプロージョンにすることで、爆撃を魔物の軍勢に飛ばす。

「グオオォォォォォ！！！」

爆撃を喰らった魔物達は悲鳴を上げながら消滅していった。

「キシャアアアア！！」

コウモリみたいな魔物が俺に向かって超音波らしきものを放つが、

「メルフォース！」

コウモリモドキを吹き飛ばし、超音波を消し飛ばす。

「キャオオオオオ！」

今度はオオカミと爬虫類が合体した魔物が俺の背後から近づいてくるのがわかった。

ザシュン！ザシュン！

「双竜の剣・ブルークリムソン」

それを俺は双剣・炎と氷の剣で斬りさく。生憎、俺には死角はないんでな！

「ブルウゥゥアアアアアアア！！！」

今度はイノッサスモドキかよ……はあ、何なんだよこの魔物達は。よく見たらワイバーンもリオレウスに似ているし。

「ああ、もう！邪魔くせえ！シルファリオン！」

ザシュ！ザシュシュシュ！

突進してくるイノッサスモドキ達の？線〃を切り、その命を狩り取

る。

「このまま、一気にぶっ飛ばすか……破邪竜の咆哮！！」

口から黒いブレスを吐きだす。炎や雷だと被害が大きいので、今回は通常のブレスだ。

ドカアァァァァン！！

魔物の軍勢をあらかた吹き飛ばし、レウスモドキの前に立つ。

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

ん！？何やら紅いオーラを纏い始めたぞ！？あれ、何か怖いぞ！

「ギャオオオオオオオ！」

バシュン！

「げっ！火球撃ってきやがった！メルフォース！」

火球を風圧で吹き飛ばそうとしたが、威力が衰えないし、吹き飛ばないだと!?

「ちぃ!」

その場から離れると、火球は目標を失い、地面に当たると、

ゴオオォォォォォォォォ!!

巨大な火柱が上空へと伸びていった。

ギッギッギッギ……

「ま、マジで?」

俺はゆっくりレウスモドキを見上げる。通常の火球とそんなに変わらなかったのに……強いなこのリオレウスモドキ!
ナツじゃないけど、燃えてきたぜ!

俺はテン・コマンドメンツを仕舞う。

「行くぜレウスモドキ！」

俺はレウスモドキへと駆けだした。

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

～ＳＩＤＥ：第三者～

レウスモドキに駆けだしたラグナ。そんなラグナに火球を何発も放つレウスモドキ。火球がラグナに迫るが、

ガプガプッ！

ラグナは自身に飛んでくる火球を走りながら喰い始める。

「クハァー！いい味の炎だな！ナツがいたら喜ぶだろうな。それと……喰ったら力が湧いてきた！」

「ギャオオオオオオオ！」

レウスモドキは自分の火球を喰われたことに驚き、ブレスを放つ。

「ハッ！面白い！滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）である俺にブレス勝負を持ち込むか…いいだろう！どちらのブレスが強いか、勝負と行こうか！破邪竜の咆哮！！」

ラグナは先ほど、喰らった火球の魔力と一緒に黒い灼熱のブレスを放つ。

レウスモドキとラグナのブレスが激突する。二つのブレスが激突すると上空へ炎の柱が伸びていく。

「ギャオオオオオオオオオオ！！！」

「俺は……滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）だあぁぁぁぁ！！！」

叫ぶラグナ。ラグナの感情が高まると共にブレスの威力が増す。そして、

シュドオォォォォォン！

「ギャアオオオオオオオオオ！？」

よろけるレウスモドキ。

ラグナはその隙を逃さないで追撃をかける。

「破邪竜の鉄拳だ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！！！！！！」

破邪竜の鉄拳の連撃をレウスモドキに食らわすラグナ。ゆうに１００を越える打撃は全てレウスモドキの体にぶつかる。

「グ、グオオオオオオオオッ！！」

苦しむレウスモドキは翼を広げ、飛翔する。

「ギャオオオオオ！！！」

そのまま、飛翔しながら火球を放つ。

火球はラグナの周りに落ち、爆風を起こす。

「ちぃ！逃がすかあああああ！！」

ラグナは風の魔力を足に溜め、一気に爆発させる。

「うおおおおおお！！破邪竜の剣角！！」

レウスモドキに突っ込みながら黒い炎を纏ったラグナはそのまま、
レウスモドキの腹に激突し、貫いた。

「ギャオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

今までにないほどの痛みを感じ、悲鳴と言う名のの叫び声を上げる
レウスモドキ。

「終わりだ！破邪竜剣・絶刀！！」

両手首から黒い炎を纏った剣を出し、その剣でレウスモドキの身体
中を高速移動しながら切り刻んでいく。

「これが終焉だ。お前の身体中にあるすべての？線〃を切り裂いた」

「ガアアアアアアアアアアア！！！」

レウスモドキの尻尾が、翼が、足が、鱗が、首がバラバラにされ、
上空から地上へと堕ちていった。

それを見届けたラグナは、街の方へと向かった。

～街～

街の門前に立つラグナは門の中にいるであろう者たちに声をかける。

「お～い！魔物達は全部倒したぞ！！ここを開けてくれ～！」

「っ！？ほ、本当か！あの軍勢を……たった一人で！？」

「ああ。信じられないなら見てくるがいいさ」

「わ、わかった！門を開けろ！！対物理・魔法障壁解除だ！急げ！」

『了解！』

門の中からそんな指示らが聞こえると、少しして門が開く。

「お疲れ様です！さすが、フェアリーテイルの魔導師、『妖精皇帝（フェアリーエンペラー）のラグナ』様ですね！」

「止してくれよ。その二つ名をつけられた日にはエルザが顔を赤らめて、ミラ達が怒り狂った目でエルザと喧嘩したんだぜ……俺的には『剣聖のラグナ』か『破邪竜のラグナ』、『極魔神ラグナ』の方が馴染みがあるんだからよ」

ラグナはため息をつきながら門番に言う。そこへ、

「ありがとうございましたラグナ殿」

「おお、会長さんか。気にしないでくれ。これは依頼出来たんだし、当然のことをしたまでだぜ」

涙を流しながらラグナの手を握るこの街の会長。

「これは報酬のお金です。受け取ってください。それとこのカギをどうぞ」

そう会長はラグナにいい、お金の入った封筒と銀色カギ3本を渡した。

「これは星霊魔法……星霊召喚に必要なカギじゃないか。銀色か。この星座の形は……アンドロメダ座・ペガサス座・ペルセウス座だな。これ、もらってよかったのかよ」

「はい。あんなにも多くに魔物の軍勢を退治していただいたのです。これはこの街の住民達すべてのお礼です」

会長にそう言われ、ラグナは頭を掻きながら頷いた。

「わかりました。街の住民達の想いを無碍にはできないしな。ありがたく頂いておきます」

そういい、ラグナは報酬のお金を懐にしまい、カギをベルトにつけ

た。

「では、俺はこのことを評議会に報告しなければならないので、失礼させてもらいます」

「はい。もし、また、何かがありましたらその時もよろしくお願いします」

「ええ。では」

そういい、ラグナはその場から消えた。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

はぁ～まさかカギをもらうとはな。まあ、契約はあとでいいか。

あーあ。評議会にも提出する書類もあるし、めんどいな。エルザ達

に早く会いたいぜ。さっさと書類を提出して、エルザ達に会いに行かないとな。

俺は歩きながら書類を書き始め、評議会へと向かうのであった。

第4話　ギルドに入って早3年（後書き）

今回はラグナだけ、出ました。次回はフェアリーテイルに戻ったラグナを迎えたのは……。
次回もお楽しみにしててください！

第5話　帰還、そして喰われるラグナ

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「では、またのお越しを」

「……ああ」

俺は今、ようやく評議会に提出する書類を出し終わったところだ。
全く！すぐに終わるものかと思ったらこんなものまで出してきやがって！

そう思いながら俺は掌で握っているモノ……？聖十大魔道（せいてんだいまどう）〟の証であるバッジだった。

何故、俺がこれを持っているかというと……それは今から1時間ほど前に遡る。

魔物の軍勢を討伐し終えた俺は書類提出のため、会議室で待っている魔法評議員二ノ席オーグ・魔法評議員三ノ席ミケロが待っている

らしいのでそこに向かっている。そこで、俺は2人の人物にあった。

「あら？妖精皇帝（フェアリーエンペラー）じゃない」

「ウルティアか。久しいな」

会議室前で会ったのはウルティアだった。その横には、

「久しぶりじゃないかラグナ」

「……ジークレイン」

そのもう一人は聖十大魔道（せいてんだいまどう）の称号を持つジークレインだった。

「何だ？あって早々嫌そうな表情をして？」

「お前の笑顔は胡散臭いんだよ。作り笑いしやがって」

俺が嫌味を言うとジークレインは笑う。

「クックック。こうでもしていないと爺共とは一緒に仕事何ぞできないんでな」

「それは言えていますね。クスクス……」

笑い始めるジークレインに釣られてウルティアまでも笑い始める。
全く……何なんだこの2人は？

「それより何でお前たちがここにいるんだ？誰かを待っていたのか？」

「ああ。お前を待っていたんだよ」

ジークレインが俺を指差す。

「俺？」

俺は首を傾げる。何でこいつらが俺のことを待っているんだ？何かしたっけ？う～ん……思い当たる節がないな。

「まあ、話は中に入ってからだ。お前のギルドのマスターもいるぞ？それにジュラも来ている」

ジュラさんも？それにマスターまで……何でだ？

「ほらほら、さっさと入ってください」

そう言いながらウルティアが俺の腕に抱きつきながら俺を引っ張る。

……ウルティア、俺を引っ張るのはいいが、胸が当たっているんだが。まあ、得と言えば得だが……一瞬、背筋が寒く感じたのは俺だけなのか？

そう思う俺を会議室に連れ込むウルティア。俺が会議室に入るとドアを閉めるジークレイン。

中には魔法評議員二ノ席オーグ・魔法評議員三ノ席ミケロ、以下数名の評議員、うちのギルドのマスターに、蛇姫の鱗（ラミアスケイル）のジュラさんまでいた。一体、何なんだ？

「ラグナ」

「マスター。どうも」

俺に近づてきたマスターは俺を見る。

「怪我はないようじゃの。安心したわい」

「ええ、まあ。あの程度の魔物の軍勢なんて俺の敵じゃないですよ。それにワイバーンも」

レウスモドキは結構楽しめたけどな。

「……ふぅ、ワシが何故ここにいるのかが不思議なのじゃろ？これから始まる話を聞くのじゃ」

「？はぁ……」

そう、マスターが言うと、会議室の明かりが消え、薄い光が発し始める。

「ラグナ・ギース！我ら、評議会の依頼を達成したのだな」

「オーグさん、はい。これがその書類です」

名を呼ばれ、オーグさんに書類を提出する。それを見て、驚くオー

グさんとその書類を隣から見るミケロさん。が、何やら納得した表情をする。

「ラグナ・ギース！お主には魔法評議員二ノ席オーグ」

「及び、魔法評議員三ノ席ミケロの名の元に」

「「そなたに聖十大魔道（せいてんだいまどう）の称号を与える」」

2人にいわれ、俺は……

「……」

あまりにも突然な出来事に驚き、固まってしまった。

「　これ、何か反応を見せんか」

オーグさんに言われて再起動する。

「すみません！ですが、聖十大魔道の意味が分からないんですけど」

うちのマスターがそれらしいけど、あまり話さないし何も言わないから良く知らない。

「確かに普通の魔導師では知るはずもなかったな、説明してやろう。聖十大魔道とはな、大陸で特に優れた１０人の魔導士に与えられる称号のこと言うのだ。最近では、ジークレインや蛇姫の鱗（ラミアスケイル）のジュラ・ネェキスが成っておる。前から言えば、お主の所属するマカロフ・ドレアーがいるな」

「しかし、今は既に１０人埋まってしまっている。のだが、聖十大魔道の１人で幽鬼の支配者（ファントムロード）のマスターであるジョゼ・ポーラは、最近良からぬ噂が立っておるのだ。そのため、評議会はジョゼの聖十大魔道の称号を剥奪し、お主を新たな聖十大魔道の一人のすることが決定した」

オーグさんとミケロさんにそう言われた俺は驚きすぎて、開いた口がふさがらなくなった。おいおい、これじゃあ、ジョゼが原作開始してから、俺のことを目の敵にするんじゃねえか？

まあ、結局貰ったんだがな。一番受け取った理由がミケロさんが受け取らないとギルドを解散させる宣言されて、マスターが口をはさんだが、ギルドのメンバーが起こした器物損害など、その他もろもろを突かれ、黙らされてしまった。

別にいいか。俺が聖十大魔道の一人になるだけでギルドに被害がないんならな。

まあ、そんなわけで俺の掌に？聖十大魔道〟のバッジがあるわけなんだよ。やれやれ、先が思いやられるぜ。

「これ、ラグナ。何を黄昏れておる。早くこんか」

「おっと、いけねえ。すまんマスター」

マスターに声を掛けられて現実に戻る俺。今、俺とマスターは魔力で飛んで、ギルドに帰っている最中だ。

「しっかし、さっきから背筋が寒いんだよな……ギルドに帰ったら嫌なことがありそうな……」

「何じゃ、そんなこといつものことじゃろうて。お主が他の街で女性と仲よくした日にギルドに帰ると必ずと言っていいほど、エルザ達に迫られているじゃろが。全く、男としてお主が羨ましいぞ。あのエルザやミラ、カナにモフモフさせてもらえて」

顔を赤らめながら言うマスターに俺は言う。

「マスター。あれは確かに天国ち言ってもいい具合の心地よさだがな、それと同時に地獄に近くに逝けるんだぞ？3人に胸で顔に押しつけられたら息ができず、窒息死することが何度もあったんだぜ？」

「それもまた、男のロマンじゃ」

「小さいロマンだな」

「喧しいわ！」

ふん！といい、スピードを上げるマスター。それに続いて俺もスピードを上げる。

「それより、ラグナよ。あの件は考えてくれたかの？」

あの件……ああ、あれね。

「俺を次のギルドマスターにするって言うやつですか？」

「そうじゃ。お主なら人望もある。知名度もある。実力もワシ以上。

これほど、マスターになることができる人物はお主以外におらん」

……俺がギルドマスター……ねえ。

「けどよ、ラクサスはどうなんだよ？」

「あ奴はダメじゃ。力に執着しすぎておる。今のあ奴をギルドマスターの候補にするわけにはいかん」

だよなぁ。……どうするかね。

「まだ、時間をくれ。俺にはまだ、ギルドメンバーの命を背負うほどの器はないんだ」

「……そうか。わかった。じゃがの、ワシはお主ほどの逸材、今後１００年以上は現れないと思っておる。そのことを心に刻んでおいてくれ」

「……はい」

……俺はこの、マスターの件にどういった答えを出すのか、まだわかんないな。

それから数分後、

「おお、見えてきたぞ」

「おお、帰ってきたんだな俺。一週間ぶりだぜ」

一週間ぶりのギルドに感激する俺。

「皆のもの！今帰ったぞ！！」

マスターが先に入って大声で言う。

「マスター、お帰り～！」

「爺さん！お疲れ様だな！！」

「じっちゃん！お疲れ～」

ギルドの中からは元気なリサーナ・グレイ・ナツの声が外にまで聞こえてきた。さて、俺も中に入るかな。

俺がギルドに入ると、

「おお！ラグナ！帰ってきたのか！！」

「ラグナ！俺と勝負しろ！！」

「ラグナ、お帰り！！」

ダキッ！

リサーナが俺に抱きついてきた。おお、ミラに似て、スタイルが近づいてきたな。１４歳なのに結構あるな。

俺はリサーナの頭を撫でていると、

「ラ～グ～ナ～」

「帰ってきたのね～」

「リサーナにまで手を出しているのか？」

ゾクッ

背筋が凍る。ギッギッギッギっと音を立てながら後ろを向くと、そこにいたのはエルザ・カナ・ミラの3人だった。

「や、やあ、3人とも。今帰ったぜ」

汗をダラダラ流しながら3人に帰ってきたことを言うと、3人はにこやかな笑みを浮かべる。

「ああ、お帰りラグナ」

「会いたかったわ」

「だけどな、その前に聞きたいことがあるんだよ……」

ズシン……ズシン……

何故か3人が歩くたびにそんな音が聞こえ、いつの間にかリサーナが俺から離れ、テーブルに座っていた。

ガシッ！

「ヒッ！」

3人同時に方を掴まれ、

くんくん……くんくん……

3人同時に俺の匂いを嗅いだ。

そして、

ギロリ！

3人同時に俺を睨む。

「ラグナ。お前から私達やギルドメンバー以外の女の匂いがするんだが……」

「どういうことか、説明してくれるわよね？」

「事と次第じゃ……」

エルザが天輪の鎧で剣をいくつも浮かせ、カナは指と指の間に何枚ものカードを挟み、ミラはサタンソウルして、俺を見る。

「ま、待て！落ち着け！話を聞け！」

「「「問答……無用！！！」」」

剣が、カードが、黒い波動が俺を襲う。

「ぎゃあああああああああ！！！」

そのまま俺はギルドの仮眠室のある場所まで吹き飛ばされた。ギルドに穴を開けながら。

ピクピク……

か、身体中が痙攣する……ぜ。

ギリッ

顔を上げるとそこには、武装解除したエルザ達がいた。

「ま、まあ……他の女の匂いのことは見逃してやろう」

「だ・け・ど……」

「わたしたちの相手はしてもらうわよ。カナ！」

ミラはカナに何かを指示している。

「わかっているわよ！」

そういい、カナはカードを何枚も仮眠室の入り口、窓に『封』と『防』と書かれた書かれた、俺特性カードを貼り付ける。

「ま、さか……」

俺の脳裏にあることが過ぎった。

「そのまさかだ／／／」

「一週間分、タップリ絞らせてもらうわよ／／／」

「覚悟しろよ、このヤロー／／／」

顔を赤らめる3人は来ている服を脱ぎ捨て、俺に迫る。

「ま、待て！早まるな！？」

俺はとにかくこの場から脱出しようとするが、

バシュン！カチャ！

「んな！？」

俺の手足はベットに磔にされた。

「フッフッフ。これで逃げられないわよ」

カナがカードをチラ見させる。

「げっ!?そのカードは」

「そ。あなたが敵捕縛ように作ってくれたオリジナルカードよ♪」

「んなカードを仲間相手に使うな!!」

全く!俺が作ったカードをなんてことに使うんだ!

「フフフ。知っている?この言葉。『使える物は使え。何事にも全力で』って言葉」

「い、意味が違うううううううううう!!」

3人が俺の上に乗る。

「「「いただきま～す♪」」」

笑顔で俺に手を出す。3人。

「ノ、ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

俺はその後、3人に美味しく頂かれてしまったが、逆にし返したことをここに書いておこう。

第5話　帰還、そして喰われるラグナ（後書き）

次回もお楽しみに～

第6話　彼女になった理由。ギルダーツ登場し、100年クエストへ

～SIDE：ラグナ～

うぅ……窓から差し込む太陽の光が黄色を通り越して黄金に見えるぜ……。

あの後、俺はエルザ達に途中まで喰われていたが、途中から俺が喰う側になり、先ほどまで3人を喰っていたところだ。

その3人は全身を俺の汁で真っ白になってベットに横たわっている。お腹は不自然なほど出っ張っている。この出っ張っている理由は俺の出し汁が原因であることをここに述べよう。

「ま、まだラグナの感触が残ってるぞ。オマケに腹の中からタプタプ音がするし／／／」

「わたしもだぞ。まあ、二十回も中に出されればそうなるだろうな。ちなみに、私は十七回出された」

「結局、最後まで意識を保っていたのってエルザだけよね。私は十四回辺りで意識がぶっつり切れてるわ。改めてエルザが化け物だなって感じたわ。これ、もし危険日だったら絶対に妊娠しているわよ」

『うんうん……』

3人は同時に頷いた。ちなみに、上からエルザ・ミラ・カナである。
3人はベットの上でお腹を触っている。その3人を見ながら俺は風の魔法を使い、部屋に溜まったイカ臭い、生臭い匂いを浄化していく。
全く、クエストから帰ってきてすぐにするんだからなこの3人は。
本来の半分しかでなかったじゃないか。

それにしても、本当に信じられないよな。この3人が俺の彼女になるなんて。フェアリーテイルに来た当初は考えもしなかったよ。

そもそも、何で3人と俺が彼氏彼女の関係なのかというと……そう、あれは1年前、俺の14歳の誕生日の日に起こった。

〜1年前〜

1年前には、既にS級魔導師だった俺は当時、同じ時期にS級になったエルザとミラ、S級魔導師が3人いるのでカナが来て、計4人でS級クエストに挑んでいた。

そのクエストの内容は『村はずれにある洞窟に住みついてしまったグランドゴーレムを退治してほしい』というものだった。

グランドゴーレムとは、昔魔導科学者だった男が実験中に偶然にも出来てしまった自立型ゴーレムだ。
強さは通常のゴーレムのおよそ数十倍。大きさは通常のゴーレムと同じだが、パワー・耐久力・スピードは通常のゴーレムの比ではない。

そのため、フェアリーテイルにS級クエストとして、依頼を出されていたのを俺が見つけ、行くことになったのだが、その日は偶然にも俺の誕生日で俺が帰ってくるのが遅れるとかいう理由でエルザ・ミラ・カナが俺に着いてきたんだ。

んで、その洞窟にいるであろうグランドゴーレムを見つけ、戦闘を開始したのは良かったんだが……このグランドゴーレムの強さがマジで異常だった。

エルザの放つ剣を全部弾き、ミラのサタンソウルの技も効かず、カナのカード魔法も効かなかった。
そこで、滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）である俺の出番だった。なのだが……グランドゴーレムを破壊したら、突如、グランドゴーレムが爆発と共に黄色いガスのようなものを噴出した。

そのガスを吸い込んでしまった俺は突如、身体に痺れが起こり、倒れてしまったんだ。

俺はいったいこのガスは何なのかと思い、俺の持つ魔物図鑑、魔法生命体一覧の中からグランドゴーレムのことに書かれた蘭をカナに読んでもらった。

黄色いガスの正体は……超強力な痺れガスだった。しかもただの痺れガスでなく……遅効性の……興奮剤のようなものだったのだ。

その説明を聞いたエルザとミラ、読んだカナは顔を真っ赤にしていた。そして、視線は俺に向く。

3人は同時に頷き、俺に近づいてきた。無論、嫌な予感がした俺は動こうとしたが動けなかった。

くっ！いくら滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）である俺でも毒ではなく、しかも魔力の篭っていないものなど、食べることができない。故に、自分で解毒することができなかった。

魔法を使って解毒することもできたが、麻痺のせいで思ったように魔力を使うことができず、今、エルザ達が俺に迫る。

「ラグナ……お、大人しくしていれば……ま、麻痺も早く取れるぞ

／／／」

「そ、そうだぜ？お、大人しくしていた方が早く治るぞ／／／」

「あ、あんたは抵抗しないで私たちに委ねて／／／」

エルザは鎧を消し、服のボタンを外していく。ミラは上着を脱いで服のボタンを外していく。カナはジャケットを脱いで、水着のような格好のヒモを取り外していく。

さすがの俺もこんな光景を黙って見ているわけにはいかなかった。

「ま、待て待て待て！？いくらなんでもこ、こんなことでお前たちの初めてを奪う気はないぞ！？早まるな！！俺だったら自然治癒能力が高いから時間が立てば治るはずだ！」

俺の説明も虚しく、３人には効かなかった。それどころか俺の身体はだんだん、熱くなっていく。ぐっ！これが遅効性の痺れガスの効力か……。

ううう……身体が熱い／／／

「ラグナ……私たちはお前だから、こんなことをするのだ／／／」

「そうだぞ。いくら、私たちだって好きでもない奴とこんなことをしようとは思わない／／／」

「私たちを惚れさせたこと、後悔してね／／／」

そう言いながら服を脱ぐ、エルザ達。

「ま、待て――――――――――――――――!!あ、アッ――――――――――――!」

そして、俺は3人に喰われたのであった。

～回想終了～

というわけなんだよな。

あれからなんだかんだで俺は3人をちゃんと愛している。ってか、ギルドにいた時、そんな好意を抱かれていたら俺、気づいているんだけどな……。
心の底でそういった感情を出さないようにしていたのかもしれないなあのときは。

んで、あのO・K事件（俺が喰われた事件）の時に今までいわなかった自分の気持ちを言ってしまったってことかな？しっかし、１４歳の誕生日は衝撃的で未だに鮮明に覚えているぜ。

さて、話はこんなところかな？3人のために飯でも持ってくるかな。
そう思い、俺は部屋を出て、カウンターのところに行くと、そこには、

「おお！ギルダーツじゃねえか」

黒いマントを着ているおっさん……ギルダーツがマスターと話していた。

「ん？おお、ラグナじゃねえか」

「何してんの？」

俺はギルダーツの手にしている紙を見る。そこには、

「１００年クエスト！？」

そう、原作で3年前にギルダーツは１０年クエストのさらに上の１００年クエストを受け、黒竜と遭遇し、大怪我をした。そうか。もうそんな時期か。

「そ。俺はS級魔導師になって結構長いからな。俺にこれが回ってきたんだよ。お前でもいいが、まだ若い。若者をこんな危険なクエストに行かせるわけにもいかないしな」

よっこいせっと言いながら席を立つギルダーツ。

「んじゃ、マスター。行ってくるぜ」

「気をつけるのじゃぞ」

「ギルダーツ！早く帰ってきて、俺と勝負しろよなこの野郎！！」

ナツは勝負の約束をした。それを聞いたギルダーツは言う。

「あーはっはっは！俺と勝負？いいぜ？けど、だったら今よりもっと強くなっておいた方がいいぜナツ」

キリっとナツを見るギルダーツ。ナツは金縛りにでもあったかのように動かなくなった。

「じゃあな」

「ギルダーツ！これを持って行け！」

背を向けるギルダーツに俺は小瓶を渡す。

ガシッ！

「ん？何だこれ」

「それはどんな重症な怪我でも治す、俺特性秘薬だ！持っていって損はないぜ？」

「……おう！ありがたくもらっておくぜ」

そういい、今度こそギルダーツはギルドを出て、１００年クエストに向かったのであった。

ギルダーツ。３年後、あんたは驚く事実を知ることになるんだ。元気な姿をあんたの娘に……カナに見せてやれよ。

俺はギルダーツの無事を祈った。

第6話　彼女になった理由。ギルダーツ登場し、１００年クエストへ（後書き）

はい。今回はエルザ達と恋人になった時の話しとギルダーツ、１００年クエストへの話しでした。
次回は……1年後、エルフマンがあの姿を制御できなかった時の話です。
何でこんな話を書くかって?リサーナを救うためさ!
次回もお楽しみに!

第7話　原作の一つ、破壊完了

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

ギルダーツが１００年クエストに旅立って1年が経過した。俺はいつものようにＳ級クエストを終え、ギルドに帰ってきた。

すると、

「ラグナ！俺をＳ級クエストに連れて行けコンニャロー！！」

火を噴きながら俺に近づくナツ。俺は頭上に？を出す。何でいきなりＳ級クエストに連れて行けだぁ？意味わかんねえ。

「ナツ。何で連れてって欲しいんだ？」

「ああん？ああ、リサーナがな、ミラとエルフマンと一緒にミラのＳ級クエストに連れて行ってもらったのが羨ましいんだよ！！」

？！何だと！？！？今日、今日なのか！？エルフマンが接収ビースト（テイクオーバー）ソウルを手に入れた代償として、制御できず、リサーナを傷つけ、リサーナがアニマを通ってエドラスに行く日は！？

何か胸の中でのざわめきを感じているかと思えば……くそっ！！

俺は荷物を降ろし、身軽になる。それを見て不思議にい思うナツ。

「どうしたんだ？」

「嫌な胸騒ぎがする。ちょっと行ってくる。お前は待っているろ」

突き離すように言うとナツは俺に突っかかる。

「行くのか？俺も……「駄目だ。S級になっていない奴を連れていくわけにはいかない。ミラがエルフマンとリサーナを連れていったのは2人の魔法の助けになるものがあるからだ。とにかく、俺は行く」ちくしょおおおお！！俺も連れて行けってんだあああああああ」

叫ぶナツを無視して、俺はギルドを飛びだしてミラ達のいるところへ向かった。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：第三者～

ラグナがミラ達がいる谷へ向かっている頃、ミラとリサーナは窮地に立たされていた。原作通り、エルフマンは接収（テイクオーバー）したビーストソウルを制御できず、暴走していた。

「グオオオオオオオオ！！！」

エルフマン（暴走モード）は木々を倒し、谷の岩を破壊しながら歩いている。その先には、傷ついたミラとそのミラを支えるリサーナがいた。

「ミラ姉、大丈夫！？」

「あ、ああ。けど、あのバカ！接収（テイクオーバー）に失敗しやがって！」

ミラは傷ついた身体を押えながらエルフマン（暴走モード）を見る。

「だ、大丈夫だよ。私に任せて！」

そう、ミラにいいエルフマン（暴走モード）の前に立つリサーナ。

「エルフお兄ちゃん。落ち着いて？一緒に帰ろう？フェアリーテイルに……」

両手を広げていうリサーナであったが、

「ウガアアアアアア！！！」

エルフマン（暴走モード）はその大きな腕で、リサーナを吹き飛ばそうとした。

その時である！

ガシッ！

「えっ！？」

「ラグナ！？」

リサーナの危機にラグナが駆けつけたのだった。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

ふぅ……あぶねえ。間一髪じゃねえか。普段のスピードじゃ、間に合いそうになかったから腕時計型の重力装置をＯＦＦにして、『呪霊錠』を解いてよかったぜ。

「うおりゃあああああああ！」

俺はビーストソウル状態のエルフマンの腕を掴み、持ち上げて投げ飛ばした。

ドスゥゥゥン！

「グオオオオオオオオオオ！」

痛みで悲鳴を上げるエルフマン。

「おい、大丈夫か！ミラ！リサーナ！」

俺はすぐ、2人に近づく。リサーナはほぼ無傷だ。ミラは結構重傷だな。とにかく治療するか。

俺は両手を横たわるミラにかざし、回復魔法を使う。滅多に使わないが、しっかりこちらも修行していたので巧く治療できるんだよな。

「ラグナ……なんでお前がここに？」

治療を受けているミラが痛みに耐えながら俺に聞く。

「クエスト終わらして、帰ってきたらいきなりナツに「俺をS級クエストに連れて行けコンニャロー！！」って言われてな。訳を聞いたらミラのS級クエストにエルフマンとリサーナが付いていたからって聞いたんだよ。それで、何か胸騒ぎがして、急いでここまで来た」

「そうだったのか……その胸騒ぎ、的中だな」

ドスン……ドスン……

「の、ようだな」

俺は治療の手を止め、音のする方を見ると、血迷った目で俺を見るエルフマンがいた。どうやら……一度、気絶させた方がいいな。

俺は2人を守るように前に立つ。

「2人はそこで大人しくしていな。ミラの傷は完全には癒えていない。リサーナ、ミラのこと頼むぞ」

「う、うん！（やっぱり、ラグナってかっこいい／／／こんな時になんだけど）」

ん？リサーナの顔が赤い？まさかとは思うが――――じゃないよな？まあ、いいけど。さて、と。

俺の目の前にはお怒りのエルフマン（暴走モード）がいる。どうやって、気絶させるかね。頭を狙ったら危ないし……当身でもいいけど、力加減を間違えたら危ないしな……仕方ない。氷結して意識を奪うか。

「グガアアアアアアア！！！」

ドンドンドン！

俺に迫るエルフマン（暴走モード）

「はあああああ！」

俺の足元に青い魔法陣が展開される。

「凍てつく氷柩！」

ピキイィィィィィィン！

「グウガアアア……ガアアア……ガア……」

巨大な氷の塊の中で動かなくなるエルフマン（暴走モード）

そして、

ピキィ……ピキキキキ！パリイィィィン！

氷が割れると共に元の姿に戻るエルフマン。完全に意識を失っているようだ。

「ふぅ……これで一安心だな」

俺はエルフマンに近づき、その巨体を肩に担ぐ。

「リサーナ。ミラに肩を貸してやれ。このまま、ギルドに連れて行くぞ」

「えっ？う、うん」

俺に言われ、ミラに肩を貸すリサーナ。

「よし、近づいて俺の肩に置くんだ」

「こ、こう？」

リサーナが俺の肩に置いてあるのを確認し、俺は魔力を溜め、頭にギルドの位置を思い浮かべる。

「行くぞ。転移！」

シュン！

俺たちの姿は谷から消え、次に現れたのは……

シュタ！

ギルドの前だった。

「よし、着いた」

「ええっ！？ここ、ギルドだよね！？何で！？！？」

リサーナは驚き、声を上げる。が、今はそんな暇はない。

「それよりもミラの傷の手当てをするぞ」

「あっ！う、うん！ミラ姉」

「あ、ああ……」

俺たちはギルドに入ると……

「おお！ラグナもど……ミラ！？どうしたんだよその傷は！？」

ナツが出迎えたが、ミラの状態を見て驚き、声を上げる。その声にギルドにいた皆が気づき、慌てている。

ガヤガヤ……

……五月蠅い……怪我人がいるんだぞ……

スゥウウウ――――――

「――――――――黙れ。静かにしろ――――――――――」

ピクッ……ガタガタブルブル！

一同、静まりかえると全員は身体をガタガタ震え始める。

「行くぞリサーナ、ミラ」

俺はリサーナにいい、救護室へ連れて行く。

～救護室～

気絶しているエルフマンをベットに寝かせ、ベットに横たわっているミラに治療を再開する。

数分後、大体の傷は塞がったが、失った血液や体力、魔力は回復することはできないな。後はミラの自然回復を待つしかないな。血液

は俺が作った増血薬を食べさせれば問題ないな。

そう、思っていると、

「うぅ……ここは……ギルドの救護室か？」

エルフマンが目を覚ました。

「起きたかエルフマン」

「ラグナ！？何でお前が……それに俺は確か……姉ちゃんとリサーナと一緒にS級クエストに……あ、あああ、あああああああ！」

エルフマンは何があったかを思い出し、叫びを上げる。

「お、俺は何てことを……姉ちゃんに怪我を……リサーナにまで手を出そうとしたのか……ちくしょおおおおおお！！」

泣きながら叫ぶエルフマンに近づき、胸倉を掴む。

「漢（おとこ）がそんな情けない泣き方をするな！お前がするべきことはお前

の中にあるそのビーストソウルをしっかり制御できるにすることだ！漢（おとこ）なら家族を……仲間を守るために自分の力を制御できるようになれ！自分の家族を守るためにだ！」

「漢（男）……俺が姉ちゃんとリサーナを……ギルドの仲間を守る……」

涙を流すのを止め、真剣な表情をするエルフマン。

「ラグナ。ありがとうな。俺は……この力を絶対に制御してみせる！」

「その生きだぜエルフマン。それとミラ」

復活したエルフマンを見て、次はミラを見る。

「……ああ。わかっているよラグナ」

ミラは俺を見つめる。

「ミラ。しばらく魔導師業を休業しろ」

『なっ！？』

驚くエルフマンとリサーナ。そして、やっぱりか……と言った風な表情をするミラ。

「ミラの魔力の流れがおかしい。おそらく目の前で家族が家族に殺されそうになったことが原因だろうな。ミラは俺が知る限りでも５年前から２人のことを大事にしていた。そのことが原因だな。精神的な理由で魔力の流れがおかしくなる魔導師は稀にいると聞く」

俺が説明するとエルフマンとリサーナは申し訳ない表情をする。

「ごめん、姉ちゃん……俺のせいで」

「ごめん、ミラ姉。あたしが無茶なことをしたから」

元気のない２人を見たミラはにっこりと笑う。

「あはは。気にするなよ、２人とも。これは私の精神が弱かったってことだし。それに……少しの間、魔導師業を休業してギルドで料理とか作ったりするのもいいかもな」

フフフ……と笑うミラ。だが、俺には悲しい気持ちを笑ってごまかしているように見える。

「2人とも……少し、外に出ていな」

『わかった』

2人は救護室を出ていった。

そして、救護室は俺とミラだけになった。

「ミラ。俺の前では我慢するな」

ビクッ

一瞬、ミラの肩が上がった。

「な、何のことだよ……」

「誤魔化すな。お前は本当は魔導師業を休業したくないんだろ?だ

けど、今の自分がクエストに行ったら明らかに足を引っ張る、失敗するかもしれないからああ言ったんだろ？」

「……ラグナ……」

泣きそうな表情をするミラを抱き寄せる。

「泣け。俺が胸を貸してやる」

「……うん。ぅっく……ううぅ、うううううう！　うわぁっ、うわあああああああ～ん！！」

魔人と言う二つ名のあるミラでもまだ、１７歳と言う女の子だ。いくら強くてもつらいことだってあるはずだ。

俺はミラの胸の中に溜めていたつらい気持ちを涙として流し終わるまで、胸を貸し続けた。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

そして、エルフマンは見事、ビーストソウルを使いこなせるようになったが、大勢で戦う場合は仲間を巻き込む危険があると自身で思ったのか、集団で戦う場合は使うのを控えたとか。

ミラはその後、原作のようにカウンターで皆のクエストの受け付けや料理を振う姿、写真集になどに乗るようになったのであった。

そして、舞台は……原作の時間へと進むのであった。

第7話　原作の一つ、破壊完了（後書き）

次回から原作突入です！
お楽しみに～～

オリ主設定２（前書き）

原作開始時の設定です。
新しくなったところには＊と先頭にあります。＊が先頭にないものは前の設定と同じです。

１１月１９日に増加。内容はラグナの滅竜魔法についてです。書き忘れていたのをつけたしました。

オリ主設定２

名前…ラグナ・ギース

性別…男

年齢…＊１８歳

容姿…金髪で髪型はロキ（レオＶｅｒ）と同じで、瞳の色はアクアブルー。＊身長は１７８ｃｍ、体重は６０ｋｇ

所属…妖精の尻尾

紋章の位置…左から部分に黒い紋章

好きなもの（人・生き物）…ヴリトラ・自然・＊コーヒー、＊エルザ・ミラ・カナ・リサーナ、ギルドの仲間達

嫌いなもの（人・生き物・団体）…傲慢な奴・人の努力をバカにするやつ・仲間を傷つける奴・命を軽く見る奴、＊闇ギルド

特徴…Ｆａｉｒｙ　ｔａｉｌの世界に転生し、転生したらしたで両親に捨てられ、森の中で目を覚ます。
その後、破邪竜ヴリトラに拾われ、育てられる。５歳頃～ヴリトラが消えるまでの間にヴリトラとの修行と言う名の死闘を繰り返すうちに仕える魔法が徐々に増えていき、魔力の底上げをし、滅竜魔法を覚える。
自分に対する危機察知能力はもはや、超直感並み。
ちなみに、自分に向けられる好意には鈍感ではなく、気づいていたりしても自分からは何も言わず、相手が言ってくるのを待つというドＳな部分を持つ。
＊魔導師ギルド、フェアリーテイルに入ってからは仲間のためになら無茶をするようになり、特に自分の女たちが傷つくようなことがあれば敵を廃人にまで追い込むこともある。
それによって、付いた新しい二つ名は「破壊神」。相手の精神から何まで崩壊させることから名付けられた。
普段は修行の一環で重力制御装置をＯＮにし、呪霊錠はしたままでいる。強敵や倒すべき相手の時にのみ、ＯＦＦにし、開(アンテ)をする。

能力…まずは、転生時に貰った特典について

？魔力チート級……チートではあるが転生後、修行によってさらに磨きがかかる。完全に使いこなすことができる

？武道の才能…アニメやゲーム、漫画に出てくる体術関係の技を使うことができる。が、修行しなければ意味はない。才能だけでは意

味がないのだ。

?物造りの才能…?と同じでアニメやゲーム、漫画に出てくる武器を作ることができる。しかし、材料がなければならないし、Ｆａｉｒｙ　ｔａｉｌの世界で手に入らないものがある。そこは、この才能でその必要な材料を何故か作ることができたことにはラグナ自身も不思議に思っている。

?魔眼…大量的な眼関係を言えば、ＮＡＲＵＴＯからは写輪眼・白眼など。ただし、写輪眼に関しては万華鏡写輪眼を使うことはできない。自分にとって大切な人を殺さなければならないからだ。
しかし、写輪眼の力自体は使える。
伝勇伝からは複写眼や殲滅眼である。
後は……直死の魔眼などである。直死の魔眼はラグナ自身で制御し、普段の眼と他の魔眼、直死の魔眼と言った風に切り替えることができる。

?ネギま!・テイルズ系シリーズ・ＲＡＶＥの魔法系全般…その名の通りである。修行したので使えます。

ここからは転生後、手にした能力……と言うよりも魔法。

1・破邪竜の滅竜魔法

2・Ｆａｉｒｙ　ｔａｉｌの世界の魔法全般。（例を上げるとグレイの造形魔法やエルザの換装、ルーシィーの星霊魔法）

～ラグナの二つ名～

・『妖精皇帝（フェアリーエンペラー）のラグナ』、エルザと一緒にいるときは『妖精夫婦（フェアリーカップル）』

・『剣聖のラグナ』、テンコマンドメンツだけで魔物の群れを退治したからつけられた名。

・『極魔神ラグナ』、ネギま！の闇の魔法を使用し、姿が暗いオーラを纏っていたため、魔神を極めたもの……極魔神と名付けられる。

・『破邪竜のラグナ』、言わなくても分かるが、滅竜魔法を使っていたため名付けられる。（名づけられる前から本人が破邪竜のラグナと名乗っていたことも原因である）

～破邪竜の滅竜魔法について～

・破邪竜の滅竜魔法は属性でいえば『闇』に近いです。破邪竜の特性は『付加』と『吸収』である。

『吸収』は物理系以外の魔法……即ち、放出系・幻覚系などと言った魔法はすべて吸収することができ、その吸収した魔力や魔法属性の属性を使う時に付加することで滅竜魔法の威力を倍以上にすることができる。

破邪竜の属性は『闇』なので食べれるのは『闇』。といっても、『闇』は夜や暗い場所においてある物を食べればいい。例えば深夜に吹く風とか。

魔法は魔力が宿るものはすべて食べれる。これは本当の意味でチートである。

ナツやガジル、ウェンディのように自分の魔力で作ったものは食べれない。

オリ主設定2（後書き）

次回から原作だぜ！

第8話　帰還

～ＳＩＤＥ：第三者～

ここはとある森の中になる建物。時間は深夜である。

ドカアァァァァン！！

その深夜という時間帯に、建物は黒いオーラが発するとともに大爆発し、崩壊した。

『グアアアアアア！』

建物が崩壊する中、崩壊していく建物の中にいた人たちが空中に投げだされ、地面に叩きつけられていく。叩きつけられていく人達は次々と気絶していった。

「バ……カな。俺たち闇ギルド『剣達の円舞曲（ブレイズ・ワルツ）』が……たった一人の魔導師に……壊滅……だとぉ！？」

唯一、気絶していなかったのは闇ギルド『剣達の円舞曲（ブレイズ・ワルツ）』のマスター、『雷鳴のグール』は、自分のギルドを壊滅させた人物を見つめ

ている。

「てめえ、何者……だ」

震える指でその人物を指差す。

そして、

「俺か？俺の名は――――――」

深夜は終わり、朝日が人物に光を浴びさせる。

「俺はラグナ。フェアリーテイルのラグナ・ギースだ」

人物……ラグナはグールにそう、答えた。ラグナの名を聞いたグールはガタガタ身体を震え始める。

「ラグナ……だと！？あの、フェアリーテイル最強の男、破邪竜のラグナか！？」

グールに二つ名を呼ばれたラグナはニヤリと笑う。

「おお、その二つ名で呼んでくれるのか！いや～よかった。ここ最近、破邪竜なのに、破壊神とか呼ばれて、少し元気なくてさ～、よかったよかった」

うんうん……と頷くラグナ。そんなラグナを見てグールはこう思っている。

「（……確か魔法一発で俺たちのギルドの建物を破壊するんだから、破壊神と呼ばれても不思議じゃない気が……）」

「何かいったか？」

ピクッ！

グールの心の底で考えていたことに気づくラグナ。

「い、いや！？な、なんでもないです！」

「そうか？んで、ちょっと聞きたいんだけど……」

ラグナは倒れているグールの目線と同じぐらいになるように座り込む。

「お前たち『剣達の円舞曲（ブレイズ・ワルツ）』は、確かバラム同盟の一角である六魔将軍（オラシオンセイス）の傘下ギルドだよな？」

「あ、ああ。そうだが……」

グールは爽やかな表情で聞いてくるラグナに少し、恐怖を持ち始めていた。そして、

「六魔将軍（オラシオンセイス）の拠点は知っているか？ここ最近、悪魔の心臓（グリモアハート）・冥府の門（タルタロス）・六魔将軍（オラシオンセイス）の傘下ギルドを潰しまくっているんだよ」

「（ひ、ひいぃぃぃ！？た、たった一人でバラム同盟の傘下ギルドを潰しているだとぉ！？化け物かこいつは！？）そ、そそそそ、それで、自分に何を聞きたいのでしょうか（汗汗）」

冷や汗を流すグールにラグナは聞く。

「ああ。３つのギルドのどこでもいいから拠点を知っていれば……教えてくれないかな？」

「そ、そそそそ、そんなこと言われまして、じ、自分達は所詮下っ端の傘下ギルドですぜ？知っているわけないですよ！」

グールは嘘偽りなく言っているようだ。そんなグールの目を見ているラグナはグールがウソを言っていないことに気づき、立ちあがる。

「そうか。手間をかけたな」

クルッ

そういい、ラグナはグールに背を向け、歩き出した。

「（チャンス！奴は無防備だ！この雷鳴のグールに背を向けたことを後悔するがいい！）死ねえええええ！！ライトニング・ボム！！」

グールは手から手榴弾ぐらいの大きさの雷の塊をラグナ目掛けて投げた。

ドカアァァァァン！

「シャア――――――ハッハッハッハッハ！いい気味だぜ！シャア

ーハッハッハッハ……ハッハ？」

「ふむ。なかなかの威力の雷だったな」

爆発した地点でラグナは何もなかったかのように佇んでいた。

「バカな!?俺の最大火力のライトニング・ボムだぞ!?」

「アハハハ。俺には魔力の籠った放出系とか爆発とかは聞かんぜ？それと本当の雷ってのはこういうのを言うんだよ……喰らえよ！ライトニング・クラウド！」

バチィィィィィィン！！！

「ギャアアアアアアアアアアア！！！（なんという……威力。俺とは天と地の差も……あるのかよ……これが……フェアリーテイルのラグナ・ギース……なのか）」

バタン！

黒焦げになったグールを余所にラグナは遠くを見渡す。

「そう言えば、原作開始しているよな。そろそろ、ギルドに帰るか」

そういい、ラグナは人差し指と中指を額に当て、その場から消えた。

数分後、その場に近くの街の兵士たちがやってきて倒れている『剣達の円舞曲（ブレイズ・ワルツ）』のメンバーとマスターである雷鳴のグールを捕縛した。

近くには『こいつらのことはよろしく頼んだぜ？　Ｂｙラグナ・ギース』と書かれたお気手紙のような者があったとか。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

シュタ！

俺は闇ギルド『剣達の円舞曲（ブレイズ・ワルツ）』を壊滅させた後、マグノリアに帰ってきた。ギルドの前でなく、マグノリアの門から入っていく。

「ラグナだ！みんなラグナが帰ってきたぞー！！！」

ここ、フィオーレ王国、東方、マグノリアの街は人口６万人が住んでおり、古くから魔法も盛んな商業都市だ。この街で顔が広い俺を見た、街の住民達が俺に声を駆けてきた。

「おかえりラグナちゃん。今回はどうだった？」

「まぁ、ぼちぼちかな。それにおばちゃん、いい加減“ちゃん”はやめてくれよ、俺もガキじゃないんだから……」

「おぅ、ラグナ！おめえ今回の仕事はどうだったんだ？」

「ん～、まあ割と簡単だったよ。おっちゃんの商売の方は？」

「う〝っ！？おめえ…それは聞いちゃいけねえぜ」

『アハハハハハハハ！』

おっちゃんの返答に周りのみんなが笑う。

改めて自己紹介をしよう。俺の名はラグナ・ギース。この世界に転生した転生者だ。まあ、原作の細かいことはあまり覚えていないが、大きな出来事は覚えているつもりだぜ？

俺が生まれて早１８年。内１１年は破邪竜ヴリトラに育てられ、今から７年前……７７７年７月７日にヴリトラは俺の目の前でどこかへと飛び立っていった。

その後、俺は魔導師ギルド『フェアリーテイル』に入り、今年で６年目だ。今ではギルドの仲間たちとバカ騒ぎをしたりして、第２の人生の青春を謳歌している最中だ。

そして、前世ではいなかった彼女が今現在、４人いる。

４人とはエルザ・ミラ・カナ・リサーナだ。リサーナは１年前に告白され、ＯＫを出したその日に初めてを奪ってしまったぜ☆

早く、４人に会いたいぜ♪

マグノリアの街の中心にそびえたつ教会カルディア大聖堂を抜けるとそこにはこの街唯一の魔導士ギルド妖精の尻尾がある。

其処こそが俺の帰る場所であり仲間（かぞく）がいるところだ。

「帰ってくるのは一ヵ月ぶりかね？みんなは変わらず元気のようだな」

ギルドの前に立つと中から騒がしい声が聞こえてくる。まあ、いいか。中に入るかね。

「みんな、ただいま～。ラグナ・ギース、今帰還したぜ！」

パンパンパパン

そこで一斉にクラッカーが鳴らされた。

「おぉ、すげえお迎えだな」

予想以上の出迎えに驚いたぞ。

「ラグナ～お帰りなさ～い♪」

「お帰り～ラグナ～♪」

ギュッ

ミラとリサーナが俺に抱きついてきた。おお、左右から心地いい感触が……堪りませんなw

「2人とも、ただいま～。元気にしていたか？それと、あまり皆の前で抱きつくのはやめてくれ（嬉しいけど）」

「いいの！！これが私の出迎え方なんだもの！」

「いやいや！？みんなの視線が痛いんだよ俺が」

「気にしない方がいいと思うな♪」

くっ！この姉妹に何を言っても無駄なのか！？俺はギルドのみんな

（男女問わず）からすごい目で見られているんだぞ！？

「とにかく、一度離れてくれ。俺は今からマスターに報告しないといけないんだからな」

「えぇー」

「そんな殺生な～～」

ぶぅ～と頬を膨らませるミラとリサーナ。全く、変なところも似ているなこの姉妹は。

2人が離れると俺はマスターの所に向かう。

「マスター。今帰りました」

マスターはいつもどおり机の上に座っていた。見た目は小さな爺さんなんだが、彼は最高ランクの魔導士のみが選ばれる？聖十大魔導〝に選ばれるほどの魔力を持っている。まあ、俺も？聖十大魔導〝に選ばれているんだけどな。

「うむ。おかえり。どうじゃった、今回のクエストは？それに何故

こんなに遅くなったのじゃ？」

「クエストの方は簡単だったよ。遅くなった理由はクエストの帰りにバラム同盟の傘下ギルドの噂を聞いたんで、帰る前に色々と情報を集めていたらいつの間にか一ヵ月経ってて……」

「なに？闇ギルドを潰しまわっていたのか？」

「ええ。合計で２，３０ぐらいは潰しましたね」

マスターはそれを聞くと頭を抱えている。

「実はな……お主名義で評議会から報酬金が来ておる」

「評議会から？」

何で評議会から報酬金が？

「お主が潰しまわっていた傘下ギルドの中には評議会が危険視しておったのもあったらしいのじゃ。じゃが、評議会の兵達がいざ、ギルドの拠点に向かったところ、拠点は崩壊されており、ギルドメンバーすべては捕縛されていたとのことじゃ。お主、壊滅させたギル

ドに書置きみたいなものを残しておったじゃろ？」

……おお、そう言えば置いていった記憶があるな。

「その顔、本当らしいの。評議会はうちのギルドメンバーであるお主に借りを作りたくないということで報酬金をよこしたんじゃよ」

「なるほど、これでチャラにしろ……ってことか」

「そういうことじゃの」

はぁ……小さい奴らだね。

「さて、こんな話は終わりじゃ！今日はお前の帰還を祝っての宴じゃ。充分に疲れを癒せ♪」

そう言ってマスターはにっこりと笑った。

「おうともさ！」

そうして俺は振り返ってこう叫んだ。

「みんな～今日は宴だ～！！存分に騒げ！この野郎！！」

『おぉぉーー！！！』

こうして俺の帰還を祝う宴が始まった。

俺はミラとリサーナが作ってくれた料理を2人と話しながら食べたり、飲んでいると、

「ラグナ～！！俺と勝負しろ～」

ナツがいきなりなぐりかかってきた

パシッ！！ブーン

それを俺は片手受け止めてナツを軽く投げた

「うわぁぁぁ〜、ぶふっ！！」

そのままナツは壁に突き刺さった。

「ナツ。俺は食事中だぞ。それにもう少し落ち着きをもてよ」

全く……俺はそう思いながら飲み物の入ったグラスを持っていると、

「すっご〜い、あのナツを片手でさばくなんて……」

1人の女の子が俺に話し掛けてき。そして、顔を見て俺は驚いた。
もう、ギルドに来ているとは思っていなかったからな。

俺が知っていてもあちらは俺を知らないかもしれないし、名前を聞いた方がいいかな。

「君は誰？新人さんか？」

「あ、はい！はじめまして！私はルーシィ、この前フェアリーテイルに入ったばっかりなの……よろしくね♪」

ルーシィはにっこり笑いながら右手を差し出した

「そうか。もう知ってると思うけど俺はラグナだ。ラグナ・ギース。よろしくな、ルーシィ」

そう言って俺も右手を差し出し握手しニッコリ笑った。

「……／／／」

その笑顔を見たルーシィは顔を赤くした

「ん？ルーシィ、顔が赤いけどどおした？？（笑）」

ルーシィは多分、俺の笑顔を見て顔を赤くしているのかな、

「い、いや！なんでもないです……／／／」

「そうか？ならいいけど」

俺とルーシィが話しているのが面白くないと思う2人が俺たちに話しかける。

「2人はいつまで私たちを無視して、いちゃいちゃしてるのかなぁかなぁ……（笑）」

「ね～。ラグナも女の子に手を出すのは早いね～（笑）」

ミラとリサーナは黒いオーラをまといながら口だけで笑っていた

「い、いちゃいちゃなんてしてないですよ／／／」

ルーシィはミラとリサーナの様子に焦りながらも反論した

「……じゃあ、その手はなに？？（笑）」

「ねぇ～いちゃいちゃしていなかったらその手はなんなのかな～～（笑）」

ミラとリサーナはいまだに繋がれている俺とルーシィの手を指差しながら言った。

「あっ！！すみません！！／／／」

ルーシィはあわてて手を離した。

彼女の顔はさらに赤くなっていた。

「ククク……気にしないでいいぜ」

「もう、ラグナ、ルーシィが恥ずかしがっているの面白がっているでしょ？」

「相変わらず、女の子をからかうの好きだよね　。（私の気持ちに気づいていたはずなのに私が何も言わない限り何も言わないなんて鬼畜だったよ。全く／／／）

俺はその後もルーシィを入れた４人で楽しむ話をしながら宴を楽しんだのであった。

宴も終わり、みんなが付かれて寝てしまっている中俺はテラスの椅子に腰掛け、満月を見ながら１人でまだ飲んでいた。

俺に近づく気配が二つ。

「ミラにリサーナか」

「相変わらずすごい気配探知ね」

「もう探知ってレベルの話じゃないよミラ姉」

2人は俺の左右の椅子に座る。

「どうだった？久しぶりのギルドは？」

「ラグナが帰ってきて余計にうるさかったけど……どうだった？」

俺に顔を近づける2人。

「ふ、何を今さら……最高だぜこのギルドは」

俺は2人に笑いかけながら言う。

「そっか……よかったわ！あーあ、私も飲みたくなっちゃった」

「私も！」

2人がグラスを出すのを見て、俺は仕方ないな……と思い、持っていた酒を2人のグラスに注ぐ。

「飲むのはいいけど、飲み過ぎるなよ」

「「ラグナに言われたくないわ」」

2人同時に言われちゃったよ。

コチン

そして俺たちはグラスを合わせた。

その後、酔いつぶれて寝てしまったミラとリサーナを背中とお姫様抱っこしながら俺の部屋に運んだことを述べておこう。ちなみに、リサーナが背中でミラがお姫様抱っこな。

第8話　帰還（後書き）

次回、鎧の魔導師ことエルザ帰還！

第9話　エルザの帰還

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺がフェアリーテイルに帰ってきた次の日、俺がギルドに入ると、

「う～ん……」

ルーシィが仕事の依頼が張り出された掲示板の前で、どのクエストをうけるか悩んでいた。

「？魔法の腕輪探し〝に……？呪われた杖の魔法解除〝……？占星術で恋占い希望〝！？……？火山の悪魔退治〝！？」

ルーシィーは掲示板に張られている依頼を読んで驚き、声を上げる。

「どうしたんだルーシィ？驚いた声を出して」

「あ、ラグナ。いや、依頼っていろんなのがあるんだな～って」

「気に入ったのがあったら私に言ってね、今はマスターいないから

……」

俺たちの会話が聞こえていたミラは言った

「ああ、そう言えば今日は定例会だったな」

俺はミラに言われたことで思い出した。確かに今日は定例会のある日だったな。

「定例会？」

ルーシィは定例会がなんなのか俺に聞いてきた。

「定例会ってのは地方のギルドマスター達が集って定期報告する会だ評議会とは違い……あーなんて言えばいいかな～ミラ後よろしく」

俺は大雑把に説明して細かいところはミラにまかせることにした。

「ＯＫ♪……定例会っていうのは地方のギルドマスターたちが集って定期報告をする会よ。評議会とは違うんだけど…う～ん…ちょっとわかりづらいかなぁ……リーダス、ヒカリペン貸してくれる？」

「ウィ」

リーダスから借りたヒカリペンを使ってミラは空中に文字を書き始めた。

「魔法界で１番偉いのは政府とのつながりもある評議員の１０人。魔法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を犯した魔導士をこの機関で裁くこともできるのよ。その下にいるのがギルドマスター。評議会での決定事項などを通達したり、各地方のギルド同士の意思伝達を円滑にしたり私達をまとめたりするの、まぁ大変な仕事ね」

ミラの説明を聞いてルーシィはへぇ～っと言っている、

「知らなかったなぁ～ギルド同士のつながりがあったなんて……」

そのことに感心するルーシィ。

「ギルド同士の連携は大切なのよ。それをお粗末にしてると……ね？」

「？？？」

ルーシィはミラが話を急にやめたので不思議に思った

「黒い奴等が来るぞォォォォ」

「ひぃぃぃぃ!!!!!」

ナツが声にドスを効かせてルーシィの耳元で言ったので、ルーシィは体を震わせて驚いた。

「うひゃひゃひゃ!!!?ひぃぃ〃だってよ!!な～に、びびってんだよ!!」

「もォ!!おどかさないでよォ!!!(ラグナの前で恥ずかしい想いをしちゃったじゃない!)」

「ビビりルーシィ、略してビリィーだね」

「変な略称つけんなっ!!」

ナツとハーピィはルーシィのビビり方がつぼにはいったらしく、思

いっきり笑っている。

「だが黒い奴らは本当にいるんだよ。連盟に属さないギルドを闇ギルドと言うは……ルーシィも少しは聞いたことがあるだろ？」

俺はルーシィに問いかけた。

「えっ？う、うん。法律も無視して人殺しの依頼でも受ける奴らの事だよね」

「そうその通り。特に正規ギルドに所属する奴を殺しに来たりするからな。暗殺とか毒殺などなど……まったくもって不愉快な奴らだ」

俺は少し、黒いオーラを纏う。それを見たルーシィは「ひいぃぃ！？」と悲鳴を上げる。

「おっと、悪い。どうも闇ギルドって聞くとな」

「ラグナはね？数年前に闇ギルドの人たちに命を狙われたことがあったのよ。それからよね？ラグナがクエストに行く度に闇ギルドの拠点を潰しているのって」

「ああ。今回は2，３０近い闇ギルドを潰したぜ」

「す、すごいね……（一人でそんな怖いギルドを2，３０も潰すラグナもすごいけど……さすが、週刊ソーサラーのいろんなランキングで一位になるだけあるな～。カッコいいし／／／）」

ん？ルーシィが顔を赤くしている。……まあ、気にしないでおこう。

そんなルーシィに近づくロキ。

「あぁ、ビビってるルーシィもキレイだけど、顔を赤くしているのもいい…サングラスを通してもこの美しさだ…肉眼で見たらきっと眼がつぶれちゃうな……ははっ♪」

爽やかに笑いながら言った。

「……つぶせば」

ルーシィはロキのくさいセリフが釈に触ったらしく青筋をうかべながら言った。

俺はロキがルーシィにナンパしているので耳元で呟く。

「けどよ、ロキ。ルーシィは星霊魔導士だぜ……」

「っ！？」

それを聞いた瞬間、ロキの表情が変わった。

「な…なんたる運命のいたずらだ……ゴメン！！僕たちここまでにしよう！！！」

そう言ってロキはルーシィから逃げるように去っていった。それを見たルーシィはキョトンとしている。

「何あれぇ！？」

「ロキは星霊魔導士が苦手なんだ…昔、いろいろあったらしい…」

俺はロキについて知っているので、ルーシィが嘆きに答えた。

「どうせ女だ！！」

「そうだ！！」

「真似すんなクソ炎！」

「それは俺のセリフだツリ目野郎」

ナツはいつの間にかグレイと殴り合いをしており、殴り合いながらナツとグレイは言った。

タッタッタッタッ！

「ナツ！！グレイ！！まずいぞ！！」

するとさっき出ていったばかりのロキが慌てた様子で戻ってきた。

「「「あァ！？」」」

2人は邪魔された事にイライラしていた。しかし、この後のロキの一言によって2人のイライラは吹き飛んだ。

「エルザが……エルザが帰ってきた！！」

「「……えぇぇぇエ！！！」」

その一言によってナツやグレイだけでなくギルド内全体に緊張が走る。

「おお、久しぶりにエルザに会えるんだな♪」

「本当ね～ラグナは一ヵ月ぶりだもんね」

俺は嬉しそうにしているとミラは俺に笑顔で言う。

「やべ！ナツ！今からは一時ケンカは中断だ！いいな！」

グレイが慌ててナツに言う

「お！おう！今だけだからな今だけ……」

あのナツが素直にグレイと協定を組んだ。

ズシィン　ズシィン　ズシィン　ズシィン

相変わらず随分物騒な足音だなエルザは。

「エルザだ…」

「エルザの足音だ…」

「エルザが戻ってきやがった…」

「このリアクション、やっぱりエルザさんて、やっぱりすごい魔導士なんだ！」

ルーシィだけはある意味当たっているけど、ある意味ですごいんだよなエルザは。

パタン

ロキが戻ってきてしばらくすると、大きな角を片手で担いで鎧をつけた女が入って来た。彼女がエルザだ。

「今戻った。マスターはおられるか？」

ズドッ！

エルザは馬鹿でかい角を床におきながら言った。

「お帰り！マスターは定例会よ！」

「そうか」

エルザの姿を見てギルド内はものすごく静かになった。

エルザを初めて見るルーシィはエルザの感想を一言でいう。

「綺麗ですね」

「でしょ？エルザはものすごく強いんだから」

「へ、へぇ。確かに…強そうですね…」

「みんなエルザが怖いのよ。ナツは昔、エルザに喧嘩を挑んでボコボコにされちゃったの」

「え？まさかぁ！」

ミラが懐かしそうに笑った。

「グレイは裸で歩いている所を見つかってボコボコに……ロキは口説こうとして半殺し。唯一、ラグナだけはエルザになにもされていないのよね」

ルーシィにミラはエルザのことを話している最中、俺はエルザに近づいていう。

「お帰りエルザ」

エルザは俺の顔を見て驚き、声を上げる。

「ラグナじゃないか！！帰ってきていたのか！」

「ああ。昨日の朝にな」

俺はでかい角を見ながらエルザに聞く。

「このでかい角はどうしたんだ？」

「これは……討伐した魔物の角に地元のものが装飾を施してくれてな……綺麗だったので、みやげにと思ってな……迷惑だったか？」

エルザは少し落ち込んだような表情をし。

そんなエルザを見て、愛おしく思い、俺はエルザに抱きつく。

ダキッ

「そんなことはないぜ？お疲れエルザ♪」

そして、唇をエルザの唇に押し付けた。

「「「「なっ！！」」」」

その行為にギルドにいた全員が驚いた。

「……んむっ！？」

俺にいきなりキスをされたエルザは目を見開いている。

軽いキスなので唇を離す。

「／／／／／／／／／／／／／／／」

エルザは顔を赤くしている。俺がキスした唇を指でなぞっている。

「いいなぁ……」

ルーシィは羨ましそうに見ている。他の女性陣もそう思っていた。

「……ウフフフフ（笑）」

「……アハハハハ（笑）」

ミラとリサーナは黒い笑いを浮かべている。

「「ひぃぃぃぃ！！」」

それを見て、近くにいたナツとグレイは本気でビビっていた。

「♪」

俺は久しぶりにエルザとキスしたので上機嫌である。

「……／／／」

エルザは自分の席へと戻る俺を物足りなそうに見つめていた。何で俺がわかるかというと……それは愛の力だ！

エルザは頭をブルブルっと振り、キリッとギルドを見渡す。

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン！としてしまった。

「旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルが、また問題ばかり起こしているとな！マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ここでいつもの、エルザの説教が始まった。

大タルに入った酒をがぶ飲みしながら呑んでいるカナに

「カナ！「ぶっ！？」なんという格好で呑んでいる」

踊っているビジターに

「ビジター、「はいっ！？」踊りなら外でやれ！」

タバコを吸っているワカバに

「ワカバ！「ギクッ！？」吸がらが落ちてるぞ」

リクエストボードの近くをいつもうろついているナブに

「ナブ！「うっ！？」相変わらずリクエストボードの前をうろうろ

しているだけか？いい加減仕事をしろ！」

テーブルに座って汗をかいているマカオに

「マカオ、「んおっ！？」……ふぅ「何か言えよ！？」」

相変わらずバッサリと言うな、エルザは。

「まったく世話が焼けるな。今日の所は何も言わずにおいてやろう」

むちゃくちゃ言ってたんだけどなぁ。

「ナツとグレイはいるか？」

「あぃー」

するとハッピーがまるで執事のような動きでナツとグレイがいるところを指を差した方向には、ナツとグレイが肩を組んでいた。

「や、やぁ……エルザ…お…俺たち……今日も仲良し……よく……や……やってるぜ……」

「あ〝い〟」

「ナツがハッピーみたいになった!?」

「そうか。親友なら時にはケンカもするだろうが、しかし私はそうやって仲良くしている所を見るのが好きだぞ」

「いや、親友って訳じゃ…（小声で言っている）」

「あ〝い〟」

「こんなナツ見た事無いわ!?」

ルーシィってツッコミ上手いよね。ある意味芸人の才能あるんじゃねえか？

「実は二人に頼みたいことがある。それにラグナも居てくれてよかった。仕事先で厄介な話を耳にしてしまった。本来ならマスターの判断をあおぐとこなんだが、早期解決が望ましいと判断した。３人の力を貸して欲しい」

「えっ！？」

「はい！？」

「いいぜ」

皆がザワザワと騒ぎ始めた。

「ど……どういう事！？」

「あのエルザがラグナ以外の誰かを誘うなんて滅多にないぜ！」

「こんなでけぇ怪物倒す女だぞ……」

とみんなが口々に騒ぎ出す。

何故かナツとグレイは睨み合ってた。全く、エルザが見ていないからって……はぁ。

そんな時、ルーシィの隣にいたミラが呟く。

「エルザとラグナとナツとグレイ、今まで想像した事無かったけど…」

「えっ？」

「これって…フェアリーテイル、最強のチームかも…」

ミラがそう呟いてたのを聞いた。

「！！！」

ルーシィもそれを聞いて驚く。

「出発は明日だ準備をしておけ「ちょ！まてよエルザ！ラグナはいいがナツや俺を誘うなんてどういう内容なんだ！？」

「詳しくは明日列車の中で話す」

そう言ってエルザは出たいった。

今ここにフェアリーテイル最強チームが結成された瞬間であった。

第9話　エルザの帰還（後書き）

コメントにありましたが、ラグナにもナツやウェンディ、ガジルのようにエクシードはいます。
今はあるところにいるのですよ。

第１０話　鉄の森（アイゼンヴァルト）（前書き）

≪≫はラグナによる念話です。

第１０話　鉄の森（アイゼンヴァルト）

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺は今、マグノリアの駅に来ている。駅はざわざわ、がやがやとにぎわっている。そんな中、俺の耳に聞きなれた２人の声が届いてきた。

「なんでエルザみて～なバケモノが俺たちの力を借りてぇんだよ！！」

「知らねぇよ。つ～か助けなら俺とラグナで十分なんだよ！！」

「じゃあ、お前とラグナの２人で行けよ！！俺は行きたくねぇ！！」

「じゃあ来んなよ！！あとでエルザに殺されちまえ！！」

やれやれ……相変わらず、水と油な関係だな２人は。火と氷の魔導師だからか？

「もう！２人とも、迷惑だからやめなさいっ！！！！何でアンタたち、そんなに仲悪いのよぉ……」

「「……」」

ナツとグレイはルーシィを見ているな。大方、何でこいつがここにいるんだ?とでも思っているんだろうな。現に、

「「……な、なによ??」」

ルーシィは言い争いをやめてジッと見てくる2人に聞いた。

「「何でルーシィがいるんだ?」」

「ミラさんに頼まれたのよ!!アンタたちをよろしくって!!ミラさんの頼みだから、仕方なくついて行ってあげるのよ……(ま、まあ、本当はラグナがいるからなんだけどね///)」

ルーシィは半分呆れるようにして言った。

「本当はラグナがいるからだよね♪」

そこへハッピーがつっこんだ

「そ、そんなわけないじゃない！！／／／」

顔を赤くするルーシィ。

……そうだ！いいこと思いついたぜ。

「≪ルーシィ。聞こえるか？聞こえたら頭の中で言葉を発してくれ≫」

「≪えっ！？ラグナの声が聞こえるんですけど！？≫」

よし、ルーシィには初めてやったけど成功したな。

「≪落ち着け。これは俺の念話魔法だ。相手の頭に直接語りかける魔法だ。今、俺も駅にいる。んで、ナツとグレイの面白い反応を見せてやるから俺の指示に従ってくれ≫」

「≪あっ！何か面白そうだね！うん！……うん……わかったわ！≫」

「≪じゃあ、手はず通りにな≫」

そういい、俺は念話を切る。そして、

「ナツ！グレイ！何をしている！仲よくするように言ったはずだぞ！」

「あ！！エルザさん！！！」

？エルザ〃……この言葉を聞き、声を聞いた瞬間ナツとグレイは肩を組み合った。

「今日も仲良くいってみよー」

「あいさー」

「これ面白いかも」

俺が念話でいった通り、面白いことになったその威力の大きさにルーシィは声をあげて笑う。

「アハハハハ！ナイスリアクション！」

「「騙したなテメェラァ！！！」」

「あんたら本当は仲良いんじゃないの？」

「冗談じゃねえ！！何でこんな面子で出かけなきゃならねえ！！胃が痛くなってきた……」

「魚食べる？」

「いるかっ！！！」

「ルーシィ、何でおまえがいるんだ？」

「何も聞いてなかったんですかっ！！！」

ナツに真顔で訊かれ、怒ったルーシィがそう叫んだ時、

「すまない……待たせたか？？」

すると、やっとエルザが到着した。

「荷物、多！！」

大量の荷物を引っ張りながら……な。

「ん？……君は昨日、フェアリーテイルにいたな」

ルーシィの事を知らないエルザは聞いた。

「新人のルーシィといいます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくお願いします」

そう言ってルーシィは深く頭を下げた。

「私はエルザだ、よろしくな。そうか……ギルドの連中が騒いでいた娘とは君の事か……
傭兵ゴリラを1人で倒したとかなんとか…頼もしいな」

「……それ……ナツですから（汗）それに事実と少し違ってます」

ルーシィは呆れるようにして言った。

「今回は少々、危険な橋を渡るが大丈夫そうだな」

「危険！！！？？？」

エルザの危険という言葉に過剰に反応するルーシィ。

「フン、何の用事か知らねぇが、今回はついて行ってやる。……ただし、条件つきだ！！」

「条件？」

「バ、バカ……！！！オ……オレはエルザの為なら無償で働くぜっ！！！」

エルザはナツの言葉を聞き返し、グレイはナツと違い、無償で働くとアピールしているな。アハハ、相変わらず面白いなこいつらは。

「言ってみろ」

エルザはナツの条件を聞いている。

「帰ってきたらオレと勝負しろ。あの時とは違うんだ！」

「！！！」

「オ、オイ！！！はやまるな！！死にてぇのか！？」

「確かにおまえは成長した。私はいささか自信がないが……いいだろう。受けて立つ」

その言葉にエルザは微笑みながら髪を後ろへやり、承諾の言葉を口にする。

「自信がねえって何だよっ！！！本気で来いよな！！！それとラグナ！！！」

ん？今度は俺を指差しているな。

「お前も俺と勝負しろ！！今度は負けねえ！！今度は……俺が勝つ！」

……ほぉ？俺にも挑戦状を叩きつけるのか。

「なっ！？お、おま、ラグナにまで勝負を吹っ掛けるのか？！やめとけ！本当に死ぬぞ！？」

「いや、別にいいぞ。ナツ、お前が俺がいない一ヵ月の間にどれほど成長したか見せてみろ。グレイ。お前もついでに俺とバトルか？」

「いや、俺はいい。まだエルザとラグナに勝てる気が全然しねえからな……」

さすがにグレイは遠慮したみたいだ。

「おしっ！！！燃えてきたぁ！！！やってやろうじゃねーか！！！」

目標ができたナツは文字通り燃えていた。マジで燃えているせいか天井に向けて火を吹くナツ。

数分後、列車が来て俺たちは乗り込んだ。

～列車内～

「あっ……あっ……あっ……」

「なっさけねえなぁ、ナツはよぉ……」

列車に揺られ、早速ダウンしているナツを見ながら呆れたように言ったのはグレイ。

俺はギルドの図書館から持ってきた古代の魔法書を読んでいる。

ちなみに今の座席順はこうだ。

グレイ　　ルーシィ＋プルー

俺

ナツ＋ハッピー　　エルザ

「うっとおしいから別の席行けよ……。つーか列車乗るな！！走れ！！」

「う……」

「毎度のことだけど……つらそうね……」

「まったく……しょうがないな。私の隣に来い」

「あい……」

そんなナツの様子に見兼ねたらしいエルザは言いながら自分とルーシィの間を軽く叩いた。ナツが横になれば座る場所がなくなるルーシィは「どけってことかしら……」とぼやきながらナツが座っていた席に移動する。

一方でハッピーのように返事をしたナツは辛そうな顔でエルザの隣に座り、

ボスッ！！

……エルザはナツの鳩尾をなぐった。

「ウッ！！……ガクッ」

ナツはその衝撃によって白目をむいて気絶した。

「やれやれ……」

「少しは楽になるだろう」

「「「……」」」

鳩尾に躊躇なくパンチを入れて気絶させたエルザの行動に三人は言葉を失くしている。

けどよぉ……

「≪エルザ。いくらナツの具合が悪いからって俺の許可なく他の男を膝枕するんだ。この仕事が終わったら覚悟しておけよ……性的な意味で≫」

「≪んな?!／／／ふ、ふふ……い、いいだろう!今度こそ、ラグナを先にイかせてやる!／／／≫」

「≪クックック……楽しみにしておくぜ≫」

そういい、俺は念話を切る。

あ!ちなみに今の座席順はこうなるぜ!

グレイ＋ハッピー　ナツ（気絶中）
俺
ルーシィ＋プルー　エルザ

ナツが気絶するのを見ていたグレイはエルザに話しかける。

「つーかそろそろ本題に入ろうぜ、エルザ。一体何事なんだ。おまえほどの奴が人の力に借りたいなんて、よほどだぜ」

「そうだな……。話しておこう。先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士が集まる酒場へ寄った時、少々気になる連中がいてな…」

～エルザの回想～

「コラァ！！！酒遅ェぞ！！！！」

「！」

「ったくよォ、なにモタモタしてんだよ！！！！」

「す……すみません」

「ビアード、そうカッカすんな」

「これがイラつかずにいられるかってんだ！！！せえっかく【ララバイ】の隠し場所を見つけたってのにあの封印だ！！！何なんだよアレはよォ！！！まったく解けやしねえ！！！！」

「バカ！！声がでけぇよ」

「うん。うるせ」

「くそぉっ！！！」

「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてものじゃないよ。後は僕がやるからみんなはギルドに戻ってるといいよ。エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内に【ララバイ】を持って帰るって」

～エルザの回想終わり～

「不覚だった、あの時エリゴールの名に気付いていれば、全員血祭りにして、何をするか白状させたものを！」

「ひいいっ」

「だな……。その場にいた連中だけならエルザ一人で何とかなったかもしれねえ。だがギルド一つまるまる相手となると……」

グレイの言葉にエルザはコクッ、と頷き。

「奴等は【ララバイ】なる魔法を入手し、何かを企んでいる。私はこの事実を看過することはできないと判断した。鉄の森に乗り込むぞ」

「なるほどな……闇ギルドを潰すなら……俺も力を貸そう」

「すまないなラグナ」

「気にするな」

俺とエルザは見つめ合う。

その後、一度止まった駅で弁当を買い、食べ、俺たちは目的地の駅までの間話をしている。

「そういや……あたし……妖精の尻尾でナツ以外の魔法見た事ないかも。エルザさんとラグナはどんな魔法使うんですか？」

「エルザでいい」

「エルザの魔法はキレイだよ。血がいっぱいでるんだ」

相手の。と後付けで言った言葉にそれはキレイなのかとルーシィは苦い顔を見せる。

「たいしたことはない……。私はグレイの魔法のほうが綺麗だと思うぞ」

「そうか？」

エルザの言葉にグレイはそう言った後、左手を地盤の様に、グーをした右手をその上に合わせ――次の瞬間、その手には氷で出来た妖精の尻尾の紋章が出来ていた。

「わあっ！！！」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね！」

「ほっとけっての」

するとルーシィは一瞬黙りこみ、グレイと気絶したナツを見比べ、そして

「氷！火！！あ！！！！」

何かに気がついた顔をする。

「だからアンタたち仲悪いのね！！！」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろ！？そんなこたァ」

単純すぎてかわいー。と言いながらにやにやと笑っていたルーシィは、俺を見る。

「ラグナの魔法はどういうものなの？」

「あい！ラグナの魔法はギルドの中で規格外なんです！」

ハッピーは俺の頭に乗りながら言う。

「き、規格外って……」

「確かにな。ラグナが本気で蹴りを放てば建物は崩壊させられるし……」

「剣を使った魔法を使えば数キロ離れている山を削ることもできるしな」

「あい！それに人のことを真っ二つにできるよね！」

「一体どんな魔法なの！？」

「まあ、俺はギルドで一番多くの魔法を使うから色々とあるんだよルーシィ」

「……何か納得する自分が悔しいんですけど……」

ルーシィは何故か納得していた。

そして、列車はオニバス駅に到着し、俺たちは降り、再び列車は発車していった。

「アイゼンヴァルトの奴らは、まだこの町にいるのか？」

「わからない…それをこれから調べる」

「雲を掴むような話だけど…」

「あれ、ナツは？」

「「「「あっ！？」」」」

ハッピーが気付いた様だ。しかも列車は、もう遠くなってた。

グレイとルーシィは唖然としていた。俺もすっかり忘れていたことを後悔するぜ。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

～その頃、列車内では～

「うゥゥゥー」

「あらら…つらそうだね、大丈夫?フェアリーテイル、正規ギルドかぁ……うらやましいなぁ」

ナツは列車酔いに耐えながら鉄の森(アイゼンヴァルト)のカゲヤマに出会っていた。

第１１話　呪歌【ララバイ】

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「何ということだっ！！」

オニバスの駅に、エルザの声が響く。

「話に夢中になるあまりナツを列車に置いてきたっ！　あいつは乗り物に弱いというのにっ！！　私の過失だっ！　とりあえず私を殴ってくれないかっ！」

「まあまあまあ」

「取りえず落ち着こうよ、エルザ……」

「そういうわけだっ！　列車を止める！」

エルザは近くにいた駅員に言った。

「ど……どういう訳？」

しかし、当然のことながら駅員には伝わっていない。

ルーシィはまだ慣れてないから何か恥かしい……みたいだ。が、宥めようとするもエルザは駅員さんに向かって話の続きをしている。

「妖精の尻尾の人はやっぱみんなこーゆー感じなんだぁ……」

「オイ！　オレはまともだぞ」

「露出魔のどこが!?はあ……まともな人はラグナしかいないの？」

「（おお、俺はまともな枠に入っているのか）」

これは嬉しいな。何しろ、ギルドじゃ、人外扱いだからな。

「仲間のためだ。わかってほしい」

「無茶言わんでくださいよっ！　降りそこなった客一人のために列車を止めるなんて！」

エルザの要求を否定する駅員。その駅員を見てため息をつきながらエルザはハッピーを見ていう。

「やれハッピー」

「あいさー！！」

「ちょ……ちょっとォ！！」

ガゴン……

ハッピーはエルザに呼ばれ何をすればいいかわかっているようで、羽でエルザと駅員の上をとんで緊急停止レバーのところまでいき、駅員の制止も聞かずレバーを下ろした。

ジリジリリリリッ…！！！

するとベルが鳴り始めた。

「ナツを追うぞ！　すまない、荷物を『ホテルチリ』まで頼む」

エルザは近くにいた一般人の2人組の男女に言った。

「誰……アンタ……」

いきなりエルザに声をかけられ何が何だかわからない2人組の男女。

「もう……めちゃくちゃ……」

「だな」

ルーシィの嘆きに同意するグレイ。

「……おい、グレイ。服を着ろ」

「……あ」

「はぁ～～～……」

大きなため息を吐く俺であった。

そして、俺たちはエルザが街でレンタルした魔動四輪車に乗ってナツを追う。

～その頃のナツはと言うと～

「さっきのお返しだ！！！」

ゴツッ！！

「ぐもっ」

列車内で降り遅れたナツはカゲヤマに喧嘩を売られていたが乗り物酔いで反撃できずにいたが、列車が急停止したので思いっきり殴った。

「ん？？」

ナツは足元にドクロの笛が転がっているのを見つけた。

「み、見たな！！！」

カゲヤマはナツに笛を見られた事に焦っていたが、ナツは興味が無かったので無視することにした。

「先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車さます。大変、ご迷惑をおかけしました」

そこへ列車内にアナウンスが流れた。

「マズ……」

「……逃げよ！！」

そのことに本気で焦るナツ。

ナツは冷や汗をかきながら棚に載せた自分の荷物をおろした。

「逃がすかぁっ！！！鉄の森（アイゼンヴァルト）に手ェ出したんだ、ただで済むとは思うなよ、ハエがぁぁっ！！！」

カゲヤマは悔しいのかナツに食い下がる。

それを聞いたナツは

「こっちもてめェのツラおぼえたぞっ！！！さんざんフェアリーテイルをバカにしやがって……」

すると列車が動き始めた…

「今度は外で勝負してやぼる……うぶ」

ガシャン！！

最後は吐きそうになりながらカゲヤマにそう言ったナツは窓に体当たりをして割って外にとびだした。

「うぁぁぁぁぁぁぁ」

しかし予想以上に列車はスピードがでており、ナツは後ろに吹き飛ばされたのであった。

～戻ってＳＩＤＥ：ラグナ～

俺たちは街を出て線路をそってナツの乗っている列車を追っていた。

エルザが運転して、俺とルーシィが中に座り、グレイは屋根上に座っていた。

すると、エルザの魔力に乱れを感じ、俺は運転しているエルザに声をかけた。

「エルザ、飛ばしすぎじゃない？」

「大丈夫だ」

いや、大丈夫そうだったら魔力が乱れるはずないぞ？

「疲れたら交代してやろうか？」

「まだ大丈夫だ」

……これはある意味意地を張っているな。はぁ～まあ、これがエルザってわけだからいいか。

「そっか」

「おい、列車が見えて来たぞ！」

俺たちはグレイにいわれ、列車を見る。

「ナツー！」

ルーシィが叫んだ直後に、窓からナツが飛び出して来た。

「ギャァァァ！！」

俺たちは悲鳴を上げながら飛んでくるナツに驚き、グレイはなんとかナツを受け止めようと両手を広げナツを助ける体勢をとったが

「うぉあっ！！」

「なっ！！」

ゴチーン！！

「「ぎゃぁぁぁぁ！！！」」

とても大きな音を立てて２人の頭がぶつかり、激痛の叫びをあげながら２人はそのまま地面に落ちた。

「痛そ～……」

その音を聞いたルーシィは、音を聞いただけで頭がいたくなったのか、頭に手を添えていた。

「ナツ！無事だったか！？」

魔動四輪車を停止させ、エルザは声をかけた。

ナツとグレイは、

「痛ーーーっ!!何しやがる、ナツてめえっ!!!」

「今のショックで記憶喪失になっちまった!!誰だ、オメェ……くせぇ」

「何ぃ!?」

起き上がり、早速言い争いを始めた

「ナツ～、ごめんね～」

そこへハッピーを先頭にして俺たち3人が近寄る。

「ハッピー、ラグナ、エルザ、ルーシィ、ひでぇぞ!!俺をおいていくなよっ!!!」

「すまん」

「すまない」

「ごめん」

ナツは俺たちにおいて行かれたことを怒り、俺・エルザ・ルーシィはナツに謝った。

「おい……随分、都合のいい記憶喪失だな……」

ナツの都合のいい記憶喪失に青筋を浮かべるグレイだった。　魔法を放とうとするのを俺が止める。

「とにかく無事でよかった」

エルザは胸にナツの顔を押し付けた。

「堅っ」

しかしエルザは鉄の鎧を装着しているのでナツにとってはダメージにしかならなかった。

「無事なモンかっ!!列車で変な奴に絡まれたんだっ!!」

「???」

ナツはキレながら言った。

「どんなやつだったんだ？（確かカゲヤマって言う奴だったよな？いかんな。記憶が遠のいているせいか思い出せん）

俺はナツに聞いた。

「何つったかな？アイ…ゼン……バルト？？？」

「「「「なっ！？」」」」

その言葉を聞いてナツ以外のみんなは驚いた顔をしている。

「バカモノぉっ！！！」

「ぶふっ！！！」

そしてエルザはナツの顔面を思い切りビンタした。エルザにビンタされたナツは後ろに吹っ飛んだ。

「な、何しやがる！！」

いきなりビンタされてナツは驚きながら聞いた

「アイゼンヴァルトは私たちの追っている者だ！！なぜ、ちゃんと私の話をきいていないっ！！！！」

「？？？」

まったく聞き覚えがないのかナツはポカンとしている。

そんな怒るエルザに俺は近づき、

「アホ。お前がナツを殴って気絶させたからだろうが！」

ゴツン！

「きゃう！？」

可愛い声を上げるエルザに一瞬、萌えたのは秘密だぜ。

「そ、そうだったな……すまんナツ」

「ておい、俺殴られ損じゃねーか！ちくしょー！ラグナが頭をぶってなかったら俺がぶっているところだぞ！！」

全く、この2人は本当に。

「てか、あたし。よくエルザにラグナはツッコミを入れられるわよね。拳骨したり」

「ああ。あんなことできんのはラグナしかいないぜ」

「あい！それがラグナです」

何か、すげえ、言われようだな。

「さて、話を元に戻そうか」

俺は話の流れを元に戻すことにした。

「そうだなナツ、そいつはどんな特徴をしていた?」

エルザはナツに聞いた。

「あんまり特徴なかったなぁ。なんか、ドクロっぽい笛持ってた。三つ目があるドクロだ」

ナツは列車の中で見た笛のことを話した。

「三つ目のドクロの笛……」

「どこかで聞いたことのある物だな」

ナツからその話を聞いて、ルーシィの表情は驚愕にそまった。

「どうしたのルーシィ」

その様子に気づいたハッピーがルーシィに声をかけた

「もしも、その笛が呪歌だとしたら……子守歌……眠り……死……

！！！」

どうやらルーシィは何かに気がついたようだ

「その笛がララバイだ！！呪歌……？死〟の魔法！！！」

「何！？」

「呪歌？」

「？？？」

「そうか。思い出したぞ！」

俺以外の3人は聞いたことがないのかまだイマイチわかっていないような表情をしていたが、俺もルーシィのおかげで消えかかっている原作の一部を思い出した。

「あたしも本で読んだ事しかないんだけど……禁止されてる魔法の一つに呪殺ってあるでしょ？？」

「あぁ……その名の通り、対象者を呪い？死〟を与える魔法だ……」

ルーシィの問いかけにエルザは答えた。

「ララバイはもっと恐ろしいの……」

「何だ？」

その続きはルーシィの変わりに俺が話した。

「笛の音を聴いた者全てを呪殺する……？集団呪殺魔法〟ララバイ。それがその笛の正体だ」

「集団…」

「呪殺魔法…」

「おい、それが町の中で吹いちまったら…」

「確実に聞いた者が死ぬだろうな」

「冗談ではない！鉄の森（アイゼンヴァルト）の奴等そんなモノ持ち出したら、何をするか解らん！直ぐに乗れ、追いかけるぞ！」

エルザは再び、運転しようとするのを俺が止める。

「待てエルザ。これ以上、魔動四輪車に魔力を使うな」

「だ、だが！」

「俺が運転する」

「いや。私が運転する。ラグナは魔力の消費をしないでくれ」

「……仕事終わった後の色々なこと、追加な（ボソッ）」

「んなっ！？／／／」

顔を真っ赤に染めるエルザ。

「ええい！もう、何でもいい！掛かってくるがいい！！／／／」

もう、自棄になっているエルザは魔動四輪車を再び、運転し始め、鉄の森（アイゼンヴァルト）の後を追っていったのであった。

第１２話　妖精たちは風の中

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺たちはララバイの正体がわかり、魔動四輪車に乗って再び鉄の森を追っていた。

「エルザ！！飛ばしすぎだ！！ＳＥプラグが膨張してる！！」

俺はエルザの事を心配して言った。

「あの笛が吹かれれば、大勢の人が死ぬ……音色を聴いただけで人の命が消えてしまうんだ」

「それは、わかってるけど……これから鉄の森と一戦交えるんだ。そんなにスピード出したらいざって時に、エルザの魔力が枯渇するぞ！！」

俺は先に先の事を見越してエルザに言った。

「構わん、いよいよとなれば棒きれでも持って戦うさそれに、？もしもの時〃は、おまえがやってくれるんだろう？」

エルザは言った。

「……わかった、もう何も言わないよ。ただし、本当にヤバくなったら、殴ってでも止めるからな。それでも従わなかったら……帰ったら色々するからな」

「あぁ」

エルザにそこまで言われては止めることを諦めるしかねえな。

そのまま、俺たちは進んでいった。

～オシバナ駅～

俺たちがオシバナ駅に着くと人であふれかえっていた。

「駅内の様子は？」

ようやく到着してすぐにエルザは、近くにいた駅員に聞いた。

「な、なんだね君！」

駅員は突然の質問に驚く、すると…

ゴツッ！！！

「わお」

「なっ！！！」

いきなりエルザは駅員に頭突きをした。ルーシィはそんなエルザの行動に驚いている。

「駅内の様子は？」

「は？」

ゴツッ！！！

「駅内の様子は？」

「ひっ」

それからも次々とエルザは自分の質問に即答できなかった駅員には頭突きをくらわして気絶させていた。

「……即答出来る人しかいらないってことなのね」

「だんだん、わかってきたろ？エルザのこと」

その様子を見て、グレイとナツをおぶったルーシィは震えながら言った。

「っていうかコレ、あたしの役？」

ナツを背負わされていることに不平を言うルーシィ。そこへ、別の人から情報を集めた俺がルーシィ、ハッピー、グレイにいう。

「状況はわかった、とにかく中に入るぞ」

「おう」

「あいさ」

ルーシィの不平は普通にスルーしてしまったけど……まあ、いいか。

「シカト……」

落ちこむルーシィも俺たちに続いて中へと入っていく。

～オシバナ駅内～

「軍の一個小隊が突入したが、まだ戻っていないらしい。おそらく、アイゼンヴァルトとの戦闘が行われているんだろう」

「でも一個小隊だけじゃ、闇ギルドにはきついんじゃないか？」

エルザの後ろについて走っている俺が問いかけた。

「ええっ!?軍の小隊でもやばいってどんだけなのよ～」

「普通の軍隊じゃまず無理だと思うな。評議員直属の部隊とかなら話は別なんだろうけど」

しばらく走ってたら、たくさんの兵達が倒れていた。

「あっ!?」

「全滅してるよ!」

「ひどい、重症だ」

「相手はギルド丸ごと一つ、つまり全員魔導士だ。軍隊の小隊じゃ話にならんか…」

エルザの視線の先をみると全滅している小隊達が倒れていた。そして、

「ふふふ、やはり来たな。フェアリーテイル」

鉄の森（アイゼンヴァルト）が待ち受けていた。

「な…なに……この数…」

その人数の多さにルーシィはビビっていた。

「待ってたぜぇ」

「貴様がエリゴールだな」

エルザが問いた。

「ナツ起きてっ！　仕事よ！」

敵の目の前にして、ルーシィは車酔いの今だ起きないナツを起こそうとするが起きない。

「無理だよっ！　列車→魔動四輪車→ルーシィ、３コンボだ」

「あたしは乗り物なのっ！？」

ハッピーの言葉に軽くショックを受けながらルーシィはナツを揺すってるけど結構ダメージが大きいらしい。

「貴様等の目的は何だ?返答次第ではただでは済まさんぞ」

エルザは声に凄みをきかせて言った。

「遊びてぇんだよ、仕事も無ぇし、ヒマなもんでよォ」

エリゴールはおどけるようにして答えた。

「「「「ぎゃはははは」」」」

それを聞いて大笑いする鉄の森(アイゼンヴァルト)のメンバーたち。

すっ

するとエリゴールは宙に浮かんだ。

「飛んだ！？」

「風の魔法だっ！！」

その事に驚いたルーシィと説明をするハッピー。

「まだわかんねぇのか、駅には何がある？？」

そのまま駅のスピーカーまで行き、スピーカーの上に立つエリゴール。

「ラブバイを放送するつもりか！？」

「えぇ！？」

「何だと！？」

「ふはははははっ！！！」

大きく口を開けて笑うエリゴール。

「この駅の周辺には何百、何千の野次馬どもが集まっている。いや……音量をあげれば街中に響くかな……死のメロディーが」

エリゴールは楽しそうに続けた。

「大量無差別殺人だと!?」

あまりの規模の大きさに冷や汗をかくエルザだった。

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げ生活を保全している、愚か者どもへのな」

エリゴールは空中を自由に飛びながら続ける。

「この不公平な世界を知らずにいきるのは罪だ!!よって死神が罰を与えに来た?死〟という名の罰をな!!」

スタッ

そう言うとエリゴールは壁のふちに降り立った。

「そんな事したって権利は戻って来ないのよっ！！てゆ～か、元々、自分たちが悪いっていうのに……あきれた人たちね」

それを聞いてルーシィはエリゴールに言い返した。

「ここまで来たら欲しいのは？権利〃じゃない？権力〃だ権力があれば全ての過去を流し未来を支配する事だって出来る」

エリゴールは権利ではなく権力が欲しいという。

「アンタ、バッカじゃないのっ！！」

ルーシィがエリゴールに向かってそう言った時

「残念だったな、ハエども」

カゲヤマが影をつかってルーシィを襲う。

「闇の時代を見る事なく死んでしまうとは！！」

「きゃあっ！！」

「しまった！！」

エルザとグレイが気づいた時にはすでに遅く、影は2人の間を抜け、今にも襲わんとしていた。

「てめえらは……俺がいるのを忘れているな？」

俺の影が伸び、ルーシィを襲おうとしていた影を切り裂いた。

『なっ！？』

「バ、バカな！？僕の影の魔法が！？」

鉄の森（アイゼンヴァルト）の連中は驚き、声を上げる。俺はルーシィを見る。

「大丈夫か？」

「へっ！？あ、う、うん／／／（か、かっこいい！ラグナってやっぱ、めちゃカッコイイ！）」

俺はギロリとエリゴール達を見る。

「てめえらは……俺の前で言ってはならないことを言った。それは……」

俺は小さな声で『開(アンテ)』といい、『呪霊錠』を解除し、重力装置をOFFにした。

「俺の仲間のいるギルドをハエ呼ばわりしたことだあああああああ！！」

ゴゴゴゴゴゴゴ！！

俺から解放された魔力により、大気が震え、地震が起こっているかのような錯覚を起こさせる。

「な、なななな？！」

「そして、なにより俺の前で女を攻撃するとはいい度胸しているな……ええ？鉄の森(アイゼンヴァルト)の影使い？」

「くっ！」

俺が睨んでいると奴らはおとなしくなっている。まあ、これだけ高い魔力を見れば当り前か。

「さて、エリゴール。俺から一つ、質問しよう」

「な、なんだ……」

俺はエリゴールを見ていう。

「お前たちはこの駅にあるスピーカーでララバイを放送すると言った……そうだな？」

「そ、そうだが、何だ？（こいつ、まさか俺たちの本当の目的に！？）」

焦っているのが丸わかりだな。

「おかしいよな？ここには俺たち・街の住民・駅にいる人たちの他にも……お前たち鉄の森（アイゼンヴァルト）がいるんだぜ？このままじゃ、仲間をも道

連れにすることになるだろ？おかしいよな～？」

「「「「「あっ！」」」」」

エルザ達も気付いたようだ。

「（ま、まずい！？こうなったら……）暴風閃（ストームシュレッド）！！」

ドカアァァァン！

風の魔法が俺に直撃する。

「ラグナ！？」

「お前たち！俺はあそこに行く！足止めは任せたぞ！」

『了解です！エリゴールさん！』

そういい、エリゴールは駅から出ていった。

「ちょ、ラグナさん大丈夫なの！？」

ルーシィは俺のことを知らないんだったな。まあ、心配してくれるのはありがたいが……。

「あの程度の魔法ではラグナには傷一つ、負わすことなどできん」

「傷つけることができていたら今頃、俺やエルザはラグナに勝っているさ」

「あい！来る時にもいったけどラグナは人外です！大丈夫だよ！」

んで？俺のことを知っているメンバーは心配しないと……悲しいねえ。

「ああ。俺にはあの程度の魔法は効かん」

俺はそのまま、煙の中から出る。

「おい、ナツ、起きろ。お前の大好きな戦いだそっ！」

いい加減、起こさないといけないのでナツを起こした。

「む……、今度は地上戦だな！！」

俺にそう言われたナツは跳ね起きの要領で起き上がって言った。

ナツが起きたことを確認したエルザがナツとグレイに言う。

「ナツ、グレイ…二人で奴を追うんだ！」

ナツとグレイは嫌そうだ。

そこで俺が言う。

「行かないと……ＯＳＨＩＯＫＩだぞ？」

ビクッ！

「「行ってきまーす！」」

2人はビューンと音を立てながらその場を離れていった。

「あ、逃げた」

「エリゴールさんを追う気だ」

「任せろ！このレイユール様が仕留めてくれる！」

「俺も行く！あの野郎だけは許せねぇ！」

鉄の森（アイゼンヴァルト）の幹部、カゲヤマとレイユールは、ナツとグレイを追いかけた。

「こいつ等を片付けたら、私達もすぐに追うぞ！」

「さっさと片付けるぞ」

「ちょっと、あの数を三人で！？」

「さて、野郎はとっとと片付けて、小娘達と遊ぼうかね」

「妖精(ハエ)共め、羽根をむしり取ってやるぜ！へへへ」

「それにしても二人ともいい女だなァ」

「殺すにはおしいぜ」

「とっつかまえ売っちまおう」

「待て待て、妖精の脱衣ショー見てからだっ」

「下劣な」

口々に勝手な事を話す鉄の森(アイゼンヴァルト)の男達にエルザは冷めた眼で呟きその後ろでは「かわいすぎるのも困りものね」「ルーシィかえってきてー」等と言う言葉が出ている。

俺もさすがにねぇ？エルザを殺す？売る？脱衣ショー？ふざけんなよ？

「これ以上妖精の尻尾を侮辱してみろ。貴様等の明日は約束できんぞ」

「剣が出てきた！！魔法剣！！！」

「めずらしくもねえ！！」

「こっちにも魔法剣士はぞろぞろいるぜぇ」

「その鎧ひんむいてやるわぁ！！！」

数でいけばこちらは圧倒的に不利なのだが、エルザは単身で鉄の森（アイゼンヴァルト）に向かって突っ込んでいき、次々と彼らを斬り捨てていく。

「チィッ、遠距離魔法（とびどうぐ）でもくらえ」

「！！！」

「なっ、おごっ」

「槍！！！」

その速いスピードに接近戦では無理だと悟った一人が魔法を発動させようとするが、それよりも早くエルザは剣から槍へと武器の形状を変え、その男を潰す。

と、次の瞬間、その手にあったのは槍ではなく、

「今度は双剣!!?」

そして次に武器を振るった時、形状は再び変わっており。

「斧!!!?」

「こ……この女…なんて速さで【換装】するんだ!!?」

「換装?」

「魔法剣はルーシィの星霊と似てて別空間にストックされてる武器を呼び出すっていう原理なんだ。その武器を持ち換える事を換装っていうんだよ」

「へぇ〜…すごいなぁ」

次々と敵を退けていくエルザの姿に俺はほほ笑む。

「エルザのすごいトコはここからだよ」

「え？」

微かに笑みを浮かべるハッピーにルーシィは聞き返す。

「まだこんなにいるのか…面倒だ。一掃する」

するとエルザは着ていた鎧をも換装する。

「魔法剣士は通常【武器】を換装しながら戦う。だけどエルザは自分の能力を高める【魔法の鎧】にも換装しながら戦う事ができるんだ」

「それがエルザの魔法――――騎士（ザ・ナイト）だ！！」

エルザの姿を隠すようにあがっていた煙はやがて晴れていき――鎧の形状は、全く違う形状へと換装されていた。

「うわぁ」

「エルザ…!?こいつまさか…」

ハッピーの言葉を聞いていたカラッカがエルザを見つめながら呟く中、

「舞え、剣たちよ。――‘循環の剣（サークルソード）’」

エルザの周りに浮かんでいた無数の剣はその声と共に鉄の森（アイゼンヴァルト）の人間達を一掃していく。

「こんのヤロォ!!!オレ様が相手じゃあ!!!」

「ま、間違いねえっ!!!コイツぁ妖精の尻尾最強の女、妖精女王（ティターニア）のエルザだっ!!!」

そうしている間にビアードはエルザにやられ、気絶した。

「ふごっ!」

「ビアードが一撃かよっ！！！ウソだろ！！？」

すると、奥から他の鉄の森（アイゼンヴァルト）のメンバーが出てきた。

「くそっ！妖精女王（ティターニア）のエルザは無理でもそこの男なら！！」

そういって現れた鉄の森（アイゼンヴァルト）のメンバーは俺に迫る。

「ラグナ！」

「あい、大丈夫だよ。何たってラグナは……」

「煩い奴らだ。消えろ！破邪竜の……」

俺は魔力を溜め、

「破邪竜！？まさか、あの金髪に、あの顔。まさか……まさか！？あの男の正体は！！」

カラッカは言う。

「咆哮！！！！！」

俺は口から黒い魔力の塊のブレスを放った。

ドカアアアアアン！

「滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）……破邪竜のラグナ！？」

「ええっ！？ナツ以外の滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）がいたの！？」

俺の正体を知ったルーシィが驚き、声を上げた。

「あい！ラグナはナツよりも強い滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）です！フェアリーテイル最強候補の男だよ！」

「くそっ！エルザにラグナ……フェアリーテイル最強コンビじゃないか！くそぉおおおお！」

俺とエルザを交互に見たカラッカは足早に逃げていく。

「あ！」

「エリゴールの所に向かうかもしれん。ルーシィ、追うんだ！！」

「え――っ！！？あたしがっ！！？」

「頼む！！」

「はいいっ！！！」

渋っていたルーシィにエルザはギロッ、と睨みながら頼み（？）。
鎧を元の形状に戻すと疲れた様に息を吐き出す。どうやら魔動四輪をとばしすぎたのが堪えたらしい。

全く……あれほど、気をつけるように言ったのにな。

俺はエルザの背中に手を置き、魔力をエルザに送る。

「大丈夫かエルザ？」

「あ、ああ、何とかな」

「ったくよぉ。魔動四輪車で魔力の使い過ぎだ。少しは俺を頼れ。俺はお前の彼氏だぞ？いや、旦那のほうがいいのか？」

「そ、そんなことをここで言うな／／／恥ずかしいではないか／／／」

俺はエルザに肩を貸しながら歩き出し、ルーシィの向かった先へと向かった。

少し歩くと外に出て見ると魔風壁が出来ていた。その前にはルーシィとハッピーもいた。

それに触ろうとするエルザの引っ張る。

「なんだラグナ？」

「触るな。これは外からの一方通行の魔風壁だ。こちら側から出ようとすると身体をズタズタにされるぞ」

そう、俺たちが話をしていると、ナツとグレイ、それにカゲヤマが来た。カゲヤマは怪我をしていて気を失っている。

何でも仲間に刺されたらしい。

「くそっ！こんなことをしている間にもじいさん達に危機が迫っている！何とかこの魔風壁を消さねえと！」

グレイは悔しがって両手を合わせている。ここは俺の出番だな。

「これほどのものを喰ったことはないがやってみるか」

「「「そうか！その手があったか！！」」」

俺がそう呟くとエルザとグレイは俺を見る。唯一ルーシィだけはわからない。

「え？え？何？」

「あのねルーシィ。ナツは火の滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）なのは知っているよね？」

「へっ？うん、知っているけど？」

「ナツは炎や火を食べることができるのも知っているよね？」

「うん」

「ラグナの場合は魔力が籠っているものなら何でも食うことができるんだよ！」

「な、なんですって！？」

驚くルーシィを尻目に、俺は魔風壁の魔力を喰い始める。

ガブガブガブガブ！　ゴックン！

「くはぁ！喰ったら力が湧いてきた！」

「俺の真似するなー！」

ナツが煩いな。よし、ここは……。

「ナツ！今からお前とハッピーに風の魔法をかける。普段のハッピーのＭＡＸスピードの数倍にすることができる、な。お前は先に行ってエリゴールを足止めしててくれ」

「……ハハ！足止め？ブッ倒してもいいだろ？」

ニヤリと笑うナツに俺は笑う。

「ああ、やってもいいぜ？」

「よっしゃあああ！行くぞハッピー！」

「あいさー！」

ハッピーがナツを掴むのを確認した俺は風の魔法をかけ、２人は空へと上昇し、エリゴールの後を追った。

「さて、俺たちも行くぞ」

俺たちは魔動四輪車に乗り、今度は俺が運転する。全員が乗り込んだのを確認し、俺たちはナツの後を追っていった。

第１３話　黒魔導師ゼレフが作りし生きた魔法……ララバイ

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

魔動四輪車に乗って俺たちはエリゴールを追っていったナツを追っている。

そこで、魔動四輪車の中に座っているエルザが俺に聞いてきた。

「しかし、ラグナ。エリゴールはどこへ向かっているのだ？」

「ああ？ああ、エルザ、グレイ。オシバナ駅の先には何がある？」

俺の問いに考え込む２人。そして、グレイが声を上げる。

「確かクローバー……まさか！？」

「奴の狙いは確かクローバーの定例会場にいるマスター達か！？」

その瞬間、エルザとグレイから怒りのオーラが滲みだす。

「ああ。全く、胸糞悪い。飛ばすぞ！しっかり捕まってな！」

魔力全開にして魔動四輪車をとばしていくと、遠くの方から巨大な炎の柱が見えた。

「おお、あの炎は！」

「ナツか！」

「近いな！あいつならエリゴールには負けねえし、問題ないか！」

炎が見えた場所まで飛ばしていくと、

「ナツ――！！！」

「お！遅かったじゃねえか。もう終わったぞ」

「あい」

やはり、勝負はすでについていた。

「さすがだな」

「ケッ」

「そ……そんな！！！エリゴールさんが負けたのか！！！？」

それにエルザは笑みを浮かべ、グレイは面白くないとでもいうような顔で悪態をつく。その一方で倒れるエリゴールを見たカゲヤマは、信じられないという風に声をあげていた。

「ふぅ、よかったぜ。さて、ララバイの笛は……あった」

少し前にララバイの笛が落ちているのを拾おうとしたら、

ドゴオォォ！！

「！！！」

「カゲ！？」

「危ねーなァ。動かすならそう言えよ！！」

「油断したな妖精（ハエ）ども。笛は…呪歌はここだ――！！！ざまあみろ――！！！」

エリゴールの近くに転がっていた呪歌を拾おうと思い、近づいていたらカゲヤマは俺の目の前で奪い、魔動四輪車でクローバーに向かって行く。

「あんのヤロォォォ！！！！」

「何なのよ！！！助けてあげたのに――！！！」

「どうしよう！！このままじゃマスター達が…！！」

「取りあえず早く行くぞ！！！クローバーはすぐそこなんだ！！」

～クローバーの町・定例会会場ＳＩＤＥ：第三者～

「一曲聴いていきませんか？？……病院では楽器の演奏が禁止されているもので……」

カゲヤマはどこか怪しい笑顔でマカロフに向かって言った。そう、ララバイの一人目の犠牲者として、カゲヤマはマカロフを選んだのだった。

マカロフはじっとカゲヤマを見た後、

「……急いどるんじゃ、一曲だけじゃぞ」

そう言ったマカロフは聴く体勢をとった。

もらった……

カゲヤマは内心、そう思った。そして笛をかまえる。

その時、カゲヤマの脳裏に今までのことがよみがえる

――正規のギルドはどこもくだらねぇな！！

――能力が低いくせにイキがるんじゃねぇっての！！

同じ鉄の森（アイゼンヴァルト）のメンバーの声

――これはオレたちを暗い闇へと閉じ込め……生活を奪いやがった魔法界への復讐なのだ！！手始めに、この辺りのギルドマスターどもを皆殺しにする

リーダーであるエリゴールの声。

――そんな事したって権利は戻ってこないのよ！！

――カゲ！！！おまえの力が必要なんだ！！！

――同じギルドの仲間じゃねぇのかよ！！

敵であるにもかかわらず、自分達の事を真剣に考えてくれた妖精の尻尾の３人の言葉

頭の中では？吹けばいい〃とわかっているのに、どうしても３人の

言葉が邪魔をして吹けずにいたカゲヤマだった。

「いたっ！！」

「じっちゃん！！！」

「マスター！！！」

「おぉ、今にも吹きそうじゃん。ギリギリセーフか？」

そしてようやくラグナたちも会場にたどり着いた

「とにかくあいつを止めるぞ！！」

カゲヤマが今にも笛を吹きそうだったので、止めに入ろうとしたラグナたちだったが、

「しっ、今、イイトコなんだから見てなさい☆ていうか、あんたたちかわいいわね、ウフ♪」

「な……何、この人！？

「……青い天馬（ブルーベガサス）のマスターのボブ殿だ」

「あらエルザちゃん、ラグナちゃん、大きくなったわね♪」

ラグナたちが話している間にも、カゲヤマはゆっくりと笛に口を近づけている。

「いけない！！」

その様子を見たエルザは焦って止めに入ろうとしたが、

「黙ってなって、面白ェトコなんだからよ」

こんどは、四つ首の猟犬（クワトロケロベロス）のマスターのゴールドマインがそれを止めた。

「まっ、あいつはもう行っちまったけどな」

「ウフッ☆そうみたいね♪相変わらず、いい子よねぇ～」

「「「？？？？」」」

二人のマスターが言った意味がわからないナツたちだった。

「どうした！？早くせんか……さぁ」

「……！！」

カゲヤマは未だに戸惑っていた。

吹けば……吹けばいいだけだ。

思い出すのは今までの虐げられてきた日々。

それで……すべてが変わる！！

カゲヤマがそう思った時、

「こんなことしても何も変わんねぇよ」

「えっ！？」

突然、カゲヤマの後ろから声がした。カゲヤマが後ろを振り向くと

「……ラグナ・ギース……」

そこには木に背をあずけて立っているラグナがいた。

「……来ておったのか、ラグナ」

「まあな。あっちにナツたちも来てるよ」

マカロフにそう言ったラグナから再びカゲヤマの目をまっすぐ見て言う。

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし弱さの全てが悪ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある。仲間がいる。強く生きる為に寄り添いあって歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし遠回りをするかもしれん。しかし明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても、な」

マスターの言葉を聞いたその瞬間、カゲヤマの手から呪歌が滑り落ち。

「参りました」

土下座したカゲヤマにもう大丈夫だろうとラグナ達はマスターに駆け寄って行く。

「マスター！ラグナ！」

「じっちゃん！！！」

「じーさん！！！」

「さすがです！！今の言葉、目頭が熱くなりました！！」

「痛っ！」

エルザは、よほど感動したのか、マカロフを抱きしめた。ただし鎧を着たまま……

「じっちゃんスゲェなァ」

「そう思うならペシペシせんでくれい」

「一件落着だな」

「ああ」

「ホラ……アンタ医者行くわよ」

「よくわからないけどアンタもかわいいわ～♡」

ひとまず落ち着いた（と思う）騒動に一息ついた、――その時。

「カカカ…。どいつもこいつも根性のねェ魔導士どもだ」

『！！！』

その時、突然どこからか誰のものでもない、かすれた低い声がした。
その事に驚く全員。

「もうガマンできん……ワシ自ら喰ってやろう」

すると、笛のドクロの口からモコモコと黒い煙が出てきた。どうやら、声も笛のもののようだ。

「笛がしゃべったわよっ!!ハッピー!!!」

「あの煙……形になってく!!」

笛から出る煙は、どんどんとある形をつくっていく…そして、最後に現れたのは……

「貴様等の魂をな……」

「……ほぉ～」

『なっ!怪物～～～!?!?』

胸の所にに穴のあいた巨大な怪物であった……。

怪物のあまりの大きさに驚きを隠せない一同。

「な…何だ!?こんなのは知らないぞ!」

「あらら……大変」

「こいつァ、ゼレフ書の悪魔だ!!」

どうやら、ギルドマスターたちもこれには驚いているようだ。

「腹が減ってたまらん、貴様等の魂を喰わせてもらうぞ」

「なに～～～っ!……魂って食えるのか!?うめぇのか??」

「「知るかっ!!」」

あまりの場違いなナツの発言にルーシィだけでなくグレイまで突っ込んだ。

「ナツ……驚く所が違うだろ……」

ナツの発言に苦笑いするラグナだった。

「でも一体……どうなってるの？何で笛から怪物が……」

怪物を見上げ、冷や汗を流しながらルーシィは言った。その体は恐怖からだろうか少し震えていた

「あの怪物がラバイそのものなのさ。つまり？生きた魔法〃……それがゼレフの魔法だ」

「生きた魔法……」

「ゼレフ！？ゼレフって、あの大昔の！？」

ゴールドマインの説明に再び驚くエルザとグレイ。

「黒魔導士ゼレフ……魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔導士……何百年も前の負の遺産が、こんな時代に姿を現すなんてね……」

「さぁて……どいつの魂から頂こうかな」

みんなが話している間にも、悪魔はどの魂から喰らうか考えていた。
そして不気味な笑みを浮かべて

「決めたぞ……全員まとめてだ」

悪魔はそう言うと、大きく口を開いた開くと同時に怪しく光だす悪魔の口……

「いかん!!ララバイじゃ!!」

「いくぞ!!ナツ、グレイ、ラグナ!」

「「おう!!」」

ララバイを阻止するべく、エルザはナツとグレイを呼んで攻撃を仕掛けようとしたが、

ドカーンっ!!!!!

「ギャアアアアアア!」

『なっ！！！』

三人が攻撃を仕掛けるよりも先に、いきなり悪魔に黒い塊が飛んでいき、悪魔にぶつかり爆発した。

この場にいた全員は黒い塊の飛んできた方を見ると、

「……（ゴゴゴゴゴゴ）」

怒りのオーラを纏ったラグナがいた。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺はこいつの言ったことにキレた。

「ぎ、ぎざまあああああ！」

ララバイが俺を睨む。

「全員下がっていろ。俺がやる」

『なっ！？』

俺を除いた全員が驚き、声を上げた。

「どういう事だ！？いくらラグナでもあいつの相手は無理だ！！」

「そうよ！！ここはみんなで力を合わせた方がいいわ！！」

「そうだぞ、ラグナ！独り占めはずりぃゾ！！俺にもやらせろや！！」

「てめぇは黙ってろ！！！」

俺の発言に大反対する四人、ナツに突っ込みを入れたグレイも反対

のようだ。

「奴は俺の前で言ってはならないことを言った。マスター達とエルザ達の魂を喰うだと？」

バキィィィ！

俺の足元の地面に亀裂が走る。

「調子に乗るなよ笛ごときが！」

ドゴォォォン！

「七つの星に裁かれよ。七星剣グランシャリオ！！」

天から七つの巨大な光の玉が降り注ぐ。

「グギャアアアアアアアアアア！」

悲鳴を上げるラフバイ。

「オラアァァァ！」

グチャ！

蹴りで左手を吹き飛ばす。

「グアァァァ！貴様あああああ！！」

口から黒い玉をはいて俺に攻撃した。

「ふん！」

シュン！！

「消えた！？」

俺に攻撃が当たる前に、その場から消えた。

ドカーン！！

「グァアアア」

消えたのとほぼ同時に、爆発が起きて悪魔の右足を吹き飛ばした。

「ゼレフ書の悪魔って言うから、どんな強さなんだろうと思ったが……」

ザシュ！

「ギャアアア！」

俺は剣を取り出して左足を切り落とした。

「弱いじゃねえか」

バチィィィイイン！

ドカーン！！

次は右肩を雷の魔法で吹き飛ばす。

「キ、キサマアアアアアア！！！」

俺の姿をとらえたララバイは口から黒い玉をはいて俺に攻撃した。

それを俺は、

「ウザいんだよ」

バシュン！

蹴りで黒い玉を蹴り返した。

ドカーン！

「グハアアア！」

ララバイは転び、足と手ががないため立つことができない。

「消えろ屑が！破邪竜の咆哮！」

口から黒い魔力の塊のブレスを放つ。

「オ、オノレエエエエエエ！！！グアアアアアアアアアア！」

ドカァァァァン！

ララバイは跡形もなく消え去った。

「見事！」

「す～てき！」

「ゼレフの悪魔をこうもあっさりと」

「わあ！」

「す、すごい！これが…これが、フェアリーテイルの魔導士か！？」

「さすがラグナだ！」

「ああ！さすがフェアリーテイル最強候補！」

「俺と勝負しろラグナー！」

「か、かっこいいんですけど！」

「あい！」

俺を見て、全員が言葉を発する。

「いやぁ、驚いた。力は落ちてねェみてェだな、ラグナ」

「むしろ、強くなっちゃってるわね☆」

「ゴールドマインさんにボブさん……改めてお久しぶりです」

俺は軽く頭を下げた。

「あぁぁん☆そんな律儀に頭を下げる所がス・テ・キ♪ねぇ、ラグ

ナちゃん。フェアリーテイルなんて辞めてウチに来ない？アナタが来るなら私なんでもしちゃう♪」

体をクネクネしながら俺を勧誘するボブさん。

「コイツん所が嫌ならウチでもいいぞ。ラグナなら大歓迎だ」

それに乗っかるゴールドマインさん。

「お二人のお誘いは嬉しいですケド、遠慮しときます。俺、結構フェアリーテイル気に入ってるんで……それとボブさん、いい加減？ちゃん〃付けは止めて下さい」

「そうじゃ！！こんな所で引き抜きなんぞするんじゃない。それにラグナはどこにも渡さん！」

三人の会話を聞いてマスターが入ってきた。

「いやん♪もう、マカロフちゃんったら……冗談に決まってるじゃない」

「そうだぞ、マカロフ……冗談に決まってんじゃネぇか」

「……その微妙な？間〃は何じゃ」

二人に対してジト目を向けるマスターだった。

そしてだんだん爆発による土煙が晴れてきた。そんな様子を見ながら

「いゃあ、いきさつはよくわからんが、フェアリーテイルには借りができちまったなァ」

「うむ」

「なんの、なんの～！！ふひゃひゃひゃひゃひゃぴゃ！！！」

そして、どんどん視界が良くなってゆく……

「うひゃ…ひ…ゃ……！！！」

そしてマスターは何かに気がついてプルプルと震えだした。

『ん？』

そんなマカロフの様子を不思議に思ったみんなはマスターの視線の先をおった。その隙を見て、その場を離れようとするマスター。

『な！？』

『ぬぁぁぁぁっ！！定例会の会場がぁぁぁぁ！！！』

そう、そこは悪魔だけでなく定例会の会場も？跡形も無く〝吹き飛ばされていた。

「や、やべえ……力抑えずに咆哮使ったからか（汗）」

そう言えば、魔力最大で咆哮使えばこうなるな（汗）

「ははっ！！見事に無くなっちまったァ」

ナツは高らかに笑っている。ナツ、笑っている場合じゃねえぞ。

「捕まえろ～～～ッ！！！」

ほら、思った通り俺たちを捕まるために追いかけるじゃねえかマスターたちが。

「おし、まかせとけ！！」

そして……なぜかナツ、なんでお前はそっち側にいた。

「おまえは捕まる側だ～！！」

その場から逃げる俺たち。

「すまないマスター……やり過ぎてしまって……」

俺はマスターに謝る。

「い～の、い～の。どうせもう呼ばれないでしょ？」

そのマスターの顔はどう見ても青ざめていた。

俺たちはそのまま、他のマスターたちに追われながら帰る事になったのであった。

第１４話　ラグナＶＳナツ！

～ＳＩＤＥ：第三者～

ここは、フィオーレ。この場所には、評議院支部があり、そこでは先日の鉄の森（アイゼンヴァルト）の事件について、評議会のメンバーによる会議が開かれている最中だった。

「鉄の森（アイゼンヴァルト）が潰れたところで根本的な問題は何も解決しないのだよ」

「闇ギルドはまだ星の数ほどある」

「では一掃作戦を実行すべきだ」

その言葉に「どうやって？」と疑問が持ち上がる中で議員の一人であるオーグは、封じられた呪歌【ララバイ】が入ったケースを見せつけるように持ち上げた。

「今回のようにまたゼレフの魔法を持ち出されたらたまらんぞ」

「そもそもこれほどの魔法がなぜこうも簡単に持ち出されたのじゃ？」

「責任問題は管理側にまで及びそうじゃな」

「それにしてもあれだけけむたがってた妖精の尻尾に今回だけは助けられたみてーだな」

「たった5～6人でギルド一つを潰しちゃうんだもん。すごいわね」

それに声をあげたのは二人の若手議員……ジークレインとウルティアが言った。それに反論出来ず、他の議員達はざわっ、と騒ぎつつも言葉を詰まらせていた。

「認めたくないのもわかるがこれは事実さ。もしも呪歌でギルドマスターたちが殺されていたら事態は最悪だった。ここにいるオレたちの中の何人かは確実に首がとんでいた」

ジークレインはそう告げた。

「バカな!!!責任問題をここまで引き上げるつもりかっ!!?」

「話にならん!!!奴等のハデな暴れっぷりには今回も頭を抱えておるんじゃ!!!」

「素直にねぎらいの言葉でもかけてやるんだな」

憤る彼らに対し気にした様子もなくジークレインはそう言って笑っていた。

一方で、ウルティアはと言うと、

「（フフフ、それにしても報告ではゼレフの魔法……ララバイを一人で倒したと聞いたけど……いいわね。彼……ラグナ・ギースは。是非、フェアリーテイルより――――――に入って欲しいわね／／／あんなかっこいい男は他にはいないわ）」

他の議員たちに気づかれないように顔を赤くしていた。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：フェアリーテイル～

ラグナとナツは今、向かいあっている。何故って2人が？それは鉄の森（アイゼンヴァルト）の仕事を手伝う代わりにラグナとエルザと戦うという条件でナツは付いていったからである。そのため、今日はラグナと戦いたいということなので相手をすることになっている。

「ちょ……ちょっと！！！本気なの！？二人とも！！」

「あらルーシィ」

ギルドの前で集まるギャラリーを飛び越えやって来たルーシィにミラが声をかけている。

「本気も本気。本気でやらねば漢では無い！！！」

「エルザは女の子よ」

「怪物のメスさ」

「だって……最強チームの二人が激突したら……」

「何だそりゃ」

ルーシィの言葉にグレイは何を言ってんだとでもいう風に聞き返す。

「あんたとナツとエルザ、ラグナじゃないっ！！！妖精の尻尾トップ４でしょ」

「はぁ？　くだんねェ！！誰がそんな事言ったんだよ」

バッサリと切り捨てたグレイにその後ろで笑っていたミラは次の瞬間、手で顔を覆い、なく。

「あ……。ミラちゃんだったんだ……」

それにグレイがしまったとでもいう様な顔をする中、「泣かしたっ」と、ルーシィは半眼になってグレイを見る。

そして、

バシュン！

パサッ！

グレイの前髪に見えない何かが通過し、前髪を切り裂いた。

ギッギッギ……

グレイはゆっくりその何かが飛んできた方向を見ると、

「グレェェェイィィィィィ？何、ミラを泣かしているんだぁ～？」

ニッコリ笑っているのにグレイから見たら悪魔の頬笑み。グレイはミラに向かって土下座している。

謝り終わったグレイは立ち上がり、ルーシィを見る。そこへエルフマンがやってきて言う。

「確かにナツやグレイ、ラグナの漢気は認めるが…【最強】と言われると黙っておけねえな。妖精の尻尾にはまだまだ強者が大勢いるんだ」

オレとか。と言ったのはエルフマン。

「最強の女はエルザで間違いないと思うけどね」

「最強の？男〟となるとミストガンやラクサス、ラグナもいるし」

「？あのオヤジ〟も外す訳にはいかねえな」

そう言ったのはレビィ、ジェット、ドロイの三人。

「私はただナツとグレイとエルザ、ラグナが一番相性がいいと思ったのよ」

涙を見せながら言ったミラにルーシィは仲が悪いのが心配って言ってなかったかと彼女を見つめる。

「なんにせよ、面白い戦いにはなりそうだな」

「そうか？オレの予想じゃラグナの圧勝だが」

グレイとエルフマンがそう話す中、ギャラリーの中心で睨み合うラグナとナツ。ふとラグナは笑みを見せ、口を開く。

「ナツ。お前とこうやって魔法をぶつけ合うのは久しぶりだな」

「あの時はガキだった！！！今は違うぞ！！！今日こそおまえに勝つ！！！」

「俺に勝ちたいならまずは俺を本気にさせることを考えろよな」

ラグナが黒い風を手に纏い、ナツは炎を手に纏う。それを見ていたハッピーはというと……。

「やっぱりラグナにかけていい？」

ピラ、とその手に持った１０００Ｊを賭けの管理をしていたカナに渡す。それにルーシィが「何て愛のないネコなの！！！」と、叫ぶ。

「あたしこーゆーのダメ！！どっちも負けてほしくないもん！！」

その一方でルーシィの言葉にグレイは意外と純情なのな。と言葉を零していた。

「同じ滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）同士だ！今度こそどっちが強いか勝負だあ！」

「始めいっ！！！」

マカロフが何とも軽い調子で開始を告げたのと同時に妖精の尻尾の面々は喚声をあげ始める。

「だりゃっ！！！！」

先ず始めに動いたのはナツ。

ナツは炎を纏った拳でラグナに殴りかかるが、

ガシッ！

簡単にラグナに掴まれ、投げ飛ばされる。が、地面に手を置き、足を振り上げ蹴りを決めようとするが今度は足をラグナに掴まれ、投げられた。

「ガハッ！まだまだ！」

ナツは負けじと咆哮（ブレス）を吐き出し。これに対し、ラグナも咆哮（ブレス）で対抗する。

「すごい！！！」

「な？いい勝負してるだろ」

「どこが」

瞬きする隙さえない勝負にルーシィは声をあげ。エルフマンの言葉に認めたくないらしいグレイが言った。

ラグナとナツは楽しそうに戦っている。そして2人が再び交えようと同時に動き出した時、

パァァン！！

何ものかの手を叩く音が響いた。

ピタッ

それにより立ち止まるナツとラグナ。

「そこまでだ！！」

一同は声のした方を向いた。

「全員、その場を動くな。私は評議員の使者である」

すると、自らを評議員の使者と名乗るカエルが現れた。

「評議員！？」

「使者だって！？」

「何でこんな所に！？」

「あのビジュアルについてはスルーなのね……」

律儀に3人にツッコむルーシィ。使者は無視して書状を前に突き出して、読み上げる

「先日の鉄の森テロ事件において、器物損壊罪他11件の罪の容疑

で……ラグナ・ギース及びエルザ・スカーレットを逮捕する！！！！」

「え？？」

「あぁ～、やっぱり来たか（汗）」

突然の逮捕宣告に驚くエルザと、予想していたのかそれほど驚かないラグナであるが、汗をかいている様子。

「何だとぉぉぉぉ！！！！！」

ナツの叫び声が辺りに響き渡った。

第１４話　ラグナＶＳナツ！（後書き）

ウルティアにまでフラグを立てているラグナである。
ウルティアはラグナをあのギルドに入れたがっている様子。
でも、ラグナが入るわけないしねｗ

第１５話　最強の座

～ＳＩＤＥ：第三者～

ラグナとエルザが評議員・フィオーレ支部へ連れて行かれた後のフェアリーテイルでは……さっきまでのお祭り騒ぎが嘘のようにギルド内は静まり返っていた。評議院が下した判断にみんな納得がいかない顔をしていた。

「出せっ！！！オレをここから出せぇっ！！！」

「ナツ……うるさいわよ」

「出せ――――っ！！！」

その中で大きな声で騒ぐナツは、トカゲの姿にされコップの中に閉じ込められていた。評議院へ殴り込みに行かないようにする為の処置である。

「出したら暴れるでしょ？」

「暴れねえよ！！！つーか元に戻せよっ！！！」

「そうしたらナツは『助けに行く！！』って言うでしょ？」

「言わねえよ！！！誰がラグナとエルザなんかっ！！！」

ことごとく否定してるけど出したら絶対にラグナとエルザの元に向かであろう。それが分かってるからミラも元に戻そうとしないしコップの中から出そうとはしないのである。

「今回ばかりは相手が評議院じゃ手の打ちようがねえ……」

「出せ――――っ！！！オレは一言言ってやるんだ――っ！！！評議員だかなんだか知らねえが、間違ってんのはあっちだろ！！！」

「白いモンでも評議員が黒って言えば黒になるんだ」

「しっかしなァ……今まで散々やってきた事が何で今回にかぎって」

「ああ……理解に苦しむね」

「絶対……絶対なにか裏があるんだわ」

そうは言っても判決が下るのを待つ事しか出来ず、もどかしい気持ちになっているフェアリーテイルの皆である。

「やっぱり放っておけないっ！！！証言をしに行きましょ！！！」

そう言ってもう我慢ならないという風にイスから立ち上がったのはルーシィだが、

「まあ……待て」

マスターマカロフはそれを宥めるように止める。

「何言ってんの！！！これは不当逮捕よ！！！判決が出てからじゃ間に合わない！！！」

「今からではどれだけ急いでも判決には間に合わん」

「でも！！！」

「出せー！！！オレを出せー！！！」

「本当に出してもよいのか？」

「？」

マスターが言った言葉にさっきまでの威勢はどこかに吹き飛んだみたいにナツは大人しくなる。ポリポリと多分頬の辺りだと思う場所を掻いて汗が流れている。

「どうしたナツ。急に元気がなくなったな。――――かっ」

「ぎゃっ！」

そう言ったマスターがコップの中にいるナツに向かって魔法を放った時、トカゲから元の姿に戻ったのはナツではなく。

「マカオ！！！？」

「え――っ！！！！」

「す……すまねえ……。ナツには借りがあってよォ」

ぽかんとするギルドメンバー達にマカオは自分でトカゲに変身したのだと言う。

ということは……。

「本物のナツは……」

「まさかラグナとエルザを追って……！！！」

「ああ、たぶん」

「シャレになんねえぞ！！！アイツなら評議員すら殴りそうだ！！！」

「全員黙っておれ。静かに結果を待てばよい」

だけどマスターマカロフは一歩も動く気配もなくそう言ってギルドメンバー達を静めたのだった。

～場所は変わって評議員～

この時、ラグナとエルザは手枷をはめられて、裁判室への廊下を歩いていた。

「ん？」

「！！！」

すると2人は、柱に寄りかかる影を見た。

「よぅ」

「ジークレイン」

「えっ！？」

ラグナがジークレインの名前を読んだことに驚くエルザはラグナを見る。

「久しぶりだな……ラグナ、エルザ」

驚きは隠せてないが、エルザは名前を呼ばれて身構えた。そのようすを見て、ジークレインは言う。

「そう身構えるな、これは思念体だ。オレの〝体〟はＥＲＡにある」

そういうジークレインの体は不自然に揺れていた。どうやらジークレインの言うとおりのようだ。

「あの扉の向こうにいるじじぃどもも全員、思念体さ。こんな小せぇ案件で、わざわざ出向く訳ないだろう」

ジークレインは奥の扉を指差して言った。

「そうか……これは貴様の仕業だったのか。くだらん茶番だ」

エルザは吐き捨てるように言った。

「心外だな……オレはフェアリーテイルを弁護したんだぞ。だが、じじぃどもは責任問題が自分たちに及ぶのを恐れ、すべての責任を

押しつける対象をつくらざるをえなかった」

「……はぁ、つまり俺たちはスケープゴートって事か……メンドクサイな」

「そうだ……もっとも、オレが裁判前にオマエら……いや、エルザに会いに来たのは他の理由だ……」

すると、ジークレインはエルザとゆっくりと近き、

「?あの事〃はじじぃどもには言うな……お互いの為にな」

と、使者には聞こえないよう小声でエルザに言った。

「……」

エルザはそれに対して無言だった。その無言を承諾ととったジークレインは、下がりながら

「では、扉の向こうで待っている……評議員の1人としてな」

そう言って消えた。

その後、ラグナとエルザは裁判室へと入り、裁判が始まろうとしていた。裁判室は三段構造になっており、まず一番低い所にラグナとエルザ、一段目には書記、二段目には9人の評議員、そして一番上が裁判長である。その中にはジークレインとウルティアもいる、

「これより、魔導裁判を開廷する」

裁判長が低い声で、裁判の始まりを告げる。

「被告人…エルザ・スカーレットよ、証言台へ」

どうやら、エルザから裁かれるようだ。エルザは椅子から立ち上がり、証言台に立った

「エルザ・スカーレットよ、先日の鉄の森によるテロ事件において、お前はオシバナ駅一部損壊、リュシカ峡谷鉄橋破壊……これら破壊行為の容疑にかけられている。間違いないか？」

「はい」

エルザは弁明などせず、ただ頷いただけだった。

「……では次にラグナ・ギースよ、証言台へ」

次は、ラグナ。ラグナはエルザと入れ替わり、証言台に立った。

「ラグナ・ギースよ、お前は同事件において、クローバーの洋館の全壊、及び」

ドゴォォォン！！！

『！！！？？？』

急に2人の後ろの扉が破壊され、裁判長の言葉を遮った。辺りには、白煙が舞い上がる。

「何事だ！？」

「（おいおい、この魔力の感じは……もしかして……）」

突然の襲撃に驚く一同。ラグナにはこの魔力の波長に覚えがあり、頭を抱えている。

そして、白煙の中から現れたのは……

「オレがエルザだァ！！！グラァァァ！！！！」

……鎧を付け、エルザの髪の色とおんなじ色のヅラをかぶったナツであった。

その後、ナツの乱入のせいでラグナ達3人は一日、牢屋の中で過ご

すことになってしまった。ナツは暴れる場合があるということでラグナとエルザとは別の牢屋に入っている。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

あーあ……ナツが来なければ今日中に帰れたのに。現にエルザなんて牢屋に入れられる前にナツのことをボコボコにして今も顔が腫れているよナツは。

「これは、ただの？儀式〝だったのだ」

「儀式！？」

イマイチ理解できないのか、ナツは聞き返した。

「形だけの逮捕だったんだ。魔法界全体の秩序をまもる為、評議員

としても取り締まる姿勢を見せておかないといけないからな」

俺は説明した。

「なんだよ、そりゃ……意味わかんねぇ～～～」

だがナツはそれでもわかってないようだった。

「つまり、有罪にはされるが？罪〟は受けない。今日中には、帰れたのだ……ナツが暴れなければな」

エルザは青筋を浮かべて言った。

「えぇぇ～～～！？」

ナツは自分がやった事が無駄だった事に驚く。

「まったく……」

「うぅ……スマネェ……」

ナツはいたたまれなさから、縮こまってしまった。それを見かねた俺は、

「けど、エルザは嬉しかったんだよな？ナツが来てくれて」

エルザの頭を撫でながら言った。

「なっ！？／／／わ、私は別に！！！」

「ふ～ん、俺は嬉しかったけどなぁ……ナツが来てくれて♪」

俺はエルザの頭を撫でながらエルザの顔を覗きこんでニコニコと笑いながら言った。

「うぅぅぅ～／／／私も……う、嬉しかった、ぞ／／ナ、ナツが来てくれて／／／」

エルザは照れくささと俺に撫でられていることから、顔を赤くして目をそらしながら言った。

「そ…そうか！！へへへ、良かった／／／」

ナツも照れくさそうに人差し指で鼻をこすりながら言った。

そして、夜になりナツはそのまま眠りについた。それを見計らっていたのかエルザが俺に聞いてきた。

「なあ、ラグナ」

「ん？どうした？」

「なんでお前が、ジークレインの事を知っていたんだ？」

やっぱ、そのことか……

「俺が3年前に聖十大魔道（せいてんだいまどう）の称号をもらったのは知っているだろ？」

「ああ。それとどう関係あるんだ？」

「ジークレインとはその前からの知り合いだよ。俺がS級魔導師になってしばらくしてから評議員からの依頼でここに来た時に会ったんだよ。んで、聖十大魔道（せいてんだいまどう）の称号をもらった時が2回目、今回で3

回目の会合だな」

「……そうだったのか」

ん？やっぱり、ジークレインがジェラールに似ているから気にしているのか？仕方ないな。

ギュッ

「ラ、ラグナ／／／？い、いきなり何を／／／／／／」

俺がいきなり抱きしめたことに驚き、顔を赤く染めるエルザ。

「エルザ。お前に悲しい表情は似合わない。お前の過去に何があったのかは俺は知らない。けど、苦しいこと・悲しいことがあったら俺に言え。お前は俺の女。俺はお前の男だぞ？少しは俺を頼れ」

ギュウウウウウ

すると、エルザの方からも俺のことを強く抱きしめてきた。

「ああ…ありがとう……ラグナ」

「どういたしまして」

そのまま、俺とエルザは抱き合いながら眠りについたのであった。

～翌日～

俺たちは翌日の朝に、解放されギルドに戻ってきた。

「やっぱりシャバの空気はうめえ!!!!最高にうめえっ!!!!」

帰ってきて早々、ナツはそう言って自由って素晴らしいやらフリーダムやら叫んで走りまわっている。

「もう少し入ってればよかったのに……、けっきょく?形だけ〃の逮捕だったなんてね……。心配して損しちゃった」

「そうか！！カエルの使いだけにすぐに『帰る』」

「さ……さすが氷の魔導士。ハンパなくさみぃ！！！　……で、ラグナとの漢の勝負はどうなったんだよ、ナツ」

「そうだ！！！忘れてたっ！！！ラグナー！！！この前の続きだーっ！！！」

エルフマンの言葉に走り回っていたナツはそう言い俺の方に向く。

「まあ、待て。さすがに昨日の今日だとどうも調子が……「行くぞゴラアアア！！！」」聞けよ」

カウンターでミラに出してもらった酒を飲んでいるのにナツが俺に突っ込んでくる、仕方ないな。

「アクアゲイザー」

「グポオォォォォ！？」

貫通性に優れた水属性の魔法でナツを吹き飛ばす。

「終――了――！！！」

「ぎゃはははっ！！！だせーぞナツ！！！」

「やっぱりラグナは強ぇ！！！」

「おい、この間の賭けは有効なのか？」

「あ～あ…。またお店壊しちゃってぇ」

わいわいがやがやと騒がしさが戻ってきた中でみんなの言葉にミラがくすっ、と笑っていた時、

「ふぬ…」

「どうしました？マスター」

「いや…眠い…」

「？」

「奴じゃ」

「ああ。あいつだな」

とろーん、とした眼でマスター、俺がそう言ったその瞬間、

「あ…」

「あれ…？」

「これは！！」

「くっ」

「眠っ」

俺とマスター以外が急な眠気で倒れ始めた。

「おっと」

倒れかけたミラとリサーナの後ろに移動し、素早く受け止めた。

どつ……どつ……

そこへ、ギルドに誰かが入って来た。

「「ミストガン」」

マントを着、顔を隠した男の人――ミストガンは、つかつかと依頼板に向かうとその一枚を取る。

「……久しぶりだなラグナ」

「ああ。お前も元気で安心したぜ」

握手し、互いの安否を確認する。

ミストガンはウトウトしているマスターに依頼書を渡し、確認させる。

「行ってくる」

「これっ！！眠りの魔法を解かんかっ！！！」

マスターに依頼書を渡した後、ミストガンは踵を返し。

「伍、四、参、弐、壱、」

スゥ…、とミストガンの声が聞こえなくなり姿が消えたのと同時にみんな（ナツ以外）は一斉に目を覚ます。

「こ……この感じはミストガンか！？」

「あんにゃろぉ！！！」

「相変わらず、スゲェ強力な眠りの魔法だ！！」

みんなは騒ぎ出した。

「ミストガン？」

「フェアリーテイル最強の男候補だよ……っ！！！」

「！？」

ルーシィと目があってそそそっと離れるロキ。それを不思議そうに見るルーシィ。

「どういう訳か、誰にも姿を見られたくないらしくて……仕事をとる時はいつも、こうやって全員を眠らせちまうのさ。だから、マスターとラグナ以外、誰もミストガンの顔を知らねぇんだ」

とグレイは立ち上がり、埃を落としながらロキの話を付け加えた。

「いんや……オレは知ってんぞ」

すると二階から普段はあまり聞かない声があがった。

「ラクサス！！」

「いたのか」

「めずらしいなっ！！！」

「パチッ」

ラクサスと言う言葉が聞こえたのか、ナツは目覚めた。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

ラクサスは手すりに肘をついてタバコを吸いながら、下を見下ろすようにして言った。

「ラクサス～～！！！俺と勝負しろ～～～っ！！！」

完全に覚醒したナツはラクサスに勝負を挑んだ。

「さっきラグナにやられたばっかじゃねぇか（汗）」

「そうそう。それに？エルザごとき〃にすら勝てねぇようじゃ、オレには勝てねぇよ」

「それはどういう意味だ」

「エルザ落ち着け」

?ごとき〃と言われた事に食いかかるエルザを俺はなだめた。

「オレが最強って事さ」

ラクサスは両手を広げて話す。

「降りてこい!!!コノヤロウ!!!」

「おまえが上がってこい」

「上等だ!!!」

ラクサスの挑発に乗ったナツが2階に上がろうとした時、

ドシン!!!

マスターの腕が伸び、体以上に大きくなった手は、ナツを2階に上がらせない様にした。

「2階には上がってはならん。まだな」

マスターはナツを諭すような声で言った。

そう、まだナツにS級は早すぎる。S級に出るには圧倒的に経験値が足りない。

「ははっ！！怒られてやんの」

「ふぬぅ…」

ラクサスは馬鹿にするようにナツを見下ろして言った。ナツもラクサスに馬鹿にされ、なんとかマスターの巨大化した手から抜け出そうともがいている

「ラクサスもよさんか」

「そうだぞ。ラクサス。ナツを煽るな」

そう言ってマスターと俺は2階にいるラクサスを見上げながら咎める。

「はっ！さすがラグナってか？お前も甘ちゃんになっちまったなぁ？」

ガタンッ！

音がした方を見ると、黒いオーラを纏ったエルザ・ミラ・リサーナ・カナがいた。

近くにいたメンバーが4人を押えこむ。

「甘くて結構。お前のような協調性のないやつよりかはマシだ」

「……ああ？」

ドスンッ！

二階から飛び降り、俺の目の前に立つラクサス。

「てめえ、なんていった？ああん？」

「もう一度言ってやんないとわかんねえのか？協調性のないやつに言われても痛くも痒くもないって言ったんだよ。それに自分が最強とか言っておきながら去年、俺にボコボコにされたじゃねえか。皆の前でよ」

バチイィィ！

「てめえ……ここで決着をつけるか？」

ゴオォォォ！

「面白い。やれるものならやってみろ」

ラクサスは雷を、俺は黒い魔力を纏う。

「止めんかぁあああああああ！！！！この糞ガキどもがあああああ！！！！」

「「ぐぶぇ！！」」

堪忍袋の緒が切れたマスターが巨大化させた拳で俺とラクサスを叩き潰した。

「ちっ！フェアリーテイル最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにもミストガンにもミラにもラグナにも、あのオヤジにもな。オレが…最強だ！！！」

そういってラクサスは再び二階に上がって、奥へと行き消えていった。

「なんなのアイツ！！ちょ～ムカつく」

ラクサスが居なくなってからしばらくすると、ギルドはいつものような騒がしさを取り戻してきた。

俺はルーシィとミラの3人で、カウンターで話をしていた。エルザも誘ったのだが、今回は遠慮しておくと言ってエルザはあのまま帰ってしまった。

まあ、帰り際にエルザの耳元で「俺の家で待っていな」と言ったら顔を真っ赤に染めて帰っていったよ。

「もうその話はいいって、ルーシィ」

俺はなんとかラクサスの話題を終わらそうと言った。

「でもラグナ、あんな事言われて悔しくないの!?」

「言わせておきたいやつには言わせておけって。それに……」

パリィィィン!

持っていたグラスが俺の魔力で砕けた。

「本気で俺と戦ったら生命の危機になるのはあいつだしな」

「ヒィ!?」

俺が黒い笑みを浮かべているせいかルーシィが俺から距離を取った。

「前に……去年、ラクサスがラグナに勝負を挑んだんだけど……見事に返り討ちにあったのよ。しかも手加減された状態でよ」

「……ああ！だから、あいつとラグナは！」

「そういうことよ」

ガタガタ震えるルーシィ。

「そ、そうだ！さっきマスターが言ってた2階には上がっちゃいけないって、どういう意味ですか？」

またしばらく3人で飲んでいるとルーシィがそう切り出した。

「まだルーシィには早い話だけどね。2階のリクエストボードには1階とは比べものにならないくらい難しい仕事が貼ってあるの」

「S級のクエストだな」

「S級！？」

ルーシィはS級という言葉に過剰に反応した。

そんなに驚く話じゃないんじゃないぜ？簡単だし。

「一瞬の判断ミスが死を招くような危険な仕事よ。その分、報酬もいいんだけどね♪」

「うわ……（汗）」

「S級の仕事はマスターに認められた魔導師しか受けられないの。資格があるのはエルザ、ラクサス、ミストガン、わたしにラグナ。この5人を含めて6人しかいないのよ」

ミラは自分の名前をあえて出さなかった。

「そうなんだ～……ん！？」

ルーシィは固まってしまった。

「どうした、ルーシィ？」

俺が声をかけると、ルーシィはゆっくりとこっちを向いて俺とミラを指差しながら言う。

「……ラグナってS級魔導士だったの!?それにミラさんも!?」

「あれっ?言ってなかったっけ?そうだよ、俺もS級魔導師。ルーシィと初めて会った日もS級からの帰りだったし」

「へ、へぇ～（やっぱり、ラグナってすっごく強いんだ……まぁ、そうよね……妖精皇帝の通り名は誰でも知ってるし、この前の悪魔との戦いでも一撃で倒しちゃったんだし……私、実はすっごい人と知り合いなんじゃあ……それに、こんなすごい人に／／／）」

それからルーシィはまた固まってしまった

「（何なんだ???）」

なんで固まってしまったのかまったく理解できない。

「まぁ、S級なんて目指すものじゃないわよ。本当に命がいくつあっても足りない仕事ばかりだから♪（もしかして、ラグナの凄さに驚いてる？）」

「み、みたいですねぇ～」

ミラの言葉で元に戻ったルーシィは、苦笑いしながら答えた。

「（本当に何なんだ？）」

なんでルーシィは固まったんだ。

「あれ？そう言えば、何でミラさんはS級魔導師なのに、クエストに行かないんですか？」

それを聞き、俺の隣で酒を飲んでいたリサーナは意識を覚醒させた。やっぱり、責任感があるのか。気にすることないのに……。

「ちょっと、昔ある出来事があってね……精神的に不安定で、わたしが使う魔法はそんな状態で使うと危ないから少しの間は休養してろってラグナに言われたのよ」

「えっ？そうなの？」

ルーシィが俺を見て聞く。

「ああ。あの時のミラの状態は悪かったし、魔力に乱れもあったからな。そんな状態でＳ級や他のクエストに行かせるわけにいかなかったからな。おっと、これ以上の詮索はダメだぞ？」

「う、うん……（一体何があったのかな？）」

こうして、ルーシィに若干の疑問を残しながらも、この日は何事もなく（？）終わっていった。

そして、

「あ、待てラグナ！そこは……んん……！」

「ここか？ここがいいのか～？」

「や、あ、っは…んっ…恥ずかしいぞぉっ…！！」

「ハッハッハ！いいぜ啼いても…こんなに硬くしちまってるもんな…？」

「ち、違うっ…ラグナのバカっ…ぁっ…そんな…ひゃあぁんっ！！！」

エルザは予告通り、ラグナに喰われていた。

第１５話　最強の座（後書き）

次回、ラグナのエクシード登場！？今までどこにいたのかがわかりますよ～
お楽しみに～

第１６話　エルザの怒り（前書き）

今回、無理矢理感があります……多分。

第１６話　エルザの怒り

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「グゥオオオオオオオオ！」

やあ、みんな。ラグナだ。評議会の牢屋から帰った次の日……つまり今日だな。俺はカナとレビィを連れてクエストに来ている。Ｓ級クエストでなく普通のだがな。クエストの内容は『壊滅した闇ギルドが残した禁呪魔法によって自然から生み出された魔法生命体の呪いを解除してほしい』という内容だった。

俺は基本、解除魔法とかは使わないのでその辺に詳しいレビィを連れていくことになった。カナに関しては偶には動かないと体が鈍ってしまうとのことでついてきた。それと、今回はもう一人？いる。それは……

「ラグナ～俺を助けて～～ヘルプミー！」

ナツのハッピーと同じ種族で、名前はリクだ。毛並みは赤と白。

「リク～大丈夫か～おっと」

リクに話しかける最中に呪われたフォレスト（今命名）が根っこで俺を攻撃してきた。まあ、動きは鈍いから簡単に避けられるけどな。

「ちぃ！カードマジック・祈り子の噴水！」

カナはカードを使った魔法を使い、戦っている。今回、俺はあまり攻撃しない方がいいのだ。えっ？何故かって？俺が攻撃したらフォレストを壊してしまうからだ。

今回の依頼の内容は解除。俺が攻撃して森に被害を出すわけにはいかないのだ。今、レビィがフォレストの禁呪魔法を解除する術式を持ってきた大量の本から探している。

「カナー！俺が作ってやったカードを使ってみろー！リク！お前はカナを持ち上げてやれー」

「わかったよ！」

「アイアイサー！」

ガシッ！

カナがリクに持ち上げられ、空中に飛び立つ。

「行くよ！カードマジック・アイストルネード！」

ヒュウウウウ――――！

カチイィィィィィン！

フォレストの足元から氷の竜巻が発生するとフォレストを氷漬けにした。

「すっご！？何この威力！？」

カナは自分が放ったカードの力に驚いている様子。

「カナー！リクー！降りて来い～」

声をかけると2人は地上に立つ。

そして、俺はカナに抱きつく。

「ちょ、ラグナ！？／／／」

いきなり抱きつかれて驚き、顔を赤く染めるカナ。う～ん、いいねえ、その表情。

「いや～頑張ったカナにご褒美と思ってね」

「ご、ご褒美／／／」

ご褒美と聞いて余計に顔を赤くするカナ。

いい雰囲気になりかけていると、

「……ふ、２人とも！？／／／何してんの！！」

レビィがやってきた。くっ！このままキスをしようと思ったのに！

「レビィ！解除の方法は見つかったのか？」

「ええ。全くあんなに解除する術式を見つけるのに時間かけたのは久しぶりだったわ」

そういい、レビィは持ってきていた本のページを開き、俺に見せる。
カナも俺から離れ、一緒にその本のページを見る。

「これが見つけた解除の魔法術式よ。今から解除するから周りの警護よろしくね？」

「ああ、任せな！」

「解除するまでしっかり守るよ！」

「おおー！」

かくしてレビィによる解除は始まり、数分後、解除に成功したのであった。

解除を確認した俺たちは依頼を受けた村へ戻り、報告するため戻っていった。

～依頼のあった村～

村長に解除は成功したことを教えると村人たち全員が喜び声を上げている。その後、報酬のお金と本をもらい、俺たちはギルドに帰るために支度をしている。

なお、本に関しては、

「ええ!?いいの、この本貰っても?」

「ああ。今回、クエストを請け負ったのは俺だが、活躍したのはレビィとカナだしな。本はレビィにあげるよ」

「ありがとう!この本、前に見た時に欲しかったけど随分古い本だし在庫なくてがっかりしていたところなの!」

嬉しそうにするレビィの頭を撫でる。

「ちょ、子ども扱いしないでよ!!」

「おっと、悪い悪い。いい笑顔だったからなついな」

「もう～これからは気をつけてよね！」

レビィは少しご立腹のご様子。

カナはというと、

「アハハハハハ！」

報酬金を手にして笑っていた。大方、これで酒代に困らないと思っているんだろうな。目がイッてしまっているぞ（汗）

リクはというと、

「ガツガツガツガツ！」

俺が持っている最高級の肉を食べていた。骨付きだぞ。

「くはぁ～美味しかった！」

手で腹をポンポンと叩いている。はは、元気だな。

「ちょっと、外出てくるな」

「いってらっしゃ～い」

「いってら～」

「ら～」

3人に見送られ、外に出ていく俺。

村から出て森に来た俺。周りに変わった様子はないかを見ているのだ。特に変わった様子がないので村に帰ろうとすると……

ポタ……ポタ……ザァ～～～～！

いきなり雨が降り出した。

「おかしいな。今日は一日中晴れだと思ったが……誰だ！」

俺は俺にいる方向に歩いてくる人の気配を感じ、声をかける。すると、

「しんしんと……私は怪しい人物ではない……しんしんと」

傘を差した女性がいた。……ん！？しんしんとって……もしかして？

「私は幽鬼の支配者（ファントムロード）の魔導師です……名前はジュビア・ロクサーといいます」

「あ、ああ。そうだったのか。すまないな怒鳴ってしまって。俺は妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導師、ラグナ・ギースだ。よろしくな」

まさかこんな所でジュビアに会うとわな。

「ラグナ……破邪竜のラグナでしょうか？」

「ああ、そうだけど？」

「私のギルドにも滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）で、ガジル君がいますので、彼から話しは聞いています。「あいつは俺が倒してやるぜ……ギヒィ！」と」

……これはあいつと戦うフラグなのだろうか？おっと！そんなことをしている暇じゃないな！

「すまないな。仲間が待っているんだ。雨が降ってきているし、風邪を引くなよ？じゃあな！」

そういい、俺はその場から離れていった。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ジュビア～

彼が破邪竜のラグナ。物凄い魔力だったわ。私では絶対に勝てないと思った。ガジル君でも勝てないわね。

それにしても、彼はこの雨を見て何とも思わなかったのかな？私が来た瞬間雨が降り始めたのに。今まで付き合った人たちはこの雨がウザいとか、色々言っていたし、初めて会った人たちだって私が来たことで雨が降り始めたことを酷い言い方をしていたのに。

何故？でも、彼と少し話していただけで心が……晴れたような気がした。彼と一緒にいれば何かあるのか？

ギュウゥゥゥゥ

この気持ち、次に会った時に確かめればいいわ！ジュビア、頑張る！

～ＳＩＤＥ：ジュビア　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

ジュビアと会った後、俺はカナ・レビィ・リクと合流し、ギルドに戻ってきて聞いた最初の声が、

「あの……大バカものどもがあああああああああああ！！！」

エルザの怒りに満ちた声だった。

エルザの怒りの声にギルドにいるメンバーはテーブルの下に隠れ、カナ・レビィ・リクは俺の後ろに隠れている。

「エルザ。一体どうしたんだ？」

俺はマスターに報告をしながらエルザに聞いた。

「ああ。ナツ・ハッピー・ルーシィがS級クエストに向かったらしい」

バキッ

俺が手を置いていた椅子が壊れた。

「んだとぉ！？」

俺はマスターとミラ、リサーナを見る。頷く。他のメンバーを見ても頷く。本当のようだ。

「……それで、グレイがいないのは何でだ？」

「ナツ達を連れ戻しに行ったはずだが、半日立っても帰ってこない。つまり……」

「ナツ達と一緒にそのクエストに行ったと？」

頷くエルザ。俺は頭が痛くなってきた。マジか……今日だったのか。デリオラ編は。

「それで、先ほど私もクエストから帰ってきてマスターに連れ戻すよう言われていたところだ。ラグナも一緒に来てくれないか？」

「いいぜ。カナ・レビィ。俺の荷物頼んだ」

俺は背負っていた荷物を2人に預ける。

「よし！エルザ！俺の肩に掴まれ！リク！お前は俺の頭に乗っかっていな！」

外に出てエルザは左手で荷物の縄を持って、右手で俺の肩につかまる。

リクは俺が言ったように頭の上に乗っかっている。

「行くぞ。まずは港だな。転移！」

そして、俺・エルザ・リクは転移魔法で港まで転移していった。

第16話　エルザの怒り（後書き）

ジュビアとの会合。無理矢理になってしまいました。
次回もお楽しみに！

第17話　ガルナ島

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺とエルザ、リクは港町ハルジオンにいる。

「それで？ここまで来たのはいいけど……呪われた島ととか言われているガルナ島に船を出してくれる奴はいないだろう」

「心配するな、あれを見ろ」

そう言ったエルザが指差す先には、

「なるほど、海賊船か」

「あぁ、あれなら問題ないだろう」

1隻の海賊船が港に停泊して、近くの市から物質を強奪していた。

「何というタイミングでいるんだあいつらは……けど」

「好都合とはこのことだな」

「飛んで火にいる夏の虫～」

俺とエルザは顔を見合い、海賊たちを粛清したのであった。

その後、俺たちは海賊たちの船に乗ってガルナ島へと向かっている。

「あ……あんな島に何しに行くつもりでぇ」

俺は震えるような声が下からしたので見た。すると、この船の船長が震えながらエルザに聞いていた。

ちなみに、他の船員たちはデッキで気絶している。なお、これはエルザがやったことである。

「いいから舵をとれ」

「ひっ……か、かんべんしてくれよ！！ガルナ島は呪いの島だ

！！！噂じゃあ、人間が悪魔になっちまうって……」

「興味が無い。掟を破った者どもに罰を与えに行く、それだけだ」

エルザはそんな船長の訴えを一蹴した。

エルザ、本気で怒ってるなぁ……仕方なねえなぁ～

「あらよっと」

俺は下に降りてエルザの近くに行く。

「エルザ」

「なんだ？」

うわー、すごい不機嫌だなエルザ。

「少し落ち着け」

ポンポン

俺はエルザの頭に手を置いて、優しく撫でた。

「な!?／／／わ、私は、落ち着いている／／／急に頭を撫でるな!!」

エルザは顔を赤くして反論する。

「いやいや、俺にはそうは見えないね。ナツたちが心配なのはわかるそれも行き先はガルナ島だ、尚更、心配だろうでも、助けに行く俺たちが冷静じゃなかったら本末転倒だろ?」

「私は助けに行くのではない!!!罰を与えに行くんだ!!／／／」

「……（ジィ――――）」

「ほ、本当だぞ!?助けに行こうなどとは微塵も……」

「……（ジィ――――）」

「微塵も…」

「……（ジィ――――）」

「みじ、ん、も……／／／」

「……（ジィ――）」

無言で見る俺に遂にエルザが折れた。

「……ラグナは卑怯だな／／／」

「ふっ、やっと素直になったな」

俺は更にエルザの頭を撫でた。

「／／／／」

俺に撫でられ更に顔を赤くしながらも、どこか嬉しそうなエルザだった。一瞬、エルザを喰いたくなったが、今はナツ達の方が優先だし、我慢だ。

「あ、姉御！兄貴！見えてきましたぜ！」

俺はちなみに海賊たちには兄貴と呼ばれている。

「ん？海岸で誰かが戦っているな」

「何？」

俺は音がした方を見ると誰かが戦っていた。エルザは俺が指さす方を見ると……険しい表情をして船から飛んで行った……えっ！？飛んで行っただと！？

「リク！？……いない」

エルザが飛んでいるのはリクが掴んでいったからか。しゃあねえな。

ヒュウウウウウ～～～

足元に風の魔力を集中し、飛び立ち、海岸の上に来るとエルザがルーシィを捕まえていた。

「ルーシィ……なぜ私がここにいるか分かっているな」

「連れ戻しに……ですよね～」

ガタガタ震えながらエルザを見るルーシィ。

「よかった～～～!!ルーシィ、無事だったぁ?」

そこへ、ハッピーが現れた。

そして、

「……」

「……（汗）」

「……（ギロリ）」

「!!!!!!!!!!!!!」

ビュ〜〜〜ン！！

エルザとハッピーの視線が重なり、エルザに睨まれハッピーは表情が真っ青になり、ハッピーはその場からものすごいスピードで逃げ出した……が

「はい、確保」

俺が捕まえた。

「あぁぁいぃぃぃ〜〜〜」

俺の腕の中で暴れていたハッピーに拳骨を食らわすと屍になったかのように静かになっている。

「ナツは何処だ！」

「ちょっと聞いて、勝手に来ちゃった事は謝るけど、今この島は大変な事になってるの、氷漬けの悪魔を復活させようとしてる奴等がいたり、村の人達はそいつらの魔力で苦しめられていたり、とにかく大変なの！あたし達、なんとかこの島救ってあげたいんだ！」

あ、その言い分だと今のエルザじゃ逆効果だぞ。

「興味が無いな！」

「じゃ、じゃあせめて……最後まで仕事を……」

シャキィン

「！！！」

やらせて、そう続けようとしたルーシィだったが、その話を遮り、エルザに喉元に剣を突きつけられて何も言えなくなった。

「仕事？違うぞルーシィ。貴様等はマスターを裏切ったんだ。……ただで済むと思うなよ」

「（こ、怖い……助けてラグナ～）」

ルーシィが涙目で俺に助けを求めている。はぁ～仕方ないな。

「エルザ。説教はその辺にして一旦、その村に向かうぞ。ナツとグレイと合流しないといけないからな」

剣を突き付けるエルザに言うと、

シャキィン……バッ！

剣を消し、ロープで動かないように拘束したルーシィを担ぐ。

「そうだな。一旦、その村へ行こう」

こうして、俺たちは海岸から村へと向かった。

～村の資材置き場～

俺とエルザが村に着いてみると怪我をしたグレイが治療されていると聞いて俺はグレイが寝ているテントに入り、治療を終え、今はグ

レイが目を覚ますのを待っている。

パサッ

「！！！ラグナ！？エルザ？！？！！？」

すると、テントの中に目が覚めたのか、今まで気を失っていたグレイが中に入ってきた。

「ギロリッ」

「よう、グレイ。ひどくやられたな。治療はしておいたぜ」

エルザはグレイの方を向いて睨んでいる。

「だいたいの事情はルーシィから聞いた。お前はナツたちを止める側ではなかったのかグレイ」

「……」

グレイはエルザから咎められて、何も言えずに顔を逸らした。その

行動にエルザは、

「あきれて物も言えんぞ」

「ナ、ナツは？」

グレイは話題を変えた。

「それは俺たちが聞きてぇよ。この島にいるのは分かるが、何かが邪魔して正確な位置が掴めん」

俺はため息を吐きながらグレイの問いに答えた。

「ルーシィ……ナツはどうした・」

グレイは今度はルーシィに聞いた。

「わ、わかならい。村で零帝の手下と戦ってたハズなんだけど……。そいつ等は片付けられてたのに、ナツの姿が見当たらなかったの。そ、それでね……とりあえず村に行こうってなったんだけど今、村が破壊されたって話したら、グレイの所に連れてけって言われて……」

ルーシィはエルザがよほど怖いのか、ビクビクしながらグレイの問いに答える。

「よく、この場所がわかったな……村の資材置き場だと聞いたぞ」

「オイラが空から探したんだよ……縛られたまま」

「ククク」

グレイへのハッピーの答えに苦笑いする俺であった。

エルザは出口に向かって歩きながら、

「ラグナ、グレイ。ナツを探しに行くぞ。見つけ次第、ギルドに帰る」

「はいよ」

スクッ

俺は立ち上がる。

「な、何言ってんだエルザ……事情を聞いていたなら今、この島で何が起こってるのか知ってんだろ。それにラグナ、なんでお前は何にも言わないんだよ！？」

ギルドに戻ると聞いて、グレイは反論した。

「それが何か？」

それに対して、エルザは再び冷たく返した。その一言で場の空気が一気に冷える。

「ラグナが何を考えているかわからないが、私はギルドの掟を破った者を連れ戻しに来た。残るはナツ１人。それ以外の事には一切の興味が無い」

「この島の人たちの姿をまたんじゃねぇのかよ……それを放っておけと言うのか！？」

グレイは両手を広げエルザを説得する。その顔はどこか焦っている

ように見える。

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理されたギルドの魔導士に任せるのが筋ではないのか？」

エルザは眉１つ動かすことなく言った。

「……見損なったぞ、エルザ」

それを聞いても納得できないグレイは、歯をくいしばって言い放った。

「何だと？」

その一言にエルザも反応する。

「グレイ！！エルザ様になんて事を！！！」

「？様〃……！？」

「……」

ハッピーはグレイの言葉に対して、ルーシィはハッピーの様付けにそれぞれ反応したが、俺は無言でエルザとグレイを見ている。

シャキ

「「！！！！！」」

今度はエルザはグレイの喉元に剣を突きつけた。

「お前までギルドの掟を破るつもりか。ただでは済まさんぞ」

エルザはグレイを脅すように言ったが、

ガシッ

「！！！」

おお、グレイのやつ、突きつけられたエルザの剣を素手で掴んだぞ。

「勝手にしやがれ！！！これは俺が選んだ道だ！！！やらなきゃならねぇ事なんだ！」

グレイはまっすぐエルザの目を見て言い切った。剣を握るグレイの手からは血が流れている。

パッ

グレイは剣から手を離し、俺たちに背を向け、

「……最後までやらせてもらう。斬りたきゃ斬れよ！！」

「ぐっ！」

そう言ってグレイはテントから出て行った。

グレイが出ていったのを見ていたエルザはルーシィ達の方に向いた。

そしてエルザはルーシィ達の方に向いた。

「ちょ、エルザぁ～～。おおお、落ち着いて……！！！」

「そうそう。グレイは昔の友達に負けて気が立ってるんだよぉ～～」

ルーシィとハッピーはエルザが完全にキレたと思い、必死になだめる。

「……ギロリッ」

「「ひぃぃぃぃ！！！」」

エルザに睨まれ本気でびびる2人。エルザはそんな2人に剣を振るい……

バサリ

「「！？」」

2人の縄を切った。そしてエルザもグレイを追いかけるように出口に向かう。

「……行くぞ」

「え？」

「これでは話にならん。まずは”仕事”を片付けてからだ。……それでいいだろぅ、ラグナ？」

「その通りだな」

どうやらエルザもやる気になってくれたようだった。俺もエルザの問い掛けに笑顔で了承した。

その事に2人は嬉しそうな顔になる。

「でも、勘違いするなよ。罰は受けてもらうぞ」

「「……あい」」

しかし、そんな2人に釘を刺した。

そして俺たちは遺跡へと向かうのであった。

第１８話　デリオラの最後。晴れるグレイの闇

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺たちは今、月の遺跡へ向かっている。その途中でグレイが話をしてくれているところだ。

「デリオラを倒す？それがあいつの目的なの！？」

「わざわざ氷漬けになっている奴をか？」

忘れかけている原作知識から思い起こし、一応聞いておく。

「……リオンは昔から、ウルを超える事だけを目標にしてきた。だから、そのウルがいなくなった今、ウルも倒せなかったデリオラを倒す事で、ウルを超えようとしている！」

「そっか……死んだ人を追い越すにはその方法しか……」

「あい」

ルーシィは瞳を伏せながら納得の声をあげ、ハッピーもそれに頷く。

「いや……あいつは知らないんだ」

「え？」

だが、ルーシィの言った言葉に対して返ってきたのは否定の言葉。

「確かにウルはオレたちの前からいなくなった。だけど……「生きている……か？」！？ラグナ、どうしてそう思う？」

3人と2匹が俺を見る。

「どうしてって……俺も絶対氷結（アイスドシェル）が使えるからな」

『なに！？（うそー！？）』

走るの（飛ぶの）をやめて俺を見る3人と2匹。

「止まるな。走りながら話してやる」

3人と2匹は再び、走り（飛び）だす。

「絶対氷結（アイスドシェル）を使った術者は確かにその身を氷にする。が、別に死ぬわけではない。意志……魂は絶対氷結（アイスドシェル）の氷と同化している」

俺が話をしていると遺跡が見えてきた……のだが、

「遺跡が……傾いて……る？」

「どうなってんだー！？」

斜めに傾いた遺跡を前に目を丸くするルーシィとハッピー。そう、これでもかと言わんばかりに遺跡が傾いているのだ。まあ、十中八九

『ナツだな』

昔からナツといる俺たちにはこんなことをしでかすのはナツしかいないという確信があった。

「大方、月の雫（ムーンドリップ）をデリオラに浴びせないようにと思って遺跡の柱を破壊したんだな……さすが、壊すことに長けているなナツ」

「全くその通りだな。あの壊し魔が、こんな所で役立つとは」

「本当にね」

「あい」

話していると突然弓矢で攻撃をされた。

「あぶねぇ！」

俺は隣で走っていたルーシィを抱え、ジャンプして避ける。

シュタ！

「大丈夫か？」

「へぇっ！？あ、う、うん／／／／（か、顔が近いんですけど／／／／）

」

「何者だ！！出て来い！」

エルザが剣を構えながらそう言うと、

「見つけたぞ。妖精の尻尾！！」

草村からリオンたちの手下と思われる顔を布で隠した魔導士たちが大量に現れた。
その数は１００人を超えている。

バッ

「！？」

そいつらをしとめようとグレイが動くよりも早く俺とエルザが前に出る。そして俺とエルザは一度、お互いの顔を見て頷いてから……

「行け！！グレイ」

「ここは私たちに任せろ」

「「リオンとの決着をつけてこい！！！」」

そうグレイに言った。

「ラグナ……エルザ……（コクン）」

グレイは俺たちの言葉に頷くと走って行った。

「さて、ゴミ掃除を開始しようかエルザ」

俺は刀を出す。

「そうだな。コイツラを片付けてナツとも合流せねばな」

剣を構えるエルザ。

「あたしもいるわよ！」

「オイラもいるよ！」

「俺もな！」

ルーシィは鞭を構える。

ハッピーとリクも羽を広げ、戦闘態勢を取っている。

そして、戦闘を開始した。

～戦闘開始数分後～

グレイを先に行かせた俺、エルザ、ルーシィの3人は魔導士たちを確実に倒していた。ハッピーとリクは敵を翻弄させている。

「ふん！！」

スバッ！！

「グハッ！！！」

「ウラァァ！！！」

ボコッッ！！！！

「グェッ！！」

そして最後の1人を俺が倒した。

「今ので最後か？」

「そうみたいだな」

「やっと終わったぁ～～……」

3人は周りを見回しながら言った。特に俺とエルザの周りには多くの魔導士が倒れている。

ゴゴゴゴッ、ズゴゴゴゴッ！！！

すると突然、遺跡を中心にして大きな地鳴りが響いた。

「何の音だ？」

「そ、そんな……。傾いた遺跡が……元に戻ってる」

3人が遺跡を見ると、さっきまで傾いていた遺跡が元通り真っ直ぐたっていた。

「これは……まずいな」

「え？」

「遺跡が傾いていたのが戻ったって事はだ。月の雫（ムーンドリップ）の儀式が再開されるってことだ」

敵はリオンたちだけだと思ってたが、……そう言えばここに来てから覚えのある匂いがしたな。まさか……そうか、あいつが直したのか。

俺の脳裏に遺跡を元に戻した人物が思い浮かんだ。

「エルザ、ルーシィ。悪いけど俺は先に行く。遺跡でまた合流する」

「あぁ」

「わかったわ」

2人にそう言い残し俺は先を急いで遺跡内へと向かう。もし……俺がいることで生じたイレギュラーな出来事があるとしたら……急がなくては！

～ＳＩＤＥ：その頃のナツは～

グレイがリオンとの決着をつけている時、ナツはザルティという？失われた魔法（ロストマジック）〟を使う魔導士を追いかけ、デリオラが閉じ込められた氷の所までやってきた。

ビチャ……ビチャ……

「うおおっ!?大変だ!!デリオラの氷が溶けてきた!!」

そしてナツがザルティに追い付き、ふとデリオラを見上げると、徐々にデリオラの氷が溶け始めていた。

「くそっ、しくじった!!頂上にいる奴なんとかしね～と!!!!」

そう言ってナツがUターンして頂上に向かおうとすると、

ズボッ

「ぐおおっ!!!」

ナツの足元に穴が空いて、ナツは穴にハマってこけた。

「おや?逃げる気ですかな?しかし、そうはいきませんぞ」

それをやったのはもちろんザルティだ。

「私を追ってきたのはミスでしたね……?火竜(サラマンダー)〃くん。」

ザルティは不敵な笑みを浮かべている。

「クソっ！」

逆にナツは焦る。デリオラの復活まで残された時間は少ない。

「ハッハッハ！俺が来たぜ、ナツ！」

シュタ！

「「！！！！！」」

ラグナが到着した。

～ＳＩＤＥ：戻ってラグナ～

俺がナツの所に来ると穴にスッポリと嵌っているナツと仮面をつけた男……否ウルティアがいた。

「お前が暴れていたおかげで迷わずここまで来れたぜ」

「ラグナ！」

俺が来たことが嬉しいのか目が輝いているなナツ。

「クッ！ここで妖精皇帝（フェアリーエンペラー）が来るとは……！（まずいわね。ラグナが来るなんて予想外よ？！）」

「ナツ。コイツは俺が相手してやるから、お前は上に行って儀式を止めてこい」

「……ちぇえ！俺の獲物だけどよ……今はデリオラが最優先だからな！こいつは頼んだぜ！」

穴から脱出したナツがそういい、俺たちに背を向けて走っていく。

しかし、そんなナツをウルティアが黙って見ているハズもなく、

「行かせるとお思いですか？」

右腕を前に伸ばし、再び己の魔法?時のアーク〃を発動しようとしたが、

「やらせると思ってんのか?」

ボコッ……ドゴン!!!

「!!きゃぁぁぁぁぁぁぁ~!?」

俺はウルティアに真横に現れ、腹を蹴って吹き飛ばして岩に激突させた。

それによって、砂煙がおこる。

「……いつまで、その格好でいるつもりだ。蹴った時、女声に戻ってたぞウルティア」

その砂煙の中、先ほどまでザルティと名乗っていた男を俺はそう呼んだ。

「さすがは、ラグナね。やっぱり、この程度じゃあ、気付かれたしまうのね。……でも女の腹を思いっきり蹴り飛ばすなんてひどくないかしら？お嫁に行けなくなったら、責任とってくれるの？ラグナ」

そして俺の視線の先、砂煙が晴れてそこに立っていたのは仮面をかぶった男ではなく、１人の女……ウルティアだった。

「当り前だ。滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）の鼻を舐めるなよ？お前がここにいるのはジークレインの命令か？」

「（さ、最後のはスルーなのね……残念）さぁ？こんなことをしているとデリオラが……」

ウルティアが何かを言いかけると、

『グオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！』

大きな雄たけびが遺跡内に響き渡ってきた。

「くっ！この雄たけびは……デリオラが復活したのか！」

「言うのが遅かったわね。でも、また会いましょラグナ？」

チュっと投げキッスをするウルティアの足元に転移魔法陣が浮かび上がっていた。

「待て！」

ウルティアに掴みかかるも一歩遅かったようだ。

シュンッ！！！

ウルティアの姿は消えた。

「ちっ！逃がしたか！」

『グオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！』

また聞こえてきやがったか！けど、おかしいな。復活して少ししてデリオラは活動を停止するはず。なのに、何で……停止しない？やっぱり、俺と言うイレギュラーのせいか？

「急ぐか！」

俺は遺跡の下に向かうため、一々階段を使うのも面倒なので下まで一直線になるように魔力弾を地面に向かって放つ。

ドゴオォォォォォォォン！

爆発音と共に下の地面に大穴ができ、そこから下へと向かう。

下が見えてくるとナツ・グレイ・リオンがいた。デリオラは暴れていた。

チッ！やっぱり、俺がいるせいか！

シュタ！

「「ラグナ！！」」

「何？ラグナ……妖精皇帝（フェアリーエンペラー）のラグナ・ギースか！」

俺はデリオラの方を向いて、

「ブッ飛べ！右手の雷と左の炎、二つの属性を合わせて……破邪爆竜裂拳！」

両手を重ねての破邪竜の滅竜魔法を使い、デリオラを殴る。デリオラも俺に向かって拳を振る。

ズドオォォォォォン！

「うおおおおお！！！」

「くっ！」

「なんて魔力だ！」

他の3人は魔力の衝撃破に吹き飛ばされないように岩に張り付く。

「うおおぉぉぉぉぉぉ！」

魔力と魔力の籠った拳がぶつかり合っていると、

バキッ！バキバキバキ！

突如、デリオラの右腕に突然亀裂が走った。その亀裂は、右腕だけじゃなく、体全部に亀裂が走った。

『っ！？』

「（なるほどな、俺がいたとしても少ししか身体が持たなかったのか）」

俺は冷静にデリオラを観察する。最初はてっきり、デリオラが完全に復活したのかと思ったが、そうじゃなかった。

「なるほどな……。こいつは俺とぶつかり合った瞬間、完全に死んだのか」

「ど、どういうことだ！？」

リオンが俺を見て聞いてくる。

「つまりだ。グレイとお前の師匠……ウルが絶対氷結（アイスド・シェル）を使い、自身を氷にし、デリオラは氷漬けにされ、今までずっとその氷はデリオラの生命力を奪い続けた」

「！そうか！さっきまでのデリオラはその生命力は僅かしかなったのにラグナと戦ったせいでその生命力が完全になくなったのか！」

「その通りだ」

俺たちはただ大きな音を立てて崩れるデリオラを見ている。

ガンッ！

リオンは拳を地面に叩きつけた。

「かなわん……。俺には、ウルを越えられない」

そして涙を滲ませてそう言った。

「グレイ……。お前の師匠はスゲーな」

俺はグレイに笑顔で言った。

「……」

そして最後のカケラがグレイの足元に転がった時、グレイはゆっくり目を閉じた。

――――悲しむ事はない。私は生きている――――

それは、ウルの最後の言葉……。

――――氷となって永遠に生きている。歩き出せ、未来へ。お前の？闇〃は、私が封じよう――――

その声がグレイの耳に届いた時、

「ありがとうございます。？師匠〃」

グレイの中の？闇〃が溶け、涙と共に流れていった。

すると、突然俺の頭の中に声が響いてきた。

――――グレイを頼んだよ。色男さん♪

「!?（俺にまで聞こえるのか。ウルさんよ。安心しな。グレイは仲間だ。大切な……な）」

――――そうか。グレイもいい仲間を……もったね

そう、ウルの声が俺にも聞こえ、聞こえなくなっていった。一体なぜ俺にまで?まあ、考えても意味はないか。

俺は海へと流れていくウルの氷のかけらを見ながら、またどこかで声が聞こえる。そんな気がした。

その後、エルザ達と合流した俺たち。が、ナツはエルザの姿を見るや否やガタガタ震えだし、エルザはナツを睨んでいた。それを見た俺は自業自得だなと思い、無視することにした。

第１８話　デリオラの最後。晴れるグレイの闇（後書き）

次回ぐらいでデリオラ編は終わりかな？

募集です

え～読者のみなさんにお願いがあります。作者の書いている小説の主人公ことラグナ・ギース君は破邪竜の滅竜魔導師（ドラゴンスレイヤー）であるのは読んでいれば知っていますよね？

どうも、作者が書いているオリジナル滅竜魔法のネーミングや組み合わせの名前が悪いので、読者の皆さんに技を考えていただきたい。ただ、滅竜奥義に関しては既に思いついています。読者のみなさんに考えていただきたいのはナツやガジル、ウェンディが使っている～の咆哮・～の鉄拳と言った原作にある技以外を考えていただきたい。

考えていただき、感想に書かれた技は使います。

書き方はそれぞれ任せます。ラグナは滅竜魔法に他に属性と一緒に使いますので、それをふまえて考えてください。

よろしくお願いします。

この募集は何時でも受け付けています。

第１９話　デリオラ編、終結（前書き）

セツナ様・とうふや様・支配者様・鈴龍様！募集ありがとうございました！

他の読者様達も募集は続いていますのでアイディアをください！

１１月２２日、後書き変更

第１９話　デリオラ編、終結

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「いや～、終わった終わった～！！！」

「あいさ～！！！」

ゴタゴタは片づけられ、ナツとハッピーは両腕を上に伸ばし、全身で嬉しさを表現した。

「本当、……一時はどうなるかと思った。すごいよね、ウルさんって」

しみじみと言うルーシィ。

「……フッ」

グレイの表情も悪くない。

「これで俺たちもＳ級クエスト達成だ～っ！！」

「わ～い！！」

「もしかして、あたしたち2階へ行けるのかな！？」

「ははは……」

4人は、それぞれが違う反応をしていた。よほど自分たちがS級クエストを達成出来たことが嬉しかったのだろう。

いや、実際はそうではないな。どう見ても4人は忘れているのだ。

「お前ら。大事なことを忘れてないか？」

『えっ？？』

4人が俺を見る。

俺は指を4人の正面へと向ける。

「4人とも。正面を見ろ」

4人は俺にそう言われ、正面を見て固まった。

何故なら……

「……」ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

無言の威圧感が4人を襲う。

そこには、恐ろしい形相で4人を睨みつけるエルザ（般若）が立っていた。

そして、4人は思い出した。

「そうだ！！お仕置きが待ってたんだ！！！」

ルーシィは俺とエルザを見て、なぜここにいるのかを思い出し、顔を真っ青にする。他の3人も同じだ。顔が真っ青になっている。

「お仕置きの前に、悪魔にされた村の人たちを救おう。それが今回

の依頼だろ？エルザもそれでいいよな？

「……あぁ。S級クエストはまだ終わっていない」

「え！？だ……だって、デリオラは死んじゃったし……村の呪いだってこれで……」

ルーシィはまだ終わってないと言われて驚き、これで終わりじゃないのかと聞く。

「いや……。あの呪いとかいう現象は、デリオラの影響ではない」

しかし、エルザは否定した。

「月の雫の膨大な魔力（ムーンドリップ）が人々に害を及ぼしたのだ。デリオラが崩壊したからといって、事態が改善する訳がないだろう」

「そんなぁ～～」

そう言われてルーシィは、疲れたようにへなへなと座り込んだ。よほどショックだったのだろう。

「んじゃ、とっとと治してやっか～っ！！」

「あいさ～！！」

ナツとハッピーはハイタッチをして言った。この2人はまだ元気なようだった。

「どうやって治すんだよ？」

「大体の予想はついてんだけど、まだ確信がないからなぁ。とりあえず、話を聞いてみようじゃないか」

そう言った俺は立ち上がる。

「誰に？」

「いや、誰って……いるだろ1人。月の雫（ムーンドリップ）を実行していた主犯格が俺たちの傍に」

「「あ」」

俺の指す方には、黙って自分たちの様子を見ているリオンがいた。

「俺は知らんぞ？」

「何だとォ！？」

「とォ！？」

村人たちが悪魔になってしまった事について、月の雫（ムーンドリップ）の実行者であるリオンに聞いての返事は、全く知らないと言った。

「3年前、この島に来た時、村があるのは知っていた。だが、俺たちは村の人々には干渉しなかった。――奴等から会いに来る事もなかったしな」

「3年間、一度もか？」

村人たちが3年間、一度もリオンたちに接触しなかった事に対して、エルザは疑問を持った。

「そう言えば、遺跡から毎晩のように月の雫（ムーンドリップ）の光が降りていたハズ

だよね？なのに、ここを調査しなかったのは、おかしな話よね」

ルーシィも顎に手を当てながら不思議そうに言った。

「リオンの話が本当なら、月の雫（ムーンドリップ）の人体への影響も疑問だな」

「そうだな」

俺の発言に対して、エルザは頷いて同意を示した。

「ん？……何でだ？」

「そうだよっ！！それじゃあ、コイツらは悪くないって事になっちゃうよ！？」

「いや、そもそも考えてみろよ。３年前から今日までずっと月の雫（ムーンドリップ）の光を浴びて悪魔になっちまったんなら、その儀式を実際に行ったリオンたちも同じ光を浴びてたんだぞ？なのに、リオンたちに変化がないのは何故だ？」

「確かに」

「む……そうか」

「あい」

最初に俺の発言に疑問を持っていた3人も、説明を聞いて納得してくれた。

「とにかく、もう一度、詳しく村人に話を聞く必要があるな。行くぞ」

一旦話を切り上げて、エルザは村に戻ろうと言った。

「行こ～たって、ど～やって呪いを解くんだよ？」

「さぁな」

「あらら……」

そして、エルザたちは村へと向かって行った。

だが、俺とグレイだけは未だにリオンを見ていた。

「何、見てやがる」

「お前もどっかのギルドに入れよ。仲間がいて、ライバルがいて、目標がいて……お前にも、きっと新しい目標が見つかる」

「そうだな。見た感じリオンも結構な使い手みたいだし、入ろうっていう気持ちさえあれば、何処でも入れると思うぞ」

「く……くだらん……さっさと行け」

俺とグレイにそう言われ、リオンはそっぽを向いた。

「……素直じゃねぇ奴（ボソ）」

「……全くだ（ボソ）」

「……何か言ったか？」

「何でもねぇよ。じゃあまたな、リオン」

「今度はどこかにギルドに入っていたら一緒に仕事しような」

「とっとと行け！」

そう言って、俺とグレイもエルザたちの後を追った。

「……ギルド、か。」

上を向いて、どこか笑顔で呟いたリオンの言葉は、誰にも聞かれる事はなかった。

村に戻ってきた俺たちだったが、

「あれ？」

「誰もいないよ？」

村の資材置き場についたが、そこには誰の姿もなかった。

「ここにみんないたのか？」

「村がなくなっちゃったからね。でも……どうしたんだろ」

村がなくなった今、この資材置き場以外に彼らが住む場所はない。
なのに一人もいないというのは少々おかしくはないか。

「おーい」

「とりあえずキズ薬と包帯もらっとくぞ」

「皆さん！　戻りましたか！？　た、大変なんです！」

「！」

するとようやく姿を見せたが何やら慌てており、

「大変？」

「と、とにかく村まで急いでください！」

せかされた俺たちは何がなんだかわからない状態で後を追っていった。

「な、何これ……」

「昨日……村はボロボロになっちゃったのに……」

男に案内され、ついて行った先は村があった場所。……のはずだったのだが。目の前には溶けてなくなる前の村が寸分違わずに建っており、ルーシィとハッピーは呆然と呟く。

「元に戻ってる……。どうなってんだコリャ……まるで時間が戻ったみてーだ！」

「せっかく直ったんだし、アンタは触らないほうがいいと思う」

「というか、時間？」

……ウルティアか。時間を操ることのできるあいつに取って壊れた村を元に戻すことなんて造作もないか。気まぐれな奴だから、気が向いただけなんだろう。次に会った時にでもお礼は言っておくか。

俺たちは、村人から再び話を聞くために、村の入口の所に集まってもらった。

「今までの話を整理しておこう。君たちは紫の月が出てから、そのような姿になってしまった。間違いないか？」

エルザは腰に手を当てて、村長に聞いた。

「ほがぁ……正確には、あの月が出ている間だけ、このような姿に……」

「つまり、それは3年前からという事になる」

「確かに……それくらい経つかも……」

「あぁ」

それに村人たちも同意を示した。

「しかし……この島では3年間毎日、月の雫（ムーンドリップ）が行われていた」

そしてエルザは腕を組ながらスタスタと歩きながら話す。エルザの様子は、分からない事を聞いているというよりも、テストの答え合わせをやっているという感じだ。

へぇ～。流石はエルザだな。どうやらこの島の仕掛けに気付いているみたいだ。

「遺跡には、一筋の光が毎日のように見えてい……きゃあ！！」

ズボォ！！

エルザは落とし穴にハマった。その落とし穴は、ルーシィが罠として作っていたものだった。

「お……落とし穴まで復活してたのか……」

「きゃ……きゃあって、言った……ぞ」

「あたしのせいじゃない！！あたしのせいじゃない！！」

「大丈夫か、エルザ？」

落とし穴に落ちたエルザに、俺は手を差し出した。

「……あぁ／／／（くっ！ラグナの前でこんなことを！！この落とし穴を作った本人を見つけたら……ただでは済まんぞ！）」

そして、エルザは俺の手を掴んで穴から出て来た。

「つまり。この島で一番怪しい場所ではないか」

落とし穴から出て来たエルザは、何事もなかったかのように話を続ける。

「うぁ……（汗）何事もなかったかのようだぞ」

「たくましい……」

「なぜ、そんな場所を調査しなかったのだ？」

ざわ……ざわ……ざわ……

エルザの問い掛けに村人たちは、ざわめき始めた。

「そ、それは……村の言い伝えで……あの遺跡には、近付いてはならんと……」

「でも、そんな事を言ってる場合じゃないはずだぜ。死人も出てるし、ギルドの報酬額の異様な高さから見てもな」

俺の追い込みに、さらに村人たちはざわめきだした。村長の額には冷や汗が滲んでいる。

「……本当の事を話てくれないか？」

「そ、それが……ワシらにも、よく……分からんのです……。正直、あの遺跡は何度も調査しようといたしました。皆は慣れない武器を持ち、ワシはモミアゲを整え……何度を遺跡に向かいました」

……モミアゲ整える必要、あるのか？

「しかし、近付けないのです」

「!?」

「遺跡に向かって歩いても……気が付けば村の門。我々は遺跡に近付けないのです」

「……?」

「ど、どういう事?近付けない?」

「俺たちは、中にまで入れたぞ!!ふつ～に」

「あい」

村長の言葉にナツたちは、それぞれが驚いた。

「こんな話、信じてもらえないでしょうから黙ってましたが……」

「本当なんだ!!遺跡には何度も行こうとした!!だが、たどり着いた村人は1人もいねぇんだ!」

村人は隠していた事を全て話した。どうやら、これ以上は本当に何も隠してないらしい。

「やはり……か」

その答えを聞いて、エルザは1人、納得した。

「わかったか？」

「あぁ。そう言うラグナも、分かっているのだろう？」

「まぁな」

エルザは俺の反応を見て、ふっと笑みを浮かべてから、鎧を身を纏った。

「ナツ、着いて来い――――――

――――これから月を破壊する」

「おおっ！！」

『え――――――っ！！！！！！』

興奮するナツの後ろではグレイたちが驚愕の声をあげる。

「月を……壊すって……さすがのエルザでも、それは無理……だよな」

「な、何をするつもりだろ……？」

「ドキドキするね」

「おう！ドッキドキだぜ！」

「いろんな意味でね……（汗）」

エルザが月を壊すと言い切った後、エルザはナツを連れて村の一番高い場所――櫓（やぐら）に登った。エルザが何をするつもりなのか分からない、グレイ、ルーシィ、ハッピー、リクを始めとする村の人々はた

だ上を眺めていた。

「ラグナはエルザが何をするつもりなのか分かってるんだよな？？」

「まぁな」

「じゃあ、エルザとナツは何をしようとしてるの？

「まぁ、見てろって。面白いものが見れるし、起こるからよ」

そうグレイたちに言って、俺は再び空に目を向けた。

「この鎧は？巨人の鎧〃。投擲力を上げる効果を持つ」

エルザは櫓の上で自ら纏う鎧について、ナツに説明する。

ジャキィィィン！！

「そして、この槍は闇を退けし？破邪の槍〃」

エルザの右手には長い槍が握らていた。

「それをぶん投げて月を壊すのか！！うおおおっ！！！すっげ！！！」

「「（イヤイヤ、無理だから）」」

その声が聞こえたグレイとルーシィは内心で突っ込みを入れた。

「しかし、それだけではあそこまでは届かんだろう。だから、お前の火力でブーストさせたい」

「？」

エルザの言っている意味がよく分かっていないナツ。それを見てエルザは、

「石突きを思いっきり殴るんだ。巨人の鎧の投擲力と、お前の火力を合わせて月を壊す」

「おし！！わかった！！！けど、それだったらラグナでもいいんじゃ？」

ナツはやっと理解できたのか、拳を握った。　が、俺を見てエルザに聞いた。

「いや。ラグナの力では槍が壊れてしまう」

『それには同意だ』

「みんなして酷いな」

確かの俺の魔法やブーストはかなりヤバいものばかりだけどさ。

「いくぞ！」

俺が落ち込んでいる中、エルザは腕を思い切り引いて投げる体勢をとった。

「ナツ！！！」

「おぉう！！！そらぁぁ！！！」

ドン！！！！

「届けェェぇぇぇぇぇっ！！！」

そして、エルザたちが放った槍は月に向かって飛んでいった。

ナツが殴って、エルザが投げた槍が空へ……あの紫色の月へと向かっていく。

俺以外の皆は微妙な表情をしている。

だが、

……ピキッ

「！？」

「え？」

「は？」

「あ、い」

「お、おお」

月にヒビが……

ピキピキピキピキッ……

そのヒビはドンドン広がっていく、

そして……

ピキッピキッ……パキィィィィン

月が、割れた。

そして、割れたその向こうに見えたのは……

「え！？」

「これは……」

「月！？……どうなってんだ！！！コレぁ！！」

明るく俺たちを照らす月の姿があった。

「やっぱりか」

粉々に砕けた破片がキラキラと月の光を反射して、俺たちに降り注ぐ。

その光景を見て、ルーシィは一つの仮説を立てたのか、言い始める。

「割れたのは月じゃない……空が、割れた？」

「この島は、邪気の膜で覆われていたんだ」

「膜？」

割れた空を見上げて、唖然としているみんなに俺は話した。櫓（やぐら）の上ではエルザがナツに俺と同じことを話している。

「そう、膜だ。まぁ簡単に言うと、月の雫（ムーンドリップ）によって発生した排気ガスだな。それが結晶化して空に膜をはってたんだよ。その膜のせいで、月があんな色に見えたって訳だ」

「へぇ～」

凄いなぁ、と俺の話を聞いてルーシィは感心した。

シュウウウウウ……

すると村人たちの身体が光だした。

「わぁあ、きれい」

どうやら村人たちに掛かっていた魔法が解けるようだ。

「邪気の膜は破壊され、この島は本来の姿を取り戻す」

そして村人たちを包む光はだんだんと治まっていき……

「あ……」

「あれ？」

何の変化もなかった。

「元に戻らねぇのか……？」

「そんな……」

グレイはその状況に焦り、ハッピーは涙目になる。

「いや、これで元通りなんだ」

すると、櫓（やぐら）からエルザとナツが降りてきて説明する。

「……」

「邪気の膜は、彼等の姿ではなく彼等の記憶を冒していたのだ」

「記憶？」

「そう……夜になると悪魔になってしまう……という間違った記憶だ」

「？」

「ま…ま……まさか……（ブルブル）」

「そういう事だ」

「彼等は元々悪魔だったのだ」

「！」

「な！」

「きゃぁぁぁぁぁぁああっ」

「ま……マジ？」

「う……うむ……。まだ、ちょいと混乱していますが……」

開いた口が塞がらない様子のグレイと、自分たちの正体を思い出した村人。

「彼等は人間に変身する能力を持っていた。その人間に変身している自分を本来の姿だと思い込んでしまったのだ。それが、月の雫による記憶障害」

「でも……それじゃあリオンたちは何で平気だったの？」

身体を震わせながらルーシィは聞く。

「それは簡単だよ。人間だからな。どうやら、この記憶障害は悪魔にだけ効果があるらしい。あの遺跡に村人だけが近づけないのも悪魔だからなんだ。聖なる光をたくわえたあの遺跡には、闇に生きる

者は近づけない」

ルーシィの疑問には、エルザの変わりに俺が答える。

「さすがだ……君たちにまかせてよかった」

そこへ1人の男が歩み寄る。

「魔導士さん、ありがとう」

片手を挙げて、悪魔の姿をした男は礼を言った。

「ボ……ボボ……」

なんと現れたのは死んだとされた村長の息子……ボボであった。

「え……えっ……えぇぇ！？！？！？」

村人はボボの墓とボボを交互に確認した。死んだと思っていた者が生きていたのだ、驚くのも当然だろう。

「幽霊！！！！」

「あああああっ！！！！」

「船乗りのオッサンか！？」

互いに抱き合うルーシィとハッピー、グレイも驚いている。

「ん？知り合い？」

「俺たちをここまで連れてきてくれたんだ！」

「あ、そう」

「胸を刺されたくれェじゃ、悪魔は死なねェだろうがよ。」

ガハハ、とボボは大きく口を開けて笑った。

「あ……あんた、船の上から消えたろ……」

どうやらグレイは未だに幽霊説を疑っているようだ。

シュッ

「！！！」

それを聞いてボボはグレイの前から一瞬で消え――――

「……あの時は、本当の事が言えなくてすまなかった」

「おおっ」

――――た、のではなく。ただ自らの羽で空に飛び上がり、あたかも消えてしまったように見せただけのようだ。

「オレは1人だけ記憶が戻っちまって、この島を離れてたんだ。自分たちを人間だと思い込んでる村のみんなが怖くて怖くて」

再びボボは笑った。

「……（ウルウル）」

ダキッ！

「ボボ～～～！！」

そんなボボを見て我慢が出来なくなった村長は、自らも羽を使って飛び上がった。

「やっと正気に戻ったな親父」

そして2人の親子は抱き合って、再会の喜びをかみしめる。

その様子を見て村人たちも、

「生きてた～！！」

「ボボが生きてたぞ～！！」

「やった～っ！！！」

「めでたいぞ～！！！」

と言いながら、村長の後を追いながら一斉に空へと飛び上がった。

「ふふ……悪魔の島……か」

天頂に光り輝く十五夜の月――――

「でもよ……みんなの顔見てっと……」

その白き光に照らされる姿は――――

「悪魔ってよりも天使だな」

――――天へと昇る天使の群れに見えた。

「今夜は宴じゃ～～！！悪魔の宴じゃ～～！！」

「おおおぉ！！！」

「なんか、すごい響きねソレ……（汗）」

「あい（汗）」

「うむ（汗）」

彼らと俺たちの夜はまだまだ続く……

～次の日～

「な……なんと！報酬は受け取れない……と？」

ガルナ島の一件が無事に解決し、その感謝の意味も込めた宴会が開

かれた次の日の朝。

俺たちがギルドに帰る際に、村長に今回は報酬を受け取らない事を告げた。

「はい、気持ちだけ受け取っていきます」

「ほが……しかし……」

食い下がる村長。感謝の気持ちを見える形で示したいのだろう。

「昨夜も話したが、今回の件はギルド側で正式に受理された依頼ではない。一部のバカ共が先走って遂行した仕事だ」

「ほがぁ……それでも我々が救われた事には変わりません。これはギルドへの報酬ではなく友人へのお礼という形で受け取ってくれませぬかの？」

村長はエルザの言葉を聞いても諦めずに、朗らかな笑顔で言った。

いい人だな……。

エルザは仕方ないという風に首を左右に振って、

「そう言われると拒みづらいな」

「７００万Ｊ！！！」

「おおお！！！」

「ナツ、鼻からも炎出せたんだな……」

お礼を受け取って貰えると分かり村人たちも盛り上がった。

「しかし、これを受け取ってしまうとギルドの理念に反する。追加報酬の鍵だけありがたく頂く事にしよう」

「「いらね～～っ！！」」

「いるいる！！」

「ナツ、口から炎出てるから……」

しかし、鍵だけ貰うと付け足され、村人たちの盛り上がりも少し下がり、ナツとグレイのテンションは急降下、星霊魔導士のルーシィだけが嬉しそうにしていた。

「では、せめてハルジオンまで送りますよ」

「いや……船は用意できてる」

「ああ。とびっきりのな」

「!?」

～砂浜～

「って、海賊船!?」

「まさか、強奪したの!?」

「イヤよ!!!こんなの乗りたくない!!」

俺とエルザが乗ってきた海賊船を見て、それぞれの反応をするナツたち。

すると、

「姉御～！兄貴～！出発はいつでもできまっせ！！」

「姉御サイコー！兄貴サイコー！」

海賊船の船長とその手下が俺とエルザに向かって手を振る。

「ルーシィ。乗るのが嫌なら泳いで帰るか？泳ぐなら付き合うぞ」

「無理！！」

そんなナツの誘いを即答で断ったルーシィ。

「まぁまぁ。中は結構、普通だから……とりあえず乗ろう」

俺の促しもあって、ナツたちは船に乗り込んだ。

そして全員が乗り込んだのを見計らって、船は出発する。

「みなさん！！！ありがとうございます！！！」

「ありがと～！！」

「また遊びに来いよ～」

「妖精の尻尾サイコー！！」

「蝶サイコーーー！！」

船に向かって村人たちが叫ぶ。一人だけ変なのが混じっていたけどな。

「みんな、元気でね～！！」

それに答えるようにしてルーシィも手を振る。

村人たちは船が見えなくなるまで叫び続けた。

第１９話　デリオラ編、終結（後書き）

ふぅ……これにてデリオラ編は終わりです。
次回は幽鬼（ファントムロード）の支配者編を書こうと思います！

第２０話　幽鬼の支配者（ファントムロード）（前書き）

７３８様・蟋蟀様・戦国最強様、技の募集に応えていただきありがとうございました！
まだまだ、募集中なのでよろしくお願いします！

第２０話　幽鬼の支配者（ファントムロード）

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「帰って来たぞー！」

「来たぞー！」

やっとのことでマグノリアの街に帰って来た俺たち。

あいかわらずナツとハッピーは元気いっぱいだな。

「そういえばそれは何の鍵なの？」

ハッピーはガルナ島で村長から貰った鍵のことをルーシィに聞いた。

「人馬宮のサジタリウスよ！」

「あ、なんかすごそう！」

「でしょでしょ！」

報酬は黄道十二門の鍵のみ。

それはルーシィの手へと渡ったのだった。

ルーシィは新しい黄道十二門の鍵をキラキラした目で見ている。ふふ、子供みたいだなルーシィ。

「さて、さっそくだがギルドに戻っておまえたちの処分を決定する」

エルザから言われたことに、ナツ達４人は肩を落とした。

ギルドの掟を破ったのだから当り前のことだがな。

「私は今回の件について概ね海容してもいいと思っている。しかし判断を下すのはマスターだ。私もラグナも弁護するつもりはない。それなりの罰は覚悟しておけ」

「まさかあれをやらされるんじゃ！？」

「ちょっと待て！あれだけはもう二度とやりたくねぇ！」

「あれって何ーー！？」

騒ぎ立て、頭を抱えるハッピーとグレイに戸惑うルーシィ。

「いいからギルドに行くぞ。フッフッフ。４人があれを受けるのか。ドンマイだな」

「だからあれって何なの！？！？」

ルーシィは３人がガタガタ震えているのを見て？あれ〃がなんなのかが気になってる。

そんな中、俺たちが街を歩いてると街の住民達が俺たちを見てひそひそ話している。

「…なんだ？ギルドの様子がおかしい……」

最初に気がづいたのはエルザだった。

「ああ。街の人たちも少し様子がおかしい」

俺も街の人たちの様子がおかしいことに疑問を持った。

俺たちはギルドの前に来てみると……

「ん？」

「…な、何？え？」

「これは……」

「…っ！」

「俺たちのギルドが！」

廃れた姿になった妖精の尻尾が壊されていた。

「いったい、誰が……」

エルザの言葉に全員黙り込んだ。

「…ファントム」

状況をのみ込むことができない俺たちの後ろから声がし、後ろを向いてみるとそこにはミラが立っていた。

「悔しいけどやられちゃったの……」

俺たちはミラに案内されたのはギルドの地下に来ている。

地下に来てみるとギルドの仲間達が浮かない表情をしている中、マスターはいつものように策を飲んでいる。

「よっ、おかえり！」

「…マスター」

「じっちゃん！酒なんか飲んでる場合じゃねぇだろ！」

「おーそうじゃった」

マカスターが気がついたように笑う。

「おまえたち！勝手にS級クエストになんか行きおってからにー！」

「え！？」

「はァ！？」

「罰じゃ！今から罰を与える！覚悟せい！」

「それどころじゃねーだろ！」

ナツ達が怒りを見せる中、マスターは手を伸ばしてナツ・グレイ・ハッピーの頭を叩き、ルーシィは

「きゃっ！」

「マスター！駄目でしょ！」

お尻を叩かれ、それを見ていたミラが怒って言った。

「マスター！今がどんな事態かわかっているんですか！」

「ギルドが壊されたんだぞ！」

「まあまあ、落ち着きなさいよ。騒ぐほどのことでもなかろうに」

酒を飲むマスターに俺が聞く。

「あれをやったのはファントムだろ？」

そう聞くとマスターは言う。

「ファントムだぁ？あんなバカタレどもにはこれが限界じゃ。誰もいねぇギルド狙って何がうれしいのやら」

「誰もいないギルド？」

「襲われたのは夜中らしいの」

「じゃあ、怪我人はでなかったの？」

「ええ、そうよ」

「ふいうちしかできんような奴らにめくじら立てることはねぇ、放っておけ」

笑い飛ばすマスターに、ナツはテーブルを力強く叩いた。

「納得いかねぇよ！俺はアイツら潰さなきゃ気がすまねぇ！」

「この話は終わりじゃ。上が直るまで仕事の受注はここでやるぞい」

「仕事なんかしてる場合じゃねぇよ！」

「ナツぅ！いいかげんにせんかぁ！」

怒りの収まらないナツはマスターを睨み付ける。

ナツや他の皆も納得していない表情を見せる。

「つーかちょっと待て、漏れそうじゃ」

そんな中、慌ててマスターはトイレに走る。

そのうしろ姿を見て、ナツはつぶやいた。

「なんで平気なんだよ…じっちゃん…」

「…ナツ、悔しいのはマスターも一緒なのよ。だけどギルド間の武力抗争は評議会で禁止されているの」

「先に手ェ出したのあっちじゃねーか！」

「そういう問題じゃないのよ」

「マスターのお考えがそうであるなら……しかたないな…」

エルザも納得はできていないが、マスターがこうしている以上、何もすることができない。

エルザだけでなくギルドメンバー全員が納得していないが、不満が顔に出ているな。

その日の夜。エルザ達はルーシィの家に泊まることになり、俺は街を見回っている。一人でだ。リクはエルザに預けてある。

そうしていると、

ピクッ

「この感じたことのない魔力は……もしかして……それにこの覚えのある3つの魔力は……レビィ達か！」

俺は急いでその魔力の反応がある場所へ急いだ。

魔力反応はマグノリア、南口公園からだった。そこの上空に着くとジェットとドロイが木に磔にされていた。レビィにも敵……鉄竜のガジルがいた。

ガジルがレビィに手を出そうとしたのを見た俺はガジルに魔法を放つ。

「サンダーボルト！」

シュドォォォォン！

「ギヒィアアアアアアア！？」

腕が鉄棒になっていたガジルに雷が落ちる。

「がっは！て、てめえは……」

「ラ、ラグナ！」

シュウゥゥゥ～～～と音が鳴るガジル。

俺はレビィを抱え、少し離れたところでレビィを降ろす。

「ラ、ラグナ…どうしてここに？」

「覚えのない魔力反応が引っかかってな。んで来てみれば……というわけだ」

「ちぃ！まさかてめえから来るとたぁな。破邪竜」

唇から出ている血を拭きとりながら言うガジル。

「煩いぞ鉄竜」

バチィィィィィ

俺は周りに雷の球体を出す。

「げぇ！？」

ガジルは汗を出す。まあ、そうだろうな。雷だし。

「ちぃ！置き土産にしようと思ったが、まあ、妖精の尻尾を2匹狩ったことだし、よしとするか。じゃあな！ギヒィ！」

「っ待て！」

「待たねえよバーカ！鉄竜槍・鬼薪！」

ズドドドド！

鉄の槍が俺の足元に当たり、土煙が舞う。

「風よ！」

風の魔法で土煙をどけるが、そこにはガジルはいなかった。

「くそっ！レビィ！」

俺は傷ついているレビィに治癒魔法をかける。

「あたしはいいから…ジェットとドロイを……2人ともあたしを庇って」

「バカを言うな！2人が身を挺して守ったんだ。先に2人を治療したら後で2人に俺が怒られるだろうが」

俺がそう言うとレビィは明るく笑う。

「アハハ。ラグナは優しいね。そういう……ところ…が……」

そう言いかけたレビィだったが、疲れていたのか寝てしまった。

「お休みレビィ。さて、次は磔にされている2人だな」

その後、俺によって3人に軽い治癒魔法をかけ、病院に連れていき、次の日の朝、ギルドメンバー全員が集まってから昨日のことを話した。

すると、

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃがな、…ガキの血を見て黙ってる親はいねぇんだよ…」

バキィ！

手に力を込めて自分の杖を砕くと、マスターは高らかに叫んだ。

「戦争じゃ！」

『オオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

この時、ギルドメンバーの怒りが頂点に達していた。マスターの宣言によって全員の堪忍袋の尾が切れた瞬間であった。

第２０話　幽鬼の支配者（ファントムロード）（後書き）

次回、

第２１話　戦争

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺たち、フェアリーテイルのメンバーはフィオーレ王国北東・オークの街内、魔導士ギルド『幽鬼の支配者』の前に来ている。中からは薄汚い声が聞こえてくる。

「だっはー！！！最高だせー！！！妖精の尻尾（ケツ）はボロボロだってよ」

「ガジルの奴、その上２人もやったらしいぜ」

「ヒュー！！！」

「そういやマスターの言ってた？奴ら〝って誰よ？」

「さぁ？」

「手は出すなとか言ってたな」

「どうでもいいさ。惨めな妖精どもに乾杯だ」

「今頃羽をすり合わせて震えてるぜ」

「あ！いけね。こんな時間だ」

「女かよ？」

「まぁまぁいい女だ。依頼人だけどな。脅したら報酬二倍にしてくれてよ」

「オレなら三倍までいけるよ」

「言ってろ、タコ」

「ははははは」

そんな声が聞こえ、余計に殺気立つ俺たち。

「ナツ……ゴー！」

「おうよ！」

炎を拳に纏い、ナツは扉を、

ドカーーーーーーン！

吹き飛ばした。

さぁ、跪け、屑共……！！

「妖精の尻尾（フェアリーテイル）じやあああっ！！！！！！」

「「「「「「「「「「オオォォォーーーー！！」」」」」」」」」」

俺たち、妖精の底力、見せてやんよ！

「誰でもいい！！！！かかって来いやぁ！！！！」

「ふふ。ナツ、張り切っているな？」

直ぐ様先陣に飛び込んでいったナツ。

「おい、あいつは確か……」

「破邪竜・剣聖・破壊神といくつも二つ名があるラグナ・ギースだ！あいつをやれば名が上がるぞ！！！」

「殺して名を挙げろぉ！！」

そういいながら武器を以って俺に突っ込んでくる屑共。

「ハッハッハ、バカな奴らだなファントムは……ギルドをあんなにしたのまでは俺でも許せた……けどな」

ゴォォォォォォォ！

俺の周りに魔力が渦のように渦巻く。

「仲間をあんな目に合わせた奴らを許せるほど俺は……心が広くねえんだよおおおおお！消え去れ！天体魔法・暗黒の楽園（アルテアリス）！！」

巨大化させた巨大な黒い球体をファントムのメンバーを消え去った。

「お、おい。まずいんじゃねえか！？」

「あ、あいつ、本気でやりやがった！？」

「ウザいんだよ……屑共がああああ！！！破邪龍の飛拳！！」

風邪の属性を付加させ、拳に纏った魔力を飛ばす。

ズドドドドド！

『ぎゃあああああああああ！』

「破邪竜の咆哮！！！」

ズゴオォォォォォォ！！

『ぶるぅあああああああああ！』

「え、遠距離で攻撃するんだ！喰らえええええ！」

ファントムの魔導士達が俺に向かって魔法を放つ。

「猪口才な！！破邪龍の爪断！！」

各指から魔力の爪を作り出し、俺に放たれた魔法を

ザシュシュシュシュ！

切り裂いていく。

「んな！？魔法を切り裂くだと！？」

「フリーズランサー！」

シュンシュンシュン！

今度は氷の槍を放つ。

『ぐあああああああああああ！！』

「オラオラオラオラ！！次の生け贄はどいつだああ！」

俺は完全に大暴れしている。

～ＳＩＤＥ：ラグナ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：エルザ～

『ぐあああああああああああ！！』

「オラオラオラオラ！！次の生け贄はどいつだああ！」

ふっ、ラグナの奴め、完全にキレているな。私たちギルドの中で一番仲間を思い、仲間が傷つくのを嫌うラグナのことだ。ギルドを壊され、レビィ達が傷つけられたことで完全にキレたらしいな。

他の皆はどうだ？

「パープル・ネット！…ワカバ！」

「あいよ！スモークラッシュ！」

マカオの炎で敵を捕らえて、ワカバのパイプの煙で敵を殴打した。
いい連携だ。

『ぐあああああ！』

「ガンズマジック、スパークショット！」

アルザックのガンズマジックで、敵を痺れさせているな。

『し、痺れるううう！？』

「！？」

「くたばりやがｒ「ダンッ！」アガッ！？」

ドサッ

「ナイスショット！ビスカ」

「爪が甘いよ、アル。ターゲット・ロックオン！…ホーミングシュート！」

ビスカの銃士ザ・ガンナーで、敵だけを狙い撃っているようだな。

「カードマジック……ライトニング・リバースタワー・ラバーズ、落雷の運命！」

カナのカードマジックで、周囲の敵に電撃を浴びせた。さすが、カナ！

「リングマジック、ツイスター！」

ロキのリングマジックで、竜巻を起こして敵を吹き飛ばしているな。

「ビクトマジック、野生の暴走！」

リーダスのビクトマジックで、自分の腹に猪の絵を描き、その絵が飛び出して敵にぶつけている。

「ウッドメイク……恥らう恋のダム！」

「意味解んねぇーー！？」

ラキのウッドメイクで、大量の木造が飛び出した。……ラキのネーミングセンスはホントに解らんな。ずっと、思っていたことだが。

「かぁーーー！」

マスターは得意の魔法のジャイアントを使い巨大化して手で叩き潰す。

「バ…バケモノ…！？」

ファントム一人がそう言うと

「貴様らはその、バケモノのガキに手ぇだしたんだ！人間の法律で、自分テメーを守れる等と思うなよ！！」

どんどん押していくフェアリーテイル。

「ジョゼーーー！！！！出てこんかぁ！！」

「はぁぁぁ！何処だ、ガジルとエレメント４は何処にいる！」

「ガジル！！ジョゼ！出て来い！落とし前をつけろやあああ！」

私は炎帝の鎧に換装し、炎でファントムの魔導士達を吹き飛ばす。

くっ！本当に数だけ多いな！

～ＳＩＤＥ：エルザ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：第三者～

「「「「これでも喰らいやがれーー！！」」」」

ファントムの魔導士達はフェアリーテイルに向かって魔法を放った。

だが、ラグナとナツが皆の前に立つ。

炎の魔法をナツが、それ以外の魔法をラグナが食う。

「「食ったら力が湧いて来た！」」

「何だこいつら！？」

「魔法を食ったぞ！？」

「こっちのサクラ色頭のやつはまさか！？」

「「ブッ飛べ！火竜・破邪竜の咆哮！！」」

ラグナとナツのダブル竜の咆哮で前方と周りにいた魔導士達を吹き飛ばす。

『ぎゃあああああああ！！！』

「アイスメイク・ランス！」

「ハアァッ！」

グレイが氷の槍を飛ばし、エルザは黒羽の鎧に換装し、敵を切り裂く。

「ウッドメイク……二人の恋はフォーエバー！」

「やっぱ意味解んねぇ！？」

「ガンズマジック、マッドショット！」

「換装……魔導散弾！ワイドシュート！」

アルザックとビスカのコンビネーションは抜群で敵を倒していき、ラキの攻撃は本当に意味がわからず、ツッコミをファントムの魔導

士達が入れる。

そんな戦闘をしている両ギルドメンバーを見下ろすガジルがいた。

「ギヒ……あれがティターニアのエルザ、それにフェアリーエンペラー・破邪竜のラグナか、ラクサスとミストガンは参戦せずか……舐めやがって。しかし、これほどまでにマスター・ジョゼの計画道りに事が進むとはな、せいぜい暴れまわれ……クズ共が！」

そんなガジルに声をかける者がいた。

「ガジル君。彼……ラグナ・ギースにだけは手を出すんじゃないぞ？」

「そうそう。あたし達４人がラグナを葬り去るんだからね☆」

「その通りだ。我ら４人とラグナ・ギースが戦闘した場合、１００％の勝率が出ている」

「クックック。マスター・ジョゼ様の恨みは俺たちが晴らしてやる。ククク！」

薄い影のような４人がそう、ガジルに言う。

「へいへい、わかってるっての。（相変わらずこいつらは薄気味悪いな。けど、事実、エレメント４よりも強いんだよな。……悔しいが俺以上だし。ま、最後は俺が勝つけどな）」

そう、心の中で思うガジルであった。

～ＳＩＤＥ：第三者　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「ぬぁあぁぁっ！！！！！漢、漢！！漢ォ！！！！漢なら……漢だぁあぁぁあっ！！！！！！！」

「接収（テイクオーバー）だ！！！！」

「あの大男腕に魔物を接収（テイクオーバー）させてやがる！！！！」

「そ……そんな魔法があんのかよ！！！！」

「エルフマン！！！！倒した魔物の力を腕に吸収していく……ビーストアームのエルフマンだ！！！！！」

次々とファントムの魔導士達を倒すフェアリーテイルの仲間達。

「エルザ、ラグナ！！！！ここはお前達に任せる」

「！」

「任せてくれ」

「ジョゼはおそらく最上階。ワシが息の根止めてくる」

「お気をつけて」

「マスター。あいつのことだから汚い手を使うかもしれない！背後には気をつけるんだぜ！」

「うむ。任せておれ」

そういってマスターは階段を登っていく。

「はァ――――――――！！！！」

ズドォォォォォォン！

「ぐおっ」

「いっ」

ガジルのやつ。自分のギルドの仲間ごとやりやがった！

「ナブ！！！ウォーレン！！！」

「何だ、アイツ……」

「来いよ！！！クズども鉄の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）ガジル様が相手だ――――――！！！」

ムカ。

「死にさらせえ！！」

ズドン！

「ギヒャ！？」

ガシャアァァァン！

「てめえ、あの時はよくも逃げ「ガジル――――――！！」ぐぽ？！」

ナ、ナツの野郎。俺の腹を踏み台にしながらガジルのことを殴りに突っ込みやがって！

「ガジルが吹っ飛ばされた！？」

「こんなトコ初めて見たぞ！？」

周りのファントムが騒ぐ、そこにナツが大声で叫んだ

「俺がフェアリーテイルのドラゴンスレイヤーだぁ！！」

「おいナツ、てめえ、何人を踏み台にしやがっｔ「ラグナ、こいつ寄こせ！」てお い！せめて謝りやがれ！！」

俺を無視してガジルと戦い始めやがった。

ゴォォゴゴゴ
ゴォォゴゴ
ゴォォゴゴゴ
ゴォォゴゴゴ
……

突然大きな揺れがギルドを襲う。

「っ何がだよ！？」

「これはマスター・マカロフの怒り」

「…巨人の逆鱗さ。誰にも止められねぇ」

ゴゴゴッと更に揺れは増す。周りも壁や天井も崩れだした。

「覚悟しろ！マスターがいる限り、私たちに敗けはない！」

……何だ？何かを忘れている……そんな気がする。マスター……ジョゼ……上の階……ルーシィ……あ、思い出した！？

「間に合うか！？破邪竜の……」

俺はマスターのいる階を見て、滅竜魔法を放とうとする。

それを見ていたガジルが焦り出すのが見えた。

「っ！？てめら！破邪竜を止めろ！」

『オオオオオオオオオ！』

そういって、俺に近づいてくるファントムの魔導士達。だが、

ガキィィィン！

ビシャアァァァァ！

ボコンッ！

「ラグナが何をしようとしているのかは知らないが……」

「ラグナの邪魔をするならまずは！」

「私たちを倒していってよね！」

「≪エルザ・カナ・リサーナ。サンキューな≫」

念話で3人に礼をいい、俺は放つ！

「波動！！！」

バシュウウウウウン！

咆哮の攻撃範囲を狭くする代わりに貫通と威力が上がった一点集中バージョンの咆哮を上の階に放つ。

ドカアアアアアン！

「か、かなしいいいいいいいいいいいい！！！」

ドシャアアアアアン！

何か声を発しながら上の階から誰かが落ちてきた。

「こいつは！」

「エレメント４の一人、大空のアリア！？何で奴が上に？」

そうしているとマスターが降りてきた。

「ラグナ！助かったぞ！お前の攻撃がなかったらあと一歩の所で奴の魔法を喰らっておったわ」

ふぅ、間に合ったようで安心したぜ。

「皆のもの！撤退じゃ！準備せい！」

マスターのいきなりの発言に何故！？とギルドの仲間達がする。

「こ奴らの目的は二つじゃ。一つはルーシィの捕獲じゃ」

「んな！？ちょっと待てよじっちゃん！ルーシィは今、マグノリアに……」

「安心せい。ラグナよ。お前、ここに来る前にルーシィに何かを渡しおったな？」

「ああ。渡したぜ？ギルドメンバー以外の魔力を探知したら自動防御するカードをな」

そういうと納得したと言った表情をするマスター。

「二つ目は……ラグナよ。お主じゃ」

「……ああ、3年前のことを根に持っているのか」

「そうじゃ。ここにはジョゼはいなかった。全員、撤退せい！」

まだ、納得しないギルドメンバー達。それに俺はキレる。

「てめえら！マスターの指示に従え！それとも俺が強制的に意識を狩り取って連れていくぞごらぁ！」

『りょ、了解しましたあああああああ！』

俺の怒鳴り声でせっせとギルドを出る皆。

こうして、俺たちは一旦ギルドへと戻るのであった。

第２２話　カルテッド（前書き）

オリジナルキャラが一気に４人出るよ。

第２２話　カルテッド

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

俺たちはファントムのギルドから撤退し、ギルドに戻ってきている。

ギルドの中にはルーシィが待っており、俺たちは事情を聞いた。

『えええええ！！！？？？』

ルーシィの正体を聞いたナツ達は声を上げて驚いている。

「なるほどな。俺たちが偽の本部を叩いている間にルーシィを攫うという計画だったわけか。いや～ルーシィに護身用にカードを渡しておいてよかったぜ」

「……うん」

元気のないルーシィ。他のギルドメンバーは傷の手当て・ファントムと再戦争する準備をしている。

「どーした？まだ不安か？」

「……」

もう一度ファントムと戦う為に準備を整えるみんなを見守りながら表情を曇らせるルーシィにグレイが声を掛ける。

「ううん……そういうのじゃないんだ……。なんか……ごめん…」

「まぁ金持ちのお嬢様は狙われる運命よ。そしてそれを守るのが漢」

「そういう事言うんじゃねえよ」

「エルフマン。漢なら空気を読め」

ガーーン！！

「お、漢……」

落ち込むエルフマン。

「でもオイラも驚いたな。ルーシィ何で隠してたの？」

ハッピーは不思議に思い聞いている。

「隠してた訳じゃないんだけど…家出中だからね…あまり話す気にもなれなくて……一年間も家出した娘に関心なかったくせに、急につれ戻そうとするんだもんね……パパがあたしをつれ戻す為にこんな事をしたんだ……最低だよ」

ルーシィが肩を落とした。

「でも元はといえば私が家出なんかしたからなんだよね。私が家に帰れば済む話だから……」

ルーシィの言葉にナツが首を傾げた。

「つーか、お嬢様ってのが似あわねえ響きだよな」

「！」

ナツの言葉にルーシィが反応する。

「その通りだな。俺たちが見てきたルーシィの本当の姿はお嬢様のような感じではなく、この汚い酒場で笑い……騒ぎながら冒険して、共に笑い・泣き・悲しみ、一緒に強くなっていく……それが俺たちの知るルーシィだ。ここにいたいって言ってたな。戻りたくもない場所に戻って何の意味がある？妖精の尻尾（フェアリーテイル）のルーシィだろ？ここがお前の帰る場所だ！」

俺がそういうと、ルーシィの目に涙が浮かんだ。

「泣くなよォ、らしくねぇ」

「そうだ！漢は涙に弱い！」

「……だって」

ルーシィが泣き出した。

「泣くなよルーシィ。お前は笑顔が似合うだろ？」

ダキッ！ナデナデ

泣いているルーシィを抱き寄せ、頭を撫でる。

「あっ……／／／」

顔を真っ赤にするルーシィ。

「でぇきぃてぇるぅW」

「へ、変なふうに言うな！！！／／／」

いつもの調子が戻るルーシィ。

俺たちは笑っていた。

次の瞬間ズウゥウンという地響きが聞こえる。

「外だっ！！」

アルザックが血相を変えた表情で皆に言い、皆は外へと駆け出す。

「な…何だあれは……」

「ギルドが歩いて……」

「ファントム……か！？」

すると目の前にはギルドが歩いてこっちに来ていた。六足歩行でギルドに近づいて来る物は建物。なびく旗はファントムのマーク。街がいなくファントムだ。

「想定外だ……こんな方法で攻めてくるとは……」

音を聞きつけてシャワールームから出て来たエルザも、ファントムのギルドを前に呆然としている。その間にもファントムのギルドからは大砲が出てきた。

「あれってまさか……」

「魔導集束砲だ！！！」

「ギルドをぶっ飛ばすつもりかー！！！」

「っ…まずい！全員伏せろぉぉ！！」

エルザが巻いていたタオルを落とし、換装しながら皆の前に飛び出す。

「エルザァ！！」

「ギルドは…やらせん…！！」

エルザが換装したのは超防御力を持つ金剛の鎧。だが、いくらなんでも無謀すぎるだろ！？

「金剛の鎧！！！」

「まさか受けとめるつもりじゃ……」

「いくら超防御力を誇るその鎧でも……」

「よせ！！！エルザ！！！死んじまうぞ！！！」

くっ！バカエルザ！

俺は瞬動でエルザの前に立つ。

「なっ、ラグナ！？退くんだ！」

「アホ抜かせ！ジュピターを金剛の鎧で防いでもダメージがあるだろうが！俺に任せろ」

「っだが！」

「だがも何もない！元々、ファントムがギルドを襲撃した理由は原因は俺にもある。……俺に任せろ」

俺はエルザを見る。じっと見る。

エルザは納得したのか金剛の鎧から普段の鎧姿に戻る。

「……では、任せたぞ」

「ああ」

そういい、エルザは下がる。

さて、ジュピターを止める魔法と言えば……滅竜魔法で吹き飛ばすか。

「破邪竜の……」

ジュピターが放たれた。

「波動ォオオオオオオオオオオオオ！！！」

シュゴオォォォォォォン！

全力全開の破邪竜の波動を放った。

ジュピターと破邪竜の波動がぶつかり合い、水を蒸発させながら相殺していった。

『ウオォォォォォォォォォォ！！！』

仲間たちからは喜びの歓声が聞こえる。

≪ルーシィ・ハートフィリアの身柄とラグナ・ギースの首を差し出せええ！！！≫

『……』

喜びが一気に萎えるようなジョゼの声が聞こえてきた。

ナツ達は、

「なあ、あいつバカじゃねえか？」

「ああ。ジュピターも効かず、じいさん・ラグナ・エルザは健在。なのに何であんなに強気なんだ？」

「漢たるもの、あんな漢にはなりたくないぜ」

「だな、アハハハハハハ！」

ナツ達が笑い始めると、ジョゼの放送が入る。

≪ウザいんだよ妖精のガキども！こちらにはエレメント４とガジル君以外にも戦力があるのですよ。ラグナ・ギース！貴様をこの世から抹殺するために私自らが探し集めた最強の魔導士……カルテッドをな！≫

『カルテッド？』

不思議がるナツ達。

「４人組みということだ」

俺が簡単に言う。

≪この４人はエレメント４、ガジル君をも超える強さを持つ。私と互角ともいっていいでしょう。紹介しましょう！カルテッドを！≫

ジョゼがそういうと上空に立体映像で４人の魔導士が映る。

≪火焔連鎖（バーニングフラワー）……ライド・ヴァンダーグ≫

≪よろしくな、妖精の屑共！≫

≪氷雪抱擁（ブラッディスリープ）……ミリア・マンケージ≫

≪よろしくお願いね？妖精の坊やたち≫

≪殺戮葬列（ジェノサイドパレード）……ザック・シックザール≫

≪貴様は我らには勝てん。我らの勝率１００％≫

≪最後に、カルテッドのリーダー、結晶皇帝（クリスタルカイザー）……ガイアス・ジュラース≫

≪クックック！よろしくなぁ？ククカカカ！≫

現れた４人はかなりの魔力を宿しているようだな。特に最後に出てきたガイアス・ジュラースは。

≪ハハハハハハ！どうだ！ラグナ・ギース！私から聖十の称号を奪った貴様を私は許さん！貴様とカルテッドの戦う舞台は……ここだ

ぁ！≫

ジョゼが手をかざすと海の中から巨大なコロシアムが現れた。

一体どうやって出したんだ？

≪さあ、カルテッドと戦え。もし、カルテッドに勝てたら私がお相手をしましょう。マカロフ！聞こえるな！もし、貴様が来れば問答無用でギルドを破壊するぞ！アーハッハッハ！まあ、そういいながらも特大のジュピターを喰らわせてやるがな！装填までの１５分！恐怖の中で足掻け！≫

そういうジョゼ。すると、ファントムのギルドから黒い兵の幽兵（シェイド）が出て来た。

≪地獄を見ろ、妖精の尻尾！貴様らに残された選択肢は二つ！我が兵に滅ぼされるか、ジュピターで消し飛ぶかだ！≫

「兵だと？！馬鹿なッ！ジュピターを撃つんじゃねえのか？」

「脅しさ。撃つはずねぇ！」

「いや、撃つよ」

その言葉にギルドを向いていた視線がカナに向けられた。

「！」

「あれは幽兵、ジョゼの魔法だよ」

カナの話を聞いたナツが立ち上がった。

「オレがぶっ壊してくる！！！」

「ナツ、」

カナの呟きに応えたのはナツ。１５分というタイムリミットにやってやると言った彼にカナはコクッと頷く。

「ハッピー！！！」

「あいさー！！！」

ハッピーがナツの服を掴んでファントムに向かって飛び出した。

「エルフマン！！！オレたちも乗り込むぞ！！！」

「おっしゃ――っ！！！」

ナツとハッピーの後を追いかけるように走り出したグレイとエルフマン。

さて、俺も行くか。

「俺も行ってくる。エルザ。お前もファントムのエレメント4を倒しに行ってくれ。その間に俺がカルテッドを潰す」

「……わかった。だが、無理はするなよ」

エルザもグレイとエルフマンの後を追ってファントムへ。

俺もファントムの隣に現れたコロシアムへ向かっていった。

カルテッドを倒すために。

第２３話　破邪竜の怒り（前書き）

今回、ラグナＳＩＤＥはないです。
次回はありますよ。

第２３話　破邪竜の怒り

～ＳＩＤＥ：第三者～

シュタ！

ラグナはカルテッドとジョゼに指定されたコロシアムに入り込んだ。
コロシアムの中心にはカルテッドが待っていた。

「遅かったわね破邪竜」

「全くだ。俺たちを待たせやがって」

「無駄な戦いであること、これ事実」

「ふん、さっさと殺るぞ」

「（なんともまあ、個性豊かなかな髪型をしているな男連中は。ライド・ヴァンダーグってやつは真っ赤な赤髪が花型のようになっているし、ミリア・マンケージは青と銀色で……普通か。ザック・シックザールは金髪でスーパーサイヤ人みたいに逆立っているし、ガイアス・ジュラースは紫色で蟹のような髪型だし）」

カルテッド達は一見変な奴らに見えるが、かなり強いことはラグナには分かっている。ラグナは換装でテン・コマンドメンツを出し、構える。

「ククク！貴様はここに来た時点で敗北は決まっている！行くぞ！クリスタルマジック、翠晶壁八の陣！」

ガイアスが両手を地面につけると共にコロシアムの舞台全部が結晶に囲まれた。

「（これは……ＮＡＲＵＴＯの紅蓮が使っていたのと同じか？）」

そう、ラグナが思うのは無理がない。瓜二つなのだから。

「さあ、この結晶の中ではお前は巧く戦えないだろうクカカカカ！！ライド！」

「おうよ！フレイムランス！！！ゴー！」

ライドの周りに炎の槍がいくつも現れ、ラグナに向かってくる。が、

ヒョイ

「はっ！こんなに簡単に避けられるぜ？」

「ククク、そいつはどうかな？」

魔法を避けられたはずなのに笑うライドに、疑問を持つラグナ。

「（……こいつ、何を狙っているんだ？）」

そう、ラグナが思っているその最中に！

グサッ！

「があっ！？な……なんだ？」

ラグナの身体を何かが貫いた。ラグナは視線を後ろに向けるとそこには……ライドが先ほど放ったフレイムランスがあった。

「どういう……ことだ。確かに避けたはず」

戸惑うラグナは、はっと後ろの結晶を見る。それを見たラグナはまさか……と呟く。

それが聞こえていたガイアスは言う。

「クカカカカ、気づいたようだな。そう、この翠晶壁八の陣は敵・味方をこの中に閉じ込めてしまうが、俺が仲間と認識する人物が放った魔法を……反射することができる」

「何だと？（やはり、そういうことか。やつが何も考えず、自分達ごと結晶の中に入れるはずがないからな）」

ラグナは痛みを感じながらもフレイムランスを引っこ抜く。

「だが、カラクリがわかればこちらのものだ！シルファリオン！」

ラグナは鉄の剣・アイゼンメテオールを音速の剣・シルファリオンに変え、結晶を作ったガイアスに斬りかかる。

だが、その行く手を阻んだのはミリア。

「させませんよ。ミラーマジック……無限幻魔境」

ミリアの前に鏡が現れ、そこにはラグナの姿が映っており、そのままラグナは鏡を切り裂く。

しかし、

ザシュシュシュ！

「がああああ！な、何だこれは！」

ラグナは突如、傷を負い、血が吹き出る自分を見る。

「ウフフフ、私の魔法……ミラーマジック、無限幻魔境は相手が攻撃してきたとき、その姿を鏡にうつすことでその技の威力を相手に返す。鏡を壊したので、その時の剣の威力がそのままあなたに帰ったのよ」

ウフフフ……そう笑うミリアは大人の余裕を見せている。

「くっ……なるほど、氷雪抱擁（ブラッディスリープ）……氷は姿を映すことができるから

鏡もその一つと言うわけか」

「その通りですよ」

そういう、ミリアは下がり、ザックとガイアスが前に出る。

「行くぞザック」

「了解だリーダー」

「「合体魔法（ユニゾンレイド）！不協和音！」」

ガイアスとザックの魔力が一つになると、ラグナの周りに

ゴゴゴゴゴゴ……ガシャン！

結晶でできた柱が5本現れ、その柱が音波を発する。

ギギギギギギ！！！

耳障りな音がラグナを包む。

「グアアアアアアアアア！！み、耳があああ?!頭の中がかき回される！?」

膝をつくラグナを見下ろすガイアスとザック。２人は自分の魔法を説明する。

「俺の魔法は先ほども言ったがクリスタルマジックだ。今使ったのは翠晶六角柱という魔法の応用だ。そして」

「私が使う魔法はソングマジック。音を操る魔法です。小さな音から大きな音、超音波なども出すことができます」

「俺のクリスタルマジックにザックの魔法を合体させた魔法さ。いくら魔力が高く、強い魔導士もこの技は防げまい。何しろ音が頭の中をかき回し、魔法を使う余裕もないから……な！」

ドカン！

「ごほっ！」

「ハッハッハ！いいサンドバックだなこいつは！おら！ヘル・プロミネンス！」

ライドは巨大な炎の塊をラグナに向けて、投げる。

「く、そ、が……」

ラグナはそれを避けるが、

シャキィィィン！

炎の塊は翠晶壁八の陣に当たり、ラグナに跳ね返ってくる。

「同じ手に……二度も引っかかるか！」

ヒョイ！

ラグナは羽勝ってきたのも避ける。だが、

「ウフフフフ、私の存在をお忘れなく。ミラーマジック、リフレクトウォール」

ドカアァァァァン！

ラグナを含む範囲に鏡の壁が現れ、ラグナの行動範囲を縮めた。

「なっ！？」

いきなり目の前に鏡の壁が現れたことに驚いたラグナは動きを止めてしまい、後ろからは……炎の塊が。

「しまっ……！」

ドカアァァァァン！

爆炎がラグナを包む。音波攻撃で炎を食う暇もなく……喰らってしまった。

そんなラグナにさらに追い打ちをかけるカルテッド。

「フレアメイク……ヴォルカニックハンマー！」

「ソングマジック……ハウリングボイズ！」

「クリスタルマジック……破晶降龍！」

炎の鎚が、超音波が、結晶の龍がリフレクトウォール内にいるラグナに降り注がれる。

ドカアアアアアアアアアンンン！！！！！！

ガシャアアアアアアアアアンンン！！！！！！

大爆発と共にリフレクトウォールが割れる音が響き渡った。

土煙が舞い、上空から

グサッ！

ラグナの持っていたテン・コマンドメンツが地面に刺さる。

ドサッ！

その後に続き、ラグナが落ちてきた。

『クカカカカカカカカカカ！！！！！』

その姿を見たカルテッド達は狂ったかのように笑い始めた。

～ファントムのギルド内～

ラグナの様子はエルザ・グレイ・エルフマンと戦うジョゼにも届いていた。

「ほほぉ？これはこれは……」

戦いの手を止め、いい笑顔になるジョゼを不思議に思うエルザ達。

「何が楽しいのだ？」

エルザは皆を代表してジョゼに問う。

それをニヤリとしながら空中にジョゼ達、ファントムのギルド内で戦うナツ・ルーシィ、外で戦うカナ・リサーナ達、フェアリーテイルのギルド内にいるマカロフに見せる。

エルザ達は驚いた。そこにはボロボロにされ、動かないラグナの姿が映っていたのだから。

『ラ、ラグナアアアアアアアア！！！』

ギルドメンバーはこれでもかと言わんばかりに大声でラグナの名を言う。

「う、嘘……ラグナが」

ルーシィはその映像を見て涙を流し、

「そ、そんな……」

「う、ウソでしょ……」

カナとリサーナは持っていた武器を手放し、

「そ、そんな……」

「バカな！」

ミラとエルザは信じられないものを見ているかのような表情をする。

「クハハハハハハ！！！所詮、ただの餓鬼がカルテッドに勝てるはずもない。この私から聖十の称号を剥奪させた罪、償うがいい！！！アーハッハッハッハ！幽兵（シェイド）達よ！フェアリーテイルのギルドを破壊せよ！！」

『なっ！？』

ジョゼの言葉に驚くエルザ達。

「ジョゼ！貴様、ワシが出なければギルドを攻撃せんと言っておったであろう！！」

マカロフはギルドから出てジョゼに魔法を使い、語りかける。

そんなマカロフをジョゼは、

「はぁ？何で私が貴様のような爺に言ったことを守らねばならん」

愉快そうにマカロフに言う。

そして、

ドシャアアァァァァァァン！

マカロフが怒りの表情を露わにしている間に幽兵（シェイド）達が合体し、大きな鎌となりギルドを破壊した。

その光景に時が止まったかのように動かなくなるエルザ達。

見るに堪えない姿になってしまったギルドを見て泣くもの・悲しむ

もの・怒りに満ちるもの……それぞれが同じ気持ちになっている……その時！

【グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンン！！！！】

『！？』

コロシアムの方から大きな雄たけびが聞こえてきた。エルザ達はまさか……と思いながらジョゼが開いた映像を見る。

そこには……髪が漆黒となり、両手・両足・目元に龍の鱗が生え……黒い魔力を纏うラグナの姿があった。

この時、この場にいる全員がこう思った。

『ファントム（私）達は触れてはいけないものに触れてしまった。破邪竜の怒りという名の力に』

【ギャオオォォォォォォォォォォォォン！！！】

～戻ってコロシアム～

龍の雄たけびを上げるラグナ。その姿を見たカルテッド達は汗と震えに襲われていた。

「お、俺たちはこんな……こんな化け物に喧嘩を売っていたのか（ガタガタブルブル）」

「な、なんというむ、無謀なこ、ことを……（ガクガクブルブル）」

「わ、我々の勝率は、ゼ、ゼゼゼ、０％……（ガクガクブルブル）」

「こ、この俺が……きょ、恐怖を抱くだと!?（ガタガタブルブル）」

一歩、また一歩と下がるカルテッド。

そんな４人にラグナが声をかける。

【よくも……俺たちのギルドを……俺たちの家を……許さんぞ貴様らあああああ！！！】

ゾクッ！

４人は悟った。イケない。ここから離脱しなければと。

「インフェルノドライヴ！！！」

「ミラーブラスト！！！」

「バイオレンスヴォイズレンション！！！」

「破晶降龍！！」

４人は己の出すことのできる最大威力の魔法を放った。

しかし、その魔法もラグナの前に消えあることとなる。

【破邪竜の雷槍！！破邪竜の波動！！！合体滅竜魔法！破邪竜の雷旋波動！！】

ラグナの手から出された黒雷の槍がラグナの口の中に吸い込まれ、それを波動と共に吐きだした。

カルテッドの魔法を打ち消し、カルテッドを包み込む。

『バ、バカナアアアアアアアアアアアア！』

ドカアアアアアアアアアンンン！！！！！

カルテッドの４人は吹き飛び、壁に黒焦げになっていた。生きているのが不思議だと思うぐらい。

そして、術者であるガイアスが気を失ったことで翠晶壁八の陣が解除され、コロシアムを囲っていた結晶は消え去った。

ラグナはそのまま、その場から消える。

～ファントムギルド内～

シュタ！

「なに！？貴様、どうやってここに！先ほどまでコロシアムにいたはず！」

コロシアムから消えたラグナは一瞬でジョゼのいるところに転移していた。

「ラ、ラグナ？」

エルザがラグナに近づく。

「……ふっ」

エルザの姿を見て、ラグナは安心したのかいつも表情に戻る。

「心配掛けたな皆」

「全くだ……バカ者」

エルザは右眼から涙が流れる。ミラ・グレイ・エルフマンも涙を流している。

「ここからは……俺の仕事だ。3人はここから離れるか、俺の魔法で安全な障壁を作るか……選んでくれ」

ラグナ自身からすれば、ここから離れて欲しいというのが本音だ。しかし、自分のことを心配していたエルザ達がそんな簡単にここから離れるとは思わないからそういったのである。

『ここにいる！』

4人はそういったので、ラグナは4人に向けて片手を向け、

「プリズムロック」

水晶のような多面体が4人の周りに現れ、包み込む。

「それで安心だ。俺の魔法だけでしか破壊できない防御魔法だ。俺の戦いを見ててくれ」

そういい、ラグナはジョゼを睨む。

「貴様を狩らせてもらうぞジョゼ」

「やってみろ……糞餓鬼！！」

2人の魔力が上昇し、戦いが始まったのであった。

第２３話　破邪竜の怒り（後書き）

はい、最初は苦戦し、ボロボロにされたラグナでしたが、ギルドが破壊されたことでキレ、ドラゴンフォース状態になりましたｗ

次回、ジョゼとの戦い……聖十ＶＳ元聖十の戦いです。お楽しみに～

第２４話　聖十大魔道の称号を持つ者と持たざる者　ラグナＶＳジョゼ（前書き

ふう、今回でファントム編が終わりですな。

第２４話　聖十大魔道の称号を持つ者と持たざる者　ラグナＶＳジョゼ

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

「……」

「……」

俺とジョゼは今、向い合いながら互いに魔力を高めている。俺はララバイの出来事から力を押えずにいた。故に今の俺の魔力は最大状態。

ジョゼも負けまいと魔力放出しているが俺の足元にも及ばない。

「行くぞ糞餓鬼！はぁ！」

ジョゼの腕から紫色の俺に飛ばすが、

「効かねえよ」

バシュ！

手で薙ぎ払った。

「なっ！？くっ！ならば、デッドウェイブ！」

ジョゼから怨念のエネルギー体が発射され、俺に迫る。

だがな……俺の怒りは……破邪竜の力を最大限に発揮するんだ！お前程度には……負けん！

「破邪竜の王拳！」

俺は全属性を付加させた鉄拳でジョゼの魔法ごとジョゼを吹き飛ばした。

ドゴン！

「ぐるあああああああああ！」

ドゴォォォォォン！

吹き飛んで行くジョゼは壁に激突する。

「す、すげえ」

「俺たちが束になっても傷をつけられなかったジョゼを」

「あんなにも簡単に」

「っ、ラグナ！」

後ろでエルザ達が俺を見て、驚き、そして笑っている。

ドカアァァァン！

「ふ、ふざけるなよ……糞餓鬼がああああああああああ！！！」

頭から血を流すジョゼが黒い目になりながら俺を睨む。

「これでも喰らえ！！」

ジョゼの手から数十の紫色のエネルギーが放出され、俺に迫る。

「あまいな。破邪龍の爪断」

魔力で作った爪でそれらをすべて切り裂く。

「なっ！く、くそがあああああ！」

ズドドドドドド！

自棄になったジョゼは今度は魔力弾をこれでもかと言わんばかりに出しまくる。弾幕は火力だぁってか？

「クハハハハ！シネ！フェアリーテイルノガキガアアア！」

「悪いな。俺は死ねないんだよ。愛する者の眼にの前で。愛する者を残してなんてな」

俺はエルザとミラに視線を送る。

2人は顔を真っ赤にしながら俺に言ってきた。

「「ラ、ラグナ！頑張れ！！／／／」」

「ふっ！仰せのままに」

俺は再びジョゼに視線を戻し、目の前に広がる魔力弾を見て、言う。

「本当の弾幕ってのはな……こういうことを言うんだよ！破邪竜の飛拳！！」

ズバババババババババ！

拳に纏った魔力を飛ばしまくる。風属性を付加させることで速度を上げ、連射性がさらに上がる。

俺の拳から放たれた魔力は次々にジョゼの魔力弾を破壊していく。

あらかたの魔力弾を片付けると、俺は放つ。

「破邪竜の炎砲！！」

両手・口から黒い炎の巨大な塊を作り出し、ジョゼ目掛けて投げる！

ゴオォォォォォ……ドカァァァァァンン！

「グアアアアアアアアア！」

黒き豪炎に焼かれるジョゼは汚い悲鳴を上げながらも、立っていた。

「コノワタシヲ……ナメルナアアアアア！」

しつこいジョゼに嫌気がさしてきた俺はあの魔法を使うことにした。

「フェアリーテイルの審判のしきたりにより貴様に三つ数えるまでの猶予を与える……跪け」

「ナンダト？」

ゴオォォォォォォォ！

俺は魔力を最大放出する。これでジョゼを威圧させる。

「一つ」

「何を言う、私に跪けだと?王国一のギルドが跪くはずがないだろ！」

ダメか。こいつはプライドが高い上、俺に恨みを持っているからな。

「二つ」

俺は手に平を向い合せると両手の中心に光の玉を形成させる。

「あ、あれはまさか!?ラグナ!お前、その魔法を使えるのか!?」

「エルザ、ラグナが何の魔法をやろうとしているのか分かるのか?」

「あ、ああ。あの魔法を使えるとは……さすがだな。これを使えば間違いなくラグナの勝利だ」

「王国一のギルドが貴様に屈するだと、冗談じゃない」

ジョゼは手に怨念のエネルギーをためていく。

「三つ」

「跪くのはお前だ！消えろフェアリーテイル共に！」

怨念のエネルギーが俺に襲い掛かる。

「そこまでだ」

俺は両手の中心に作っていた光の球を両手で潰し手を合わせると、
俺に向かったエネルギーがボロボロに崩れ去っていく。

「なっ！？！？」

「妖精の法律（フェアリーロウ）発動！！」

俺を中心に眩い光が発生する。

「何だ？この光！？」

「フェアリーロウだ！」

「フェアリー……ロウ？」

「聖なる光で闇を討つ。術者が敵と認識した者だけを討つ。もはや、伝説の一つに数えられる…超魔法だ！マスター以外で使える者が居るとはな」

驚くグレイにエルザが説明しているようだな。まあ、いいか。

妖精の法律（フェアリーロウ）の光の波動は外にいる幽兵（ジェイド）を消滅させた。そして、ジョゼは、一気に老け込んだように、黒かった髪が白くなり目茶目茶怯えていた。

「（ガタガタブルブルガタガタブルブル）」

「二度とフェアリーテイルに近づくな！まあ、ここまでハデにやらかしたんだ。評議員も黙っているはずがないけどな。これからはひとまずいお前自身を心配する事だ」

そういい、俺はジョゼから視線を外し、エルザ達を見る。

皆笑顔で出迎えてくれた。

「ラグナ！」

エルザが抱きついてきた。おお、今の鎧は黒羽の鎧だから胸の感触がダイレクトに伝わってくるな。

「ラグナ。よくやってくれたのぉ」

そこへ、マスターが来た。

「マスター。後のことは……」

「ああ。ワシに任せい」

ああ、その言葉が聞けてよか……た。

「ラ、ラグナ！？」

俺はフラフラの状態なのでエルザが支えてくれた。

「あ、あははは……カルテッドとの戦いで血を流し過ぎたようだ。す、こし、寝る」

エルザにそういい、俺の意識は途絶えた。

第２４話　聖十大魔道の称号を持つ者と持たざる者　ラグナＶＳジョゼ（後書き）

次回！戦争後の話です。

第２５話　抗争後

～ＳＩＤＥ：ラグナ～

やあーみんなーラグナだぞ～。えっ？なんで元気がないかって～？それはな……血の出し過ぎでエルザの胸の中で寝ていたらいきなり頭を殴られて、目を覚ましたら評議会の軍隊、ルーンナイトがいて、嫌な表情をするグレイや逃亡を図ろうとするナツ、泣きだしているマスターなどが眼に入ったからだ。

はっきり言って調子が悪いから寝ていたのに強制的に起こされたせいでどうも調子がな。んで、軍の駐屯地に連行されてからも毎日取り調べを受けて一週間経った今、やっと落ちついてきたところだんだよ。

妖精の尻尾に対する処分は評議会の後、後日下されることになっている。でも、予想では俺達に重い処分が下ることはないだろうっていう事になってるから安心している

そして、今は壊れたギルド修復の真っ最中である。

「うおらぁぁ――――――！！……がっ！？」

……ナツがまた無理をして角材を十本程持って行こうとしたら、バランスを崩して埋もれちゃったよ。

「一度にそんなに持つからだ。バ～カ」

「んだコラーー！」

「やんのかコラ！」

……五月蠅い。

ベチイィィィィン！

「「ぶべらぁぁぁ！？」」

影の魔法で拳を作り、２人の頭を殴る。

「何すんだよラグナ！」

「そうだぞ！ナツならともかく何で俺まで！？」

「……？あ？あ？」

ただでさえ、疲れがたまっているってのにこの2人の喧嘩なんて見ていられるか。

「「な、何でもないです。はい！（こ、こええ！？）」」

2人は顔を真っ青にし、木材を運ぶ。俺は腕がまだ全快じゃないので影の魔法で運んでいる。

やれやれ……。……ん？何やら視線が。

クイ

俺は視線のする方を見るとそこには、

「！？（ドキン／／／）」

ジュビアがいた。木材の影に隠れて。

「（あれ？何で俺を見てんだ？ジュビアってグレイに惚れていたよな？……待てよ？少し前にクエストで遭遇した時に俺、ジュビアの雨のこと悪く言わなかった……まさかとは思うが俺に惚れたってことないよな？全然話したことないのに）」

ジィ――――――

ジュビアに視線を送る。

「／／／／／／（ラ、ラグナ様がジュビアを見ている。は、恥ずかしい／／／／）」

……ジュビアが顔を押えながらいやんいやんをしている。確定だな。でも……理由が見当たらないな。

バシャ！

「うぉ！？」

俺が考えことをしていたら俺の隣に大量の水が現れ、水が消えるとそこには、

「お弁当箱？」

……そういや、アニメでもこんなシーンがあったな。

「んあーぁ、腹減ったー」

「あい！」

そこへ、一段落終えたナツ・ハッピー・グレイ・エルザ・リクが俺に近づいてくる。

「ん？ラグナ。どうしたんだ、その弁当は？」

エルザが俺の持つ弁当に気づく。

「ああ。さっき大量の水が現れたかと思えば、これが俺の隣に置いてあった」

「……何だと？（何だ？この新しいフラグが立っているという電波をキャッチしたぞ？）ラグナ。その弁当、開けてみろ」

な、何やらエルザから圧力が、

「あ、ああ」

動揺しながら俺は弁当箱を開けるとそこには……

「お？これはキャラ弁か」

弁当箱を開けるとご飯やおかずでキャラを作ってあった。俺とジュビアか？にしてもジュビアって器用だな。

俺が感心していると、

グサッ！

「「って、ええ！？エルザ！？それ、ラグナが貰った弁当じゃねえか！？」」

「あ、あい！？」

「はうあ！？」

「んな！？」

俺の目の前で弁当箱の中で手と手をつないでいた俺とジュビアの手の部分をエルザがフォークで食べた。

「（もぐもぐもぐ……ゴックン）おお、これは美味しい。誰が作ったか知らないがうまいな（誰だ？！この弁当のキャラの女は！！）」

……外見、笑顔だけど……内心では起こっているなエルザ。

俺は嫌な気がしていた。が、そこへ爆弾を落とすものがいた。

「ん？そういや、この弁当のキャラ……ファントムの雨女じゃねえか」

ドカァァァン！

……グ、グレイのバカぁあああああああああああ！何爆弾を投下しちゃってんの？！

ガシッ！

「ぐおっ！？」

あ、グレイの首をエルザが掴んだ。い、今のうちに逃げた方がいい気が……ゆっくり……と。

俺はゆっくりエルザの傍から離れようとするが、

ガシッ！

「ぐえっ！」

襟を掴まれ、逃げ出すこと不可能になってしまった。

「グレイ。その雨女のことを教えろ」

「あ、ああ（こ、こええ）」

そして、グレイが話を始めた。自分がファントムのギルド内で水のエレメントのジュビアと戦ったことを。ジュビアが俺に会いたがっ

ていたこと。ルーシィーのために戦っているなどｅｃｔ。

「……」

グレイの話を聞いたエルザが俺を見る。

「……後でラグナ、お前の家に行くからな。ミラとカナを連れて」

ゾクッ

「（あ、あははは。俺、死ぬかも……）」

そんな時だ。

「――ラグナ、ナツ、グレイ、エルザ」

「「「ん？」」」

俺たちは声のした方を見てみると、そこにはロキがいた。

「これ、ルーシィに渡しておいてくれないか？彼女の鍵だ。いつの間にか失くしていたって聞いてね」

ロキの手には、ルーシィが星霊を呼び出すために使う鍵があった。

「お前、しばらく見ねぇと思ってたら…」

「ずっとこれ探してたのか？」

「大丈夫ー？凄く顔色悪いよ？」

「ちゃんとご飯食べているの？顔色が悪すぎるよ？」

ハッピーとリクの言う通りロキの顔色はかなり悪く、真っ青だ。

「ありがとう、大丈夫だ…。フェミニストはつらいね…」

「……ロキ≪レオ≫。あまり無理はするなよ」

「あ、ああ。≪これも僕の運命さ。気にすることないよラグナ≫」

ロキの本当の名だけ、念話でいう。俺はロキの正体を初めから知っているからな。偶に心配になる。

「ルーシィ来てないみたいだよー怪我が痛くて動けないのかも…」

「様子見に行ってやっか。ロキも来いよ」

ナツの誘いにロキは困ったように笑いながら断った。

「僕が星霊魔道士を苦手にしてるのを知ってるだろ…」

「そっかー？ルーシィはルーシィなのになー」

ロキは俺たちにじゃあね、と言いながらこの場を去っていった。

そして、俺たちはギルド修復を一段落終わらしてルーシィの家に来た。

「ルーシィ元気かぁ！！！！」

「元気かー！」

声をかけながら家のドアを開けたナツ。いつもならルーシィの鋭いツッコミとかが返ってくるのに返ってきた。

シ～～～～～～～～～ン

沈黙だけだ。

「風呂か！！？お約束の展開が待っていそうで申し訳ないが」

「いねえ」

「風呂のチェックはえぇよ！！！」

「出かけてるようだな」

ナツとグレイおバカ二人を置いてエルザも部屋の中を見渡して呟く。

「ルーシィどこ～？　わ、わわわっ」

「くびゃあああ！」

一方で声をかけながら戸棚を開けたハッピーは、そこから溢れ出るほどの何かの雪崩に巻き込まれた。リクはその下にいたせいで雪崩に埋もれてしまった。

「何だこれぁ」

「……手紙だね」

「【ママ……あたし、ついにあこがれの妖精の尻尾に入る事ができたの……】」

「おいおい、勝手に読むもんじゃねえぞ」

「勝手に他人様の家に入るものでもないけどね」

封を切って内容を読み上げたナツはそのまま違う手紙の封も切る。

「【ママ……今日はエルザさんって人に会ったの！！かっこよくてキレーで……あのナツがね……】」

「む……」

ちょっと照れ気味のエルザに笑みを零しながらぼくも散らばった手紙を拾い始める。

「【ママ……聞いて！あたし、あのラグナに会えたんだよ！すごく強くて優しくて、お、男らしすぎてあたしちょっと話すだけで照れちゃった／／／】」

「あらら」

俺のことを手紙に書いているのか。

俺とエルザはその後、拾いった手紙を何通も見て気づく。

「…これ全部、ママへの手紙か？」

「だろうな」

「何で送ってねーんだ？」

「さぁな？」

「なんでこんなに書いてあるんだ？？」

ナツはそういいながらエルザを見る。

「なあエルザ」

言葉を続けたナツはエルザに声をかける。だが、エルザは黙ったまま机の前に立っていて、顔を俯かせていた。

「どした？」

「……ルーシィの書き置きだ」

答えたエルちゃんの手の中にあるのは走り書きが書かれたメモ。

「【家に帰る】、だそうだ」

「「何ィィ!!!?」」

その言葉にナツやグレイの声が重なる。

「帰るって何だよオイイ!!!何考えてんだアイツはァァ!!!」

「ま……まさかまだ責任感じてるのかなぁ」

「わからん……。とにかく急いで追うぞ、ルーシィの実家だ!!!」

ルーシィ宅を出た後、俺たちは荷造りをしてルーシィの実家へと来ていた。着いたのはその日の夕方である。

「ルーシィー！どこだー！？」

「ナツ！あれ！」

ハッピーの指差す方に見慣れた金髪が見えた。

「「「「ルーシィー！」」」」

「な…、何でー！？」

いる筈がない面子が現れたことに驚き、目を見開くルーシィ。

その後、興奮したナツがここに来た理由を簡単に言った。んで、ルーシィもここに帰ってきたのは別にギルドを抜けるためでなく、母親の墓参りであると話してくれた。

「それにしてもでけー街だな」

「あ……ううん、ここは庭だよ。あの山の向こうまでがあたしん家」

カチィィィン！

ルーシィの言葉に俺たちは固まった。

ナツは指で山を指して何かを語っている。

そして、

「あれ？どーしたのみんな？」

「お嬢様キタ――！」

「さりげ自慢キタ――！」

「ナツとグレイがやられました！！！エルザ隊長、ラグナ副隊長、一言お願いします！！！」

「ます！」

「空が……青いな……」

「雲はいいな～～」

「エルザ隊長とラグナ副隊長が故障したぞ――！！！」

「衛兵！衛兵はいないか～～～！」

……現実で見ればここまで広い土地が全部土地なんて聞かされたらもう……笑って、誤魔化すしかないだろ！？

「あはは！」

そんな俺たちを見て、おかしくなったのかルーシィは笑い始め、いつもの笑顔が戻ってきた。

それを見た俺たちも笑顔になり、今までの俺たちに戻ったのであった。

第２６話　星の行方（前書き）

タイトルは次話への布石です。

第２６話　星の行方

～ｓｉｄｅ：ラグナ～

俺たちは今、マグノリア西部にある盗賊団のアジトを退治に来ていた。

「いっけぇ！タウロス！」

「ＭＯォォォォォ！！！」

ドカァァァァン！

うん、ルーシィが元気に倒しているな。

「ぐはあああ！！」

ドサッ！

あ、最後の一人を倒したか。

「やったね！！！一丁あがりィ！！！」

「ＭＯォォ！！！素敵です！！！ルーシィさぁぁん！！！」

上機嫌でタウロスとパァン！とハイタッチを交わすルーシィの足元には先ほど倒した男以外にも何人もの男が倒れている。

「歯ごたえのねえ奴等だな」

「弱ェくせに賊なんかやってんじゃねえよ」

「オレらにこんな事してただですむと思うなよ」

「デボン様とライナ様が黙ってねえぞ」

「そいつらとっくに潰れてるよ」

「そうだな」

「え！！？」

既に動けない男を壁にめこっとめり込ませるナツに足蹴にするグレイ。その中で呟いた男にハッピーが言葉でバッサリと切る。

「ライナってのはこいつが？」

「……」

丁度いいのでさっきから掴んでいる男を先ほど言った男の前に投げる。

「ヒィィィ！？ラ、ライナ様！！」

男は俺をガクガク震えながら見ている。

「こっちも片づいた」

そこへ上へ行っていたエルザも

「さっすがエルザ」

「ひっ、ひぃぃ」

「む。逃がさん！！！！」

俺たちの強さに恐れを抱いた一人が隙を見て逃げ出そうとするがエルザの飛び蹴りが決まる。

「まだ仕置きが足りないようだな」

「あああああ、エルザさぁん～、自分にもお仕置きしてくださいいいい！！！！」

「強制閉門え～い」

エルザのお仕置きを見たタウロスが興奮し始めたのを見てルーシィが強制的に星霊界へ戻した。

「思ったより早く仕事が片づいたな」

「うおおおっ！！！暴れ足りねえ！！！！」

「十分暴れたじゃねーか、てめー」

「ルーシィ見てー、この宝石」

「綺麗だな～」

「だ――っ!!!勝手に持ってきちゃダメでしょ」

ルーシィはハッピーとリクが盗賊団のアジトから持ってきた宝石を見て、焦り出している。

そうしていると、

「あれ?ねえ、あそこにいるのロキじゃない?」

俺たちがロキの方を見るとあちらも気付いたのか、

「あそこにいるの……、ロキじゃない?」

「――あれ?」

「偶然だなぁ」

「おまえもこの辺で仕事かー？」

「ああ。みんなも？」

話しているとルーシィも来たせいでなのかロキが驚き声を上げた。

「ルーシィ！！！」

「あ……、ちょうどよかった！！！この前は鍵を見つけてくれて「じゃ、じゃあ！仕事の途中だから！！！！」って、ええ」

ヒュウウウウウウン！

ロキはルーシィから逃げるように走っていった。

「な、何よあれェ～」

「おまえアイツに何したんだ？」

「そーとーさけられてんぞ」

「何もしてない～～！！」

「あははは」

俺たちはその後、仕事が思った以上早く終わったのでマグノリアから少しだけ西に行った小さな村、鳳仙花村。東洋建築の並ぶ観光地で一泊していくことになった。

んで、俺たちは今露天風呂に入っているわけだ。

って言ってもナツとグレイは既に上がっているけどな。

ハッピーとリクは身体が小さいこともあってすぐにのぼせてしまう

ので2人より少しまでに上がっている。

今は俺一人で湯に浸かっている。

「ふぅ……いい湯だ」

女湯からはルーシィとエルザの会話が聞こえてくる。

すると、

「ラグナ――――!!」

エルザが大声で俺に呼び掛けてきた。

「どうしたー？」

「そちらはお前一人か――――！」

「おー俺一人だぞ――――――」

「よし、今からそちらに行くぞ」

……えっ？

「お、おい、エルザ。さすがにまずいだろ」

「もし、男が来ればお前の光魔法で私を見えないようすればいいではないか」

……お、俺の魔法はそんなことに使うものじゃねえのに。

「ね、ねえ、エルザ。さすがにまずいわよ（汗）」

「気にすることはない。ラグナには既に何回も裸は見られている。隅々までな」

「え、えええええええ！？」

むっ、ルーシィが驚いた声が聞こえてくるな。あれ？ルーシィって俺がエルザ達と付き合っているの知らなかったっけ？

「え、え、えええええ!?エルザとラグナってそういう関係だったの!?」

「そうだが?ちなみに私だけでなくミラやカナ、リサーナもだ」

ピキッ

あ、ルーシィが固まったのがわかるな。

「っというわけで……ルーシィ。お前も来るか?……ルーシィ?……固まってしまっているな仕方ない」

……何をする気だエルザ。

「とぉ!」

「ってええ?!きゃ、きゃあああああ!」

上からエルザとルーシィの声が……って!?

「ジャンプしてくるだとぉ!?」

俺のいる地点に落ちてくるエルザとエルザにお姫様抱っこされるルーシィ。

俺はすぐにその場から離れ、

バシャアアアアン！

「よし」

「よし……じゃないわよ！／／／」

ルーシィがタオルで体を巻きながらエルザを睨んでいる。顔を赤くしながら。

「エルザ。お前なぁ……ルーシィまで連れてくるなよ」

「いいではないか。ふふ、相変わらずラグナの身体は逞しいな」

「そうか？」

エルザが俺に抱きつきながらそういってきた。

ムニュ

「（くっ！エルザのやつ。俺が怪我でシテないことわかってて抱きついて胸を強調しているな！？）」

「（ふふ、どうだラグナ。こんなに大きくなったのもお前が育てたからだぞ）」

「（ムムム、ラグナとエルザが乳繰り合っているのを見ているとムカムカしてくるわね。あ、あたし、やっぱり……／／／）」

……色々と我慢するのが疲れた俺であった。

「始めんぞ――――っ！！！！」

「ぞー」

「なんだよやかましいな。オレぁ眠ーんだよ」

枕を両手に叫んだナツに布団に寝転がっていたグレイは言う。

「だって見ろよ！！！旅館だぞ、旅館！！！旅館の夜っつったら枕なぐりだろーが！！！」

「ったく……。枕なげだよ」

「何でなぐりになるんだか……」

呆れる俺とグレイ。そこへエルザとルーシィが入ってきた。

「ふふ……質のいい枕は私が全て押さえた。貴様等に勝ち目はないぞ」

「質って……」

それを余所に枕なぐりもとい枕なげに乗り気なエルザにルーシィの呟きが入る。

「オレはエルザに勝――つ！！！！」

「やれやれ」

「とう！！！」

「甘い」

「ぐべほっ」

エルザを狙ってぶん投げられた枕は標的に当たることなくその後ろにいたグレイの顔面に直撃した。

「ナツてめェェ！！！」

「ぐほっ」

ヤル気のなかったグレイはナツの行動に腹を立て、枕なげに参加す

る。

「よーし、あたしもまざるかなっ」

言いながら浴衣の袖を捲り上げていたルーシィは、次の瞬間もの凄い勢いで飛んできた枕に直撃し、障子と共に吹っ飛ぶ。

「や……やっぱやめとこーかな」

命の危機を感じ、そう呟いていたのだった。

「やれやれ。リク。寝るなら俺の布団の中で寝るぞ。外にいると3人に巻き込まれるぞ」

「そうだね」

俺は疲れているので周りに結界魔法を布団の周りに展開し、防音もして眠りに入った。

～翌日～

その翌日、ギルドでは睨みあうナツとグレイの二人がいた。盗賊団退治の際、かすり傷ひとつ負っていなかった二人はなぜか身体のあちこちに包帯を巻き、傷バンを貼っている。……俺が寝ている間に何があったのやら。

それに、

「何だありゃ」

「仕事先で枕なげしててケガしたんだって」

「どうやったら枕なげであんな大ケガを……」

同じように参加していたエルザはまったくの無傷なのでさすがと言えるだろうな。

それにしても、

「だいたいテメーは何で枕なげでムキになんだよ」

「オレはいつでも全力なんだよ」

「そのワリには負けてんじゃねーか」

「はぁ？　負けたのはオメーだろ」

「「ルーシィ！勝ったのはオレだよなっ」」

「うるさい」

ルーシィが今までにないほど不機嫌で、そんなルーシィの一言によって一蹴され、

「「ご……ごめんなさい」」

「すごぉい。エルザとラグナ以外にあの二人を止められるなんて……」

「漢だ……」

普段、エルザと俺以外に止められない2人にミラとエルフマンは驚いている。。

「ルーシィ、ずっと機嫌悪いね」

「そう？　フツーだけど」

「オイラのいたずらまだ怒ってる？」

「ちーがーう！　あたしってそんなに器の小さい人？」

元気のないルーシィをハッピーも心配そうに見ているな。

「ゴメン。なんかいろいろ考えごとあって」

「オイラ相談のるよ」

「俺もー」

「俺も何かあれば聞こう」

「うん……いいの……。ありがとう」

少し元気に笑うルーシィ。

「ねえ、ロキ来てる？」

「！」

そんな中、不意に聞こえてきた声にルーシィと俺、ハッピー、リクは、ミラのもとに集まる女たちに目を向けた。

「何アレ」

「町の女のコたちだよ。みんな自称ロキの彼女みたいだね」

「あいつ、結構女好きだからな」

「ラグナがそういうの～？」

「何が言いたいんだリク？」

ゴキ、バキ……

骨を鳴らすとビクビクし始めるリク。

「な、なんでもないです」

そんなリクを俺は無視し、女たちへと眼を向ける。

「昨日の夜、突然別れようって」

「キー！　悔しいけど私もよ」

「私も」

「アタイも」

その言葉にルーシィは驚き、俺に「あのロキから？」と言ってきた。

俺は「さぁ？」と言う。

「何で急にこんなこと言い出すのよ！！」

「さ……さあ……」

「もしかして本命が現れたの！？」

「いや……」

「誰！？　このギルドにいるの！？」

相手をするミラもさすがにタジタジな様子。ルーシィに顔を向けると、

「ルーシィ～。助けて～」

「ちょ……」

ルーシィは女たちに睨まれ、その場から去って行った。

「……なんだかな～」

俺はそんなルーシィがとても哀れに思って来てしまった。

「ミラもあんな極限状態の女たちの前でルーシィの名前を呼ぶなよ。俺を呼べばいいものを」

「あ、あはははは……ごめんなさい。少し後悔しているわ」

しょんぼりするミラの頭を撫でる。

「あ……もう、相変わらずこの癖は治らないわね」

「仕方ないだろ。まだ、小さかったリサーナとかカナ、ミラ、エルザにこんなことをしていたんだから」

ミラも嫌がるそぶりも見せず、逆に自分から頭を俺に撫でさせるように近づける。

「ん／／／ね、ねえ、ラグナ」

「なんだ？」

「きょ、今日……その……ヤる？」

モジモジするミラには悪いが、

「すまねえ。今日はちょっと用事ができちまった」

「そう……」

シュン

あ―何かミラが寂しそうにしているウサギに見えたぞ一瞬。

「今度はミラ優先にしてあげるからそう、寂しそうにするなよ……な？」

「……うん！」

元気になったミラを見ながら俺はギルドから自分の家へと戻ってい

った。

……今日はロキがレオに戻り、そして……ルーシィの星霊になる日だからな。俺の存在でレオ餓鬼絵でもしたら元も子もないし、見に行かないと。

そう、思いながら家へと戻る俺であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0652y/

Fairy Tail～魔を極めし者～

2011年11月30日00時53分発行